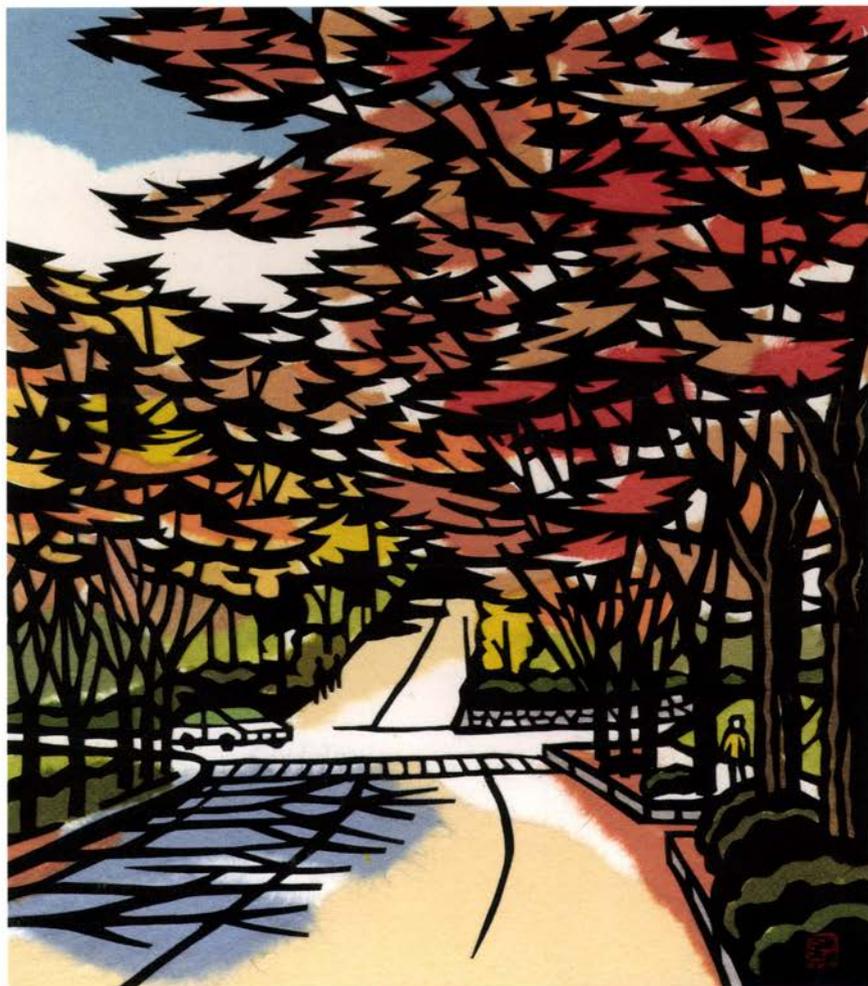


川柳塔

平成二十九年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇八六号



日川協加盟

第23回 川柳塔まつり特集

No.1086

十一月号

お知らせ

第6回 春の川柳塔まつり誌上大会案内

課題と選者（各題二句 共選）

「つくる」 □ 江畑 哲 男（番傘川柳本社）
居谷 真理子（川柳塔社）

「力」 □ 天 根 夢 草（川柳展望社）
古今堂 蕉 子（川柳塔社）

「雑詠」 □ 矢 沢 和 女（時の川柳社）
小 島 蘭 幸（川柳塔社）

投句料 一〇〇〇円（切手は不可）

締 切 平成30年2月20日（火）消印有効

※詳細は12月号

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■ 今年中に発表された句に限りま
■ 締切 11月20日（本社事務所宛）

★事務所受け付け時間のお知らせ
土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時
までにご利用いたします。

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。
同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び
誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い
申し上げます。

★個人 一口 1／9頁 二、〇〇〇円
1／6頁 三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または記入して
お申込み下さい。）

★団体 次の四種といたします。

- ① 1／3頁 六、〇〇〇円
- ② 1／2頁 九、〇〇〇円
- ③ 2／3頁 一二、〇〇〇円
- ④ 1 頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 十一月二十日

川柳塔社

第66回東北川柳大会

小島 蘭 幸

地下鉄の駅を上がると、佐藤岳俊さんがひとり立っておられました。ヤアと声をかけて一緒に宿泊するホテルへ、ロビーは明日の大会の盛会を予想させるほど多くの人で溢れていました。

勝山館で開催された前夜祭は、歓迎の言葉、あいさつ、祝辞、鏡開き、乾杯、アトラクション、選者紹介、まるで全国大会と思う程の豪華さでした。美味しい料理、美味しいお酒もいただくことが出来ました。

河北新報創刊120周年・川柳宮城野社創立70周年記念・第66回東北川柳大会は、出席者260名を遙かに越える盛会でした。我が川柳塔社から高瀬霜石氏と私を選者を務めました。選を終えて大会場に入ると、アトラクションの邦楽演奏の最中でした。美しい笙の調べを聞いていると、震災直後の平成23年に開催された、第35回全日本川柳2011年仙台大会の隼石隆子仙台大会実行委員長の力強い挨拶を思い出し

ていました。そして故加藤鯉さんの笑顔がふっと浮かんできました。仙台大会終了後、「蘭幸さん一緒に飲みましょう」と誘って下さったのです、総勢24名、居酒屋で大いに盛り上がりました。あれからもう6年になるのですね、歳月の早さには驚くばかりです。

呼鈴は壊れて誰も還らない 朱 夏

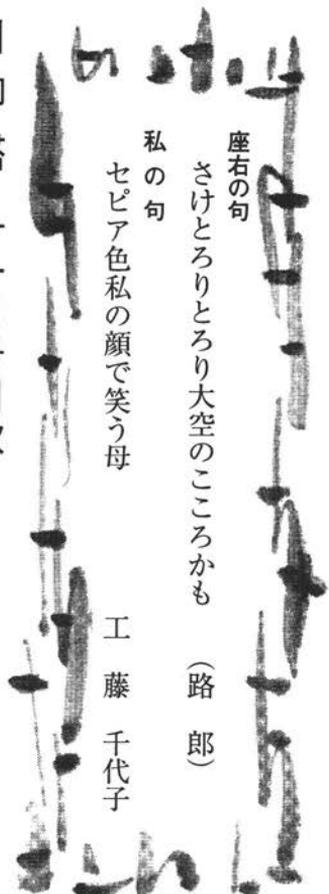
戦争は放棄しました日章旗 完 司

全日本川柳協会賞を受賞した木本朱夏編集長、宮城県議会議長賞を受賞した新家完司理事長、お二人の活躍は目覚ましいものでした。平井美智子さんも大阪から出席され、川柳塔社の存在感を大いにアピール出来たことを嬉しく思いました。懇親会も素晴らしい大会を締めくくるにふさわしいものでした。

夜の歯を磨くわたしの戦後処理 隆 子

参加賞としていただいた隼石隆子主幹の「樹下のまつりⅡ」を拝読しながら私は今、二泊三日の川柳の旅の余韻に浸っています。川柳宮城野社のますますのご発展を願っています。

さて川柳塔は平成31年に創立95周年を迎えます。素晴らしい大会にしたいものです。



座右の句

さけとろりとろり大空のこころかも (路 郎)

私の句

セピア色私の顔で笑う母 工藤 千代子

川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「枚方市香里けやき通」

■巻頭言 第66回東北川柳大会	小島 蘭 幸 ……(1)
ニユースにブツブツ	仁部 四郎 ……(2)
川柳塔 (同人吟)	小島蘭幸選 ……(4)
句集の森	木津川 計 ……(46)
川柳塔の川柳讃歌 ⑬	麻生 路 郎 ……(47)
新川柳鑑賞 ⑨	自選集 ……(48)
■ショートエッセイ 一茶と薫風	水野 黒 兔 ……(51)
温故知新	川上大輪選 ……(52)
水煙抄	橘高薫風句抄 ……(71)
誹風柳多留一二篇研究 53	英語 de Senryu ⑦ ……(72)
せんりゅう飛行船 ⑧	吉村侑久代 ……(74)
	新家 完 司 ……(75)

ニユースにブツブツ

仁部 四郎

「立て混んだ」ではなくて、「立て込んだ」と辞書にはあるが、今年も日本の夏の空はずいぶんと立て込んだ。

八月二十八日の佐賀新聞には、「湖底に山里の面影」という見出しで、県下最大の水ガメである嘉瀬川ダム（貯水量七一〇〇万立方米）の写真が出ていたが、「記録的短時間大雨情報」という気象用語を覚えたのも今年の夏のことである。

実は、十四日の夜十時頃に、ごく近所の住宅に落雷があった。その家はずいぶん近所では鉄筋三階建てで火災というほどの火災にはならなかったのだが、周辺のA家ではパソコン、B家では冷蔵庫、C家ではテレビというような被害が出た。私の家では電気温水器と電話をやられた。

「立て込んで」いるのはお天気ばかりではない。北朝鮮のミサイルのことが大事である。

テレビに映る北朝鮮のアナウンサーの声が、ヒステリックな内容を甲高い声で

第23回 川柳塔まつり

同人総会・おはなし・各賞発表・記念句会・懇親宴

(76)

■句集鑑賞『川柳塔』の一行詩人・小島蘭幸論……平 宗星……(92)

愛染帖……新家完司選……(94)

檸檬抄「応 援」……山口光久・斉尾くにこ共選……(98)

句会燦燦……弘津秋の子……(101)

一路集（「文化」）……米田恭昌選……(102)

「ナビ」……小谷小雪選……(103)

初歩教室「ほんやり」……居谷真理子……(104)

インスピレーション・ナビ 印象吟……大西泰世……(106)

川柳塔鑑賞……山岡富美子……(108)

水煙抄鑑賞……小沢 淳……(110)

各地柳壇（佳句地十選／森山盛桜・安土理恵）……(111)

柳界展望……(124)

十一月各地句会案内……(126)

■編集後記（ひとこと／吉岡 修）……朱夏・まつお……(128)

座右の句

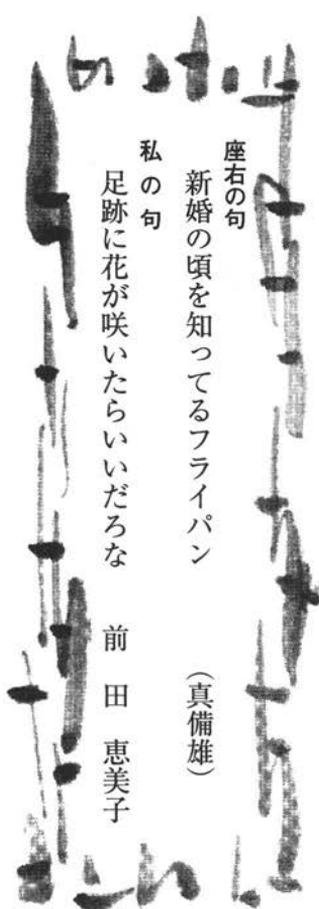
新婚の頃を知ってるフライパン

(真備雄)

私の句

足跡に花が咲いたらいいだろな

前田 恵美子



伝える日が多かったが、二十九日はミサイル発射という事態に至った。北海道から関東にかけて、Jアラートが発令されたが、その伝達に「不具合」がかなりあったというのも肌寒いニュースである。それにしても言うべきなのか、ニュースの「立て込み度」が一年一年と複雑になっていくように私は思う。

自然災害の影響で、夏休みを短縮して二期が始まった学校のこと、全国学力テストの対策に苦心している学校のこと、いじめ対策に悩んでいる学校のことなど学校に関するマイナス記号のニュースが多いし、スポーツの話題にも暴力やクソリのカゲが時折さして残念である。

ニュースはもともとマイナス記号のものが大きく扱われて印象にも強く残るものだが、政界、財界、官界の不祥事のニュースが、「出物腫れ物所嫌わず」じゃあるまいに続出するのもイヤである。

さて、家人が言うところの川柳の短歌でこの稿を終ることにしよう。「正直の上に二字付く老兵某ニュースを読んでブツブツ言ってる」

(八月二十九日)

川柳塔

小島蘭幸選

西宮市 亀岡哲子

兄弟姉妹供花溢れる家族葬
賑やかに思い出話尽きぬ通夜
家族葬まだまだ続く大家族
免許返納して自転車で転ぶ
折あらば友の名付けた「笑おう会」
百までも生きてひよっこり雲に乗る

札幌市 三浦強一

大国の主らしからぬ喧嘩好き
一言へ家内反論マシガン
まだ望みあるから詠まん反戦詩
二番手の流した汗は語られぬ
天国より地獄に長い列が出来
大向う唸らす一句まだ詠めぬ

藤井寺市 鈴木いさお

豆秋にひと目惚れしてから久し
行き詰まると句集『ふるさと』をひらく
大好きな人あの世にもこの世にも

孫の輪の中にもう一人の私
愛妻弁当コンビニの味がする
おとぎの国へ母は還って行きました

羽曳野市 吉村久仁雄

たっぶりの水で花枯れ夫枯れ
前向きな気持が歩幅広くする
招待状ないが天国行くつもり
ハグ一杯しても好きだと言えぬ人
虫食い川柳脳がいい汗かいている
スイーツも酒もたしなむ二枚舌

弘前市 高瀬霜石

持ち駒で結構ほくでよかったら
昨日はひとつ今日はふたつの忘れもの
お願いもお詫びも同じ90度
ムズカシイこと言う底の浅い奴
充分にベツトボトルも武器になる
ここいらが峠と今日もそう思う

桜井市 安土理恵

形より心で生きるマイウエイ
少々の歪個性と思いましょ

お腹いっぱい食べたことないサクランボ

恥じらいを忘れています足の裏

もういいかいまあだだよって八十歳

風の子が遊んでたんだ吹き溜まり

大阪市 谷口 義

瘦せた秋刀魚きみのせいではありません

梨剥いてからご返事致します

判りやすいように仕立てておきました

気圧に左右されているカラダです

せっかくここまでできたのだハツケヨイ

訳の分からぬ内にサスペンスが終り

鳥取市 吉田 弘子

あなたとの暮らし私の樹齢です

待つ人の居ない家ですマイベース

日野原さんに叱られそうな老い支度

泣いた数生きる力と信じよう

淋しさを案ずる孫に誘われる

雨上がり詩人にさせる原風景

橿原市 居谷 真理子

善人の下手な喧嘩がまだ続く

酷暑日の遠くに響く工事音

Tシャツの黄色が胸を張れという

自らを汚してしまふ百合花粉

清張を練れば昭和の汗埃

快晴で淋しいときにする指輪

鳥取市 森山 盛 桜

診療所くらいが丁度いい病氣

孫達の造語も日本語のようだ

ご逝去と言ってもらえるのか私

真相はどうか先祖の武勇伝

積んだ夢天地無用に願いたい

サイコロを振ったら様になる男

橋本市 石田 隆彦

記憶から消してマイクの前に立ち

古代より一強は男のロマン

プライドを捨てて介護の手を借りる

自分史の記憶あの日には戻らない

老梅に流れる血潮まだ熱い

青テントとても勝てないエコライフ

紀の川市 辻内 次根

線香花火がポトリと消えた夏

物忘れ生きていけないかも知れぬ

整える呼吸落ち葉の音がする

送り火の消えて寂しくなった庭

種のある方が巨峰の味がする

ひと時を観音さまのたなごころ

鳥取県 斉尾 くにこ

しあわせだったと思いたい人あり
真に受けぬ傷つく言葉ほめ言葉
ほんとうに話したいのは違うこと
戦いが終わり戦いが始まる
みつともなさを分かちあい笑いあい
今は今の歩みに合ったお天気図

奈良県 渡辺 富子

足音をしのばせ逃げていく若さ
愛情が友情になる老いふたり
わたし流にほんのり咲かす夢がある
来し方の話とぎれて虫を聞く
身の内の尖りを消した子の手紙
残り時間今日の出会いをハイにする

大阪府 升成 好

泣いて笑って等身大で生きている
不器用な手だが握るとあたたかい
荷崩れを歳月かけて積み直す
欲望を詰める器に底がない
クラス会未完の恋に逢いに行く
我流でもとことんやれば本物だ

神戸市 細川 花門

新風を興す若者のみならず
孫たちとラインで会話する時代
藤寝椅子はくの形に凹んでる

ほくは瓜妻は茄子の花盛り
妻もまた老後の趣味がひとつ増え
柿の木の木蔭わが家の奥座敷

岸和田市 岩佐 ダン吉

まゆつばの話じっくり聞いてやる
無芸だが笑顔たくさん持っている
三江線廃止の報に絶句する
育て勝つかうに学んだらどうか
握手した数を誇りにしておこう
今ひとりでも反対の手を上げる

大阪府 井丸 昌紀

招待状会費は取ると小さい字で
お茶をぐいっとビールのつもり休肝日
悪ぶっていてもやさしさあふれる目
千円返し一万円の無心
今宵また明日に響く安い酒
自動運転自主返納は見合わせる

大阪府 高杉 力

怒ってるらしい絵文字のないメール
亡くなった友の名残る住所録
転勤で知った地酒を飲み続け
昼来ると迷ってしまう北新地
出勤の人波眺めモーニング
こんなもんやと思うしかないもんじゃ焼き

岡山市 丹下凱夫

反省が出来ないサルが居て困る
正当化するのに喋り過ぎている

スクワット真つ正面に備前富士
明けきらぬうちから町に行く鴉

ストレスが溜まってだんご虫になる
ミサイルでなくてよかつた流れ星

枚方市 海老池 洋

ヒグラシを聞かないままに法師蟬
飼い犬のお供にされている散歩

安心はそこそこ混んでいる医院
シンク口の美人人魚と見してしまう

取扱い注意貼りたくなる老躯
忙しい日日が生き甲斐かも知れぬ

和歌山市 古久保 和子

梨一個秋が転がり始めたぞ
かぎ針でチクチク秋の一日編む

病人を待たせる椅子が固すぎる
ドーナツの穴からデイクエアの車

ここにしか住めぬ根っこが深すぎて
エンピツを削ると明日が見えてくる

和歌山市 福井 菜摘

蟬り解けて未来の森が見え
しがらみを抜けて掴んだ自由席

まだ燃えるものあり軽い靴を選ぶ

包容力まだまだ母に追いつけぬ
たんたんと背伸びをせず ゆく余生
逝けません私を頼る人がいる

西宮市 緒方 美津子

大輪の花が咲きそうご婚約
九月号登り坂だと塔まつり

文句なしうまかつた福島の桃
好き嫌い許さぬママのみじん切り

なるほどを小出しにしてる母元氣
丹精の城をバックに菊花展

八尾市 宮崎 シマ子

決心が度たび変わる成長期
私は化石時代おくれの物知らず

目いっぱい年金使い残さない
豊作の田に彼岸花はなざかり

窓ガラス拭き青空と仲よしに
用心用心孫三人は男の子

神戸市 能勢 利子

ホームステイ文化の違い知るために
英語では言いたいことが言いきれず

褒められると単細胞はよく動く
雨の日は買い物止めて有り合せ

子や孫の前では弱み見せぬ夫
運動会兄と妹白と赤

札幌市 小沢 淳

勿体ないが転がっているゴミの山
連続十年入選十句こんなところ
眼力を磨こう遠い空見詰め

Jアラート逃げ場忘れた疑似平和
川柳の趣味生き生きとボランティア

弘前市 浅田 隆樹

熊の出る村にも介護保険料

料理家の皿を洗うも見てみたい

毒の無いアリでせかせかせ生きてます

孫走る転びそうでて転ばない

雨読よりおもしろ過ぎるワイドショー

弘前市 稲見 則彦

線香花火ほとり落ちる秋の風

運命を田園を聴く集く虫

明日のため朝顔の種選りすぐる

曲がりたい曲がりがたくない城下町

まず妻の機嫌伺う十七時

弘前市 岡本 花匠

脳トレに戸惑う私の焦れつたさ

平和だね球根植えて春を待つ

高原のホテルで粹なティータイム

泰然と山唄の声聴き惚れる

いつときの孤独味わう老夫婦

弘前市 今 愁女

生かされて母五十回忌無事済ます

重陽の佳き日に逝った母偲ぶ

お墓の花先ずはカラスが高観する

制裁にも立ち向かう気の北のくに

秋冷にイヴ・モンタンの懐かしく

弘前市 須郷 井蛙

百均で買えるが古い蠅叩き

半分は残した料理で満足し

北国のよさ褒められ夏の陣

ナルホドねイクラと鮭の親子丼

カーナビは教えてくれぬ人生路

弘前市 高橋 洋子

馬鹿でかいくしゃみで眠気吹き飛ばす

返信は要らぬと書いて待つ不安

好々爺ドジも笑いに丸い家

亡き母のメガネ一役読書秋

四人目の親を見送るうるこ雲

弘前市 福士 慕情

家の前チャルメラ高く高く鳴る

単身赴任世話になつてるカップ麺

侘しいなあ一人で食べるカップ麺

僕に合う味で最良のラーメン屋

はしご酒締めは馴染みのラーメン屋

青森県 松山芳生

ブランドを着ると毬がよく弾む
こっそりと笑顔浄土はまだ遠い
じわじわとむらさき色になる迷路
遠浅の海から幽玄のひびき
たましいの形に仕上げる北の風

男鹿市 伊藤 のぶよし

この世百年ゆれるあたりを補修中
ずかずかと生きているかと友が来る
充電のかたちでそつと膝枕
夫婦漫才今日も全開つつが無し
初期化したって秋の心はそのまま

塩竈市 木田 比呂朗

弱気の元は丹田のあたりから
曇天の一日の締めを酒にする
自己過信今夜も酒で膨らませ
髭剃って今日の気力を確かめる
琴線にズカズカ触れてくるスマホ

さいたま市 星野 育子

入れた力抜くタイミングが大事
鳴らすクラクションにも悪意と善意
一度も役に立たずスイズアベン
ひと言で傷付きひと言が癒やす
ほどほどのストレスがありやる気出る

上尾市 中村 伸子

一応はたしなめてみる姉として
面倒くさい人だと思ふその癖み
ラストダンスもう踊れないかも知れぬ
皆既日食アメリカまでは見に行けぬ
ホームランまた打たれたと音を消す

東京都 川本 真理子

目覚めてはこの世の人を点呼する
その人が透けてくるまでじつと見る
手のひらに何かと話しかける日々
セミの声最後はソロの絶唱で
アイアイから順に重ねるパンダの名

八王子市 川名 洋子

少しづつ老いてはいるが気は若い
ぼたぼたと記憶の漏れが止まらない
すいとんが食卓にのる八月忌
雲に乗り違う景色を見たくなる
起き抜けのコーヒー今日をオンにする

横浜市 菊地 政勝

旅先で愚痴の続きを聞かされる
横文字も入れ偉そうに口を出す
少子化に人待ち顔の遊園地
お誘いの見知らぬメール無視をする
弱点を全て見抜いている鏡

富山市 島 ひかる

六十年ぶりに話した風のこと
まだ青い実がプロポーズされて居た
白い雲一緒に見てた日を想う
今の幸過去へ思いを深くする
事に依ると友の姉さんだったかも

犬山市 金子 美千代

いちぢくのジャムがおいしく出来て晴れ
ひとり旅の練習のビジネスホテル
発見が愉快世間知らずの旅
裏道が好きスッピンの息づかい
七回忌家族だけでという知らせ

犬山市 関本 かつ子

原発よ魚の海を盗らないで
娘に送る荷にも一冊みすゞの詩
咳をする度に夫が顔上げる
直売に大助かりの野菜高
一日がずれてやっぱり晴れ女

可見市 板山 まみ子

真夏日の昼寝の耳にピンポーン
秋冷にサイズを直す衣更え
お互いの頑固ますます鼻につき
こだわりを些細なことで他人は言う
半分は寝ていた高いコンサート

愛知県 早川 遯行

心得はないが茶席の客となり
美しい愛は汚れていくばかり
気付かれぬように気付けてほしい愛
八十のハンドル捌きまだいける
今はもう見ているだけのアユの川

鈴鹿市 小河 柳女

結婚の糸はからんで切りにくい
水たまりジャンプジャンプの人生よ
わが影が左右へちらちらと迷う
使い古しの言葉はそつと川に流す
音だけの寂しい花火聞いている

京都市 清水 英旺

煮えたぎる夏だったわいと法師蟬
たればのくり言しきり老いの身は
骨密度さらにピンチは脳密度
百五歳の生きざまに胸熱くする
相撲とりと一緒に力む砂かぶり

京都市 藤井 文代

嘘も方便でつむいだ糸もある
口裏を合わせた糸はすぐ絡む
聞き役になると絡んだ糸解ける
サークルの中で無敵のマイペース
損と得このバランスで合う収支

京都府 榎本 宏子

叱るのも疲れたほめて終わりにしよ
義父の死より泣きじゃくる義母ベットの死
チャンプルを食べて忘れた母の味
庭の隅こっそり茗荷恩返し
自分史の華とも二度目ウエディング

京都府 三宅 満子

いらん事書き残さずに潔く
夜目遠目帽子かぶればバリジエンス
自慢する蚊が刺すうちはまだ若い
薬味替えて毎夜豆腐が主人公
阪神が勝つと気分良く眠れる

長岡京市 山田 葉子

反抗期靴が壊れているんだね
反面教師いるから説教は無用
パソコンが言うこと聞いてくれません
平成のバトンしつかり渡せるか
カーナビに覚えこませた君の街

八幡市 今井 万紗子

財ないが福呼ぶ耳は二つある
ルビ振って忘れぬように書く名前
毛糸玉たぐり寄せれば母の胸
笑うとこあなたとわたしよく似てる
糸トンボ私の周り離れない

大阪府 内田 志津子

居住まいを正して義母に反論す
うっかりと入った趣味に縛られて
以下余白おまけの余生ケセラセラ
ご馳走も一味足らぬ一人めし
こっそりとライバル越える策を練る

大阪府 宇都 満知子

子等集う温い余韻が二三日
句が出来ぬちっぽけだなど秋の雲
全うする老いの背中に学ばされ
道具つてある日突然こと切れる
夕焼けが今日のためいき浄化する

大阪府 江島谷 勝弘

いいヤツだ奢ってくれるめしと酒
忘れへんあの世できつとカタキ取る
気が弱い割りには図太い私です
アンパンとビールがあればしあわせだ
引き際の美学は早め早めです

大阪府 榎本 日の出

若い時十人家族今ひとり
自分にも時どきあげるごほうびを
金持ちで無くて良かった欲がない
毒舌に少しの愛が光ってた
てにをはを違えば意志が通じない

大阪市 榎本舞夢

これで最後言いつつ娘と又も旅
世の中は進み豊かさ溢れてる
神社仏閣名所巡りは素晴らしい
進化してこそ古代の良さが輝いて
我が家にも古き宝がありそうな

大阪市 大川桃花

老いて病み子に有り難う増えてくる
肉食べに土日外泊する患者
することが無くて血圧計つてる
吹けば飛ぶよな婆さんだった陰のボス
施設の友来とで電話で誘うけど

大阪市 大治重信

黙禱に頭を垂れて時計見る
ブレーキをかけて娘の恋を見る
打水に濡れて祇園の石畳
味噌汁の香りが届く今朝の秋
不如帰別れの夜に泣き続け

大阪市 奥村五月

物言わぬ母の背中が泣いている
黄昏に政治談義の縄のれん
好きだから嘘と知りつつ信じてる
幸せと思う心に夢芽生え
松茸の匂いを嗅ぎにデバ地下へ

大阪市 笠嶋惠美

初ボーナスでまぶしい孫のプレゼント
御見舞は電話元気な声をきく
変変変救急車呼びひとり乗る
たつぷりと老いを見せますこれも愛
性格は変わらないから気にしない

大阪市 川端一步

敬老日逢いたい人に会いに行く
失った若さはペンでとり戻す
親切に目には見えない利息つく
わが花野まだまだ先でよろしおす
嬉しくて眠れぬ夜はひばり聴く

大阪市 熊代菜月

五七五指折るけれど出てこない
老いを知りなっとくせよと天の声
ローソクがゆれて聞こえる亡母の声
カラオケで唄えば皆んな歌手きどり
浮かぶ名に昔かさねるなつかしさ

大阪市 古今堂蕉子

目も耳も歯さえ謀叛の仲間入り
欠点と美点数えて許すとす
出来ないとはつきり言える齢やのに
米だけは和製 松茸ごはん炊く
讚美歌を歌いだけのクリスチャン

大阪市 近藤 正

食材と器で醸す和食の美
実に上手い印象操作安倍総理
オール沖縄心一つに平和賞
北発射Jアラートが姦しい
大阪にカジノ誘致は身の破滅

大阪市 坂 裕之

まずちよつと話すことからお仲間
構わずに好きにさせよう未だ若い
じつとしてゐるから不満また溜まる
次の日へ考えすぎて嫌になる
先を読むあなたが傍で頼もしい

大阪市 田 浦 實

気風よしセンスまたよし盧舎那仏
十二神将モダンダンスもやるかまへ
河内音頭のリズムに乗って良い汗だ
一人の孫盆にはちゃんと来てくれる
起つ歩くしゃがむ坐るで老い管理

大阪市 津 村 志華子

ニューモードの案山子に風がたわむれる
まったりの玉露で憩う午後三時
難聴同士話つつ抜けするデンワ
監視カメラの下でりんごを選っています
生きるのも逝くのも老いの大仕事

大阪市 寺 井 弘 子

あふれる湯たまの温泉羽目外す
辛口のコメント朝の茶がうまい
懐工合口を出そうか考慮する
きつちりと公私のけじめ心得る
よろこびがことさら目立つマタニティー

大阪市 寺 本 実

コメントはたくさん来るが寄付はなし
壁紙にせめて諭吉の柄を貼る
秋風が催促してる庭仕事
孫の顔見てももいだす母の顔
正直にコメントできぬ妻の歌

大阪市 栃 尾 奏 子

やんわりと押し倒されてみる秋だ
じゃれあつたのは遠き日の秋の戯画
再会は突然秋の交差点
じゃあまたねもう会うことは無いけれど
思い出の赤を見つけた美術館

大阪市 原 田 すみ子

鉛筆の倍は使ってる消しゴム
座るたびため息ばかり積む机
ネットワーク妻の計画そつが無い
一日は同じ時間で濃さ薄さ
習わずに自然になつたおばあちゃん

大阪市 平 井 美智子

泡立ち草の中で傾く父の墓
ポストまで行ったり来たりして日暮れ
結局は足の形になった靴
マシユマロの芯に残っている痛み
真つ青な空 私が満ちてくる

大阪市 平 賀 国 和

源信展あの世のことを教えられ
忘れたい過去が目覚める午前四時
延暦寺賢治の碑もあり好きになる
地獄極楽あの世のことでないみたい
憂き世でも生きる限りは楽しまん

大阪市 藤 田 武 人

熱爛におでんそろそろ欲しい秋
一品の大盛妻は許せない
手を繋ぎでかい輪にする人と人
鮮明な記憶のページ捲れない
わがままな女神が仕組むエピソード

大阪市 藤 原 千恵子

意を決しMRI検査する
母好物焼ナス供え秋彼岸
嫌な物見てしまったか物もらい
腹見せてあがくカナブン手を添える
お互いに名前呼ばずに久しぶり

大阪市 吉 内 タカ子

炎天下日本の空を核通過
戦争で亡くした絆つき纏う
汗ばとぼと新聞読めば癒される
毎日を足を楽しくウォーキング
お辞儀して稲穂が秋のご挨拶

大阪市 若 本 安代

自我一つたためば見える明日の夢
深呼吸吸足の先まで秋が来た
約束の小指はいつも空けている
乗り越えた痛みが今は宝物
追憶に彩り添える曼珠沙華

堺市 柿 花 和 夫

終着駅で待つてる人がきつと居る
九条の重さ知ってる焼け跡派
妻の背に膏薬貼って今日を閉す
せわしない顔が並んだ牛井屋
知らされぬ僕の歩行可能距離

堺市 加 島 由 一

ヘルパーが来る日は部屋をかたづけ
耐えてます水飲んでます熱帯夜
誕生日の花は蕎麦です亡母は地味
遺書代わりおとぎ話を書いている
ヒョウ柄が豹に見えます美人です

遺族年金皆無に等し共稼ぎ

堺市 源田 八千代

朝な夕な微笑む遺影癒やされる

体当たりのしのぶの演技魅せられる

旬の句も二ヶ月経つと色褪せる

傘寿の祝孫のホテルの食事会

堺市 齋藤 さくら

暑かった夏の疲れがどつと来た

肩の凝る話は明日眠くなる

ワイドショー不倫会見飽きてくる

集めてる寄付の行き先わからない

小四の孫に将棋を教えられ

堺市 坂上 淳司

お袋と妻等距離に置き平和

嫁の里に引き付けられて行く息子

老いなどに負けじと歩く日に5km

太平洋を跨ぐと脅す北の鬼気

至近距離がもどかし過ぎる拉致家族

堺市 澤井 敏治

折々のうたがごころに響く 秋

しみじみと聴けば涼しげ法師蟬

人生は夢覚めたらあの世かもしれぬ

蜘蛛が糸垂らしわが家を覗いてる

シンプルな祝辞に世辞のかくし味

年の功つかずはなれず生きていく

シナリオのない人生はまだ最中

正直に生きて真上の陽を浴びる

宵のくちひと風呂あびて犯科帳

前向きなまぶしい頃が懐かしい

堺市 内藤 憲彦

不戦の誓い風化させない八月忌

肩組んでお国訛りの屋台酒

寅さんに会える気がする赤トンボ

二千安打もフルスイングの積み重ね

一人前に育ててくれる得意先

堺市 矢倉 五月

喜怒哀楽どれにもちよつと欲しい糊代

雨垂れも川になろうと誘い合う

開店よりも閉店セール多くなり

思い出になつても脈を打つあの日

墓参りもう涙出ぬ七回忌

池田市 栗田 久子

変わる景観もう里山は消え果てた

炎暑去る自然は人を裏切らぬ

思い出に浸る間もなくくる眠け

立ちくらみ気づけば支えられていた

子の元へ身を寄す御近所の過疎化

和泉市 横山捷也

神様が支えてくれてたはずの膝

久しぶり誘いの電話軽い靴

錆付いたような八十路のネジを巻く

涼み台お国訛の出る地酒

遺書書いてから出た老いの力瘤

茨木市 島田誠一

ヨレヨレの札は苦勞の語り部だ

暑い寒いのはやく割には四季を愛で

惜しまれて逝くか気ままにはびこるか

足腰と財布に問うて練る旅路

澄み切った「北京秋天」今いずこ

茨木市 藤井正雄

コンサイスわが青春の眠る棚

水割りの氷眺めている失意

遅咲きのスタートだった渋い芸

北ホテルなどと悲しい歌にする

義理と見栄相乗りさせたのし袋

貝塚市 石田ひろ子

お見舞いの声が聞こえて来る手書き

バスタより胃に馴染んでいるうどんそば

お料理の余韻味わうお漬物

御神籤の大吉にまだ会うてない

化粧という魔法を掛けて背を伸ばす

河内長野市 植村崑代

花火ではありませんよね北朝鮮

風邪四十日戻りの遅い八十八

毎日遊んで過ぎるも楽でない

被害妄想うっかりすれば引き込まれ

ここまで来て感謝するしか他はない

河内長野市 大島ともこ

大儲けには縁の無い運を持つ

平成へ別れの言葉を模索中

痒いとこ届き過ぎたか嫌われる

爆発のサインは妻の丁寧語

余命宣告幸せの風見えてきた

河内長野市 梶原弘光

わたしと酒どっち大事に絶句する

えーかげんにせーよ不倫に政活費

よく笑い喋ったものと床に就く

断食で無茶した胃腸休ませる

無性に会いたくなる友2・3人

河内長野市 木見谷孝代

秋風に誘われ大地掘り起こす

朝顔へごくろうさんと種を採る

ふる里の潮の香届くさざえ飯

膝痛のトンネル光見えてきた

相方が弱気になつて縮む距離

河内長野市 黒岩靖博

残照に命をかけるド根性

あくびした妻に負けじと大あくび

寒暖の変化についていけぬ日々

日本晴れ鶏頭の朱夏とコラボして

ミサイルで威嚇して来る北の国

河内長野市 谷 久美子

うっかりも偶にはあると身を庇い

何も彼も曝け出してる老いの日日

極楽へ弥陀の膝へと敷くレール

筋道を通した亡父の正義感

おもしろく生きて閻魔に媚を売る

河内長野市 辻村ヒロ

デイサービス休みの席が気にかかる

私の灰汁夫の網で清められ

生かされて自問自答の古希の坂

皆同じ姿勢のスマホ銀河鉄道

なんやかんや言うてあなたが気楽です

河内長野市 藤塚克三

三日連続逆転負けで酒が増え

隣近所昭和温もり今は失せ

俺のへま妻が笑って無しにする

筋書きを自分で創る片想い

うっかりとぼんやり続き頼抓る

河内長野市 村上直樹

励ましと愛をたっぷり一〇五歳

遠吠えの犬もひとりか流れ雲

資源保護ウナギのたれであなご丼

あっさりより濃い目のスープまだ八十路

旅支度遠くて近い黄泉の国

河内長野市 山岡 富美子

だとしても引き算だけで終われない

菊花展折目正して観ています

薬局も医院も知った顔ばかり

平凡な暮らしを告げる鳩時計

どうしても花屋のまえて立ち止まる

岸和田市 宮野みつ江

西空に生れたてです糸の月

丸い虹見てから空を見る正午

車窓から見えた花木の気になって

目が合って固ったのはゴキブリで

脳梗塞五年未練のダンス靴

岸和田市 雪本珠子

街灯が人恋しさをつのらせる

ペランダで虫の会話を猫と聞く

他愛ない会話で保つ老い二人

新聞の社説を猫に読み聞かす

輪の中に川柳の花咲かせてる

四條畷市 吉岡 修

三分粥經過良好太鼓判

月見酒このムードなら言えそうだ

金のあるボスを敬うのが派閥

国産も中国産も海生まれ

志たいのいのとこ消えてゆく

吹田市 太田 昭

プライドを捨てて明日に賭けてみる

後戻りさせぬ八月十五日

愛だけで生きて行けぬと振り返る

カーナビの指図に路を迷いだす

猫の子と離れ離れに寝る猛暑

吹田市 木下 敏子

毎朝の丸い朝日に励まされ

女郎花背のびしている庭の隅

あら不思議いつから耳が惚けたのか

生きてゆく足を鍛える朝の道

仏壇の花に優しい千日紅

吹田市 須磨 活恵

いわし雲年甲斐もなく里ごころ

エアコンのおかげのり切りました夏

娘や孫へ残す真面目なタネ袋

もう逢えぬ人が恋しい秋の月

老いてなお生きる証の米を研ぐ

吹田市 野下 之男

ほめたりけなしたりでも良く持つね

神様のお助け僕は霧の中

この年で頭悩ますカタカナ語

もう一度父の笑顔をつかみたい

有難う夜も寝ないで扇風機

高石市 浅野 房子

ごひいきの力士負けたり休んだり

空蟬のああもう秋になったのだ

エアコンに喉はカラカラ水を飲む

暇だけどしんどい事はおことわり

デイサービス週に2回が楽しみだ

高槻市 指宿 千枝子

此の所控え目にしたぶらり旅

庭の土草木もわかち合い遊ぶ

猫じゃらしよもぎなど摘む散歩道

身の丈の暮らし小瓶に草活ける

食卓の小瓶の草よ明日は晴れ

高槻市 片山 かずお

頑固な人と思えば二つあるツムジ

中学生棋士に微笑む将棋盤

小器用でちよつとちよつとと使われる

無理ばかり言うなと神に叱られる

ちゃんと来てまっせと神の鈴を振る

高槻市 島田千鶴子

知らぬ人と話し込んでる路線バス
化粧落としほっとひと息熱いお茶

月だけが虫の合唱聞く長夜

受験生か明かりが消えぬ窓がある

素っ気無いお辞儀少年変声期

高槻市 初代正彦

食材で店選り分ける妻の籠
妻の愚痴相槌もうち梨を剥く

盛会へそつと幹事のサプライズ

マイカーに紅葉マークをやつと貼る

二本打つてもシャイなお人柄

高槻市 杉本義昭

後ずさりしても明日はやって来る
隣の猫が様子見に来る昼下り

履歴書に書けぬ裏技持っている

イチ押しは露天風呂での手酌酒

べらべらと嘘をほんとのように言う

高槻市 富田美義

認知症避ける策です五七五
ドッコイシヨ膝から迫りくる加齢

前後左右身体揺らして歌う孫

自転車も免許返納八十路坂

ご招待窓から富士と神田川

高槻市 富田保子

からからの心洗えた暮参り
今年はネ昭和の人が消えて逝く

御飯が美味しいこと感謝して余生
ゆっくりと仮面を外す里帰り

こぎれいに古いねばならぬ衣替え

高槻市 原洋志

あの角を曲がればきつともつと秋
独り暮らし知ってるらしいミニトマト

また命ポイ捨てされていくニユース

すつきりとするには少し言い足りぬ

ミニ缶のビールで痛み少し消し

高槻市 松岡篤

天下国家よりも気になるサンマの値
無口では無くて知識が無いのです

プラス面探して褒めて育て上げ

ぶらり旅最中に会社から電話

ネットから知識撃いで評論家

豊中市 池田純子

置きみやげ金魚は秋の色になる
顔見知り犬も笑顔ですれ違う

私まだ蚊にはお相手されている

離乳食フルコースよと婆が待つ

もう四歳まだ四歳の夏過ぎる

豊中市 上出 修

床に就くとたんに頭冴えてくる
日食を卑弥呼は予言できたかな
大臣になれば記憶が飛ぶらしい
記憶では末は博士のはずだった
富士山に秋を知らせる薄化粧

豊中市 藤井 則彦

高飛車な人から順に蚊に刺され
速読を遅読に変えて気も和む
私の値打ち以上の字は書けぬ
生きているだけでも人は価値がある
老老介護共に寄り添う秋夜長

豊中市 松尾 美智代

徐徐に日差し秋へと移る終活も
辛いときみすゞの詩集読んでいる
読むたびにころすなおになりなみだ
神さまの檄だと思ふ感謝です
先輩のいつもの気持飴ふたつ

豊中市 水野 黒兎

かき氷今日でおしまい赤トンボ
秋風にふとふり返る遠い過去
岬からの海に地球の丸さ知る
秋風に園児がやがや湧く花野
酒飲めばチクワの穴に福の神

富田林市 片岡 智恵子

力まず急がず老いの坂道どっこいしょ
世界は無気味ミサイルが上空をとぶ
敗戦で自由になれた花あかり
わたしの理想オリンピックをみて逝こう
滝水の落ちゆく先はみな知らず

富田林市 関 よしみ

ポケットのロマンに秋の風当てる
目の前に迫るチャンスに乗ってみる
街の中秋を探してとく絵の具
沸点を突く歯切れよい一言よ
一言をギョツと絞って灰汁を抜く

富田林市 中井 アキ

夏ばてで寝込むと嫁がとんで来る
気付いても直ぐには立てぬドアチャイム
モナリザの微笑みどこか淋しそう
お節介な隣の老友は呆けません
良薬のひとつに嫁の良い笑顔

富田林市 中村 恵

心がけていつも笑顔を磨いてる
本気だと言うが笑っている瞳
笑顔には国も言葉の壁も無い
実の熟れる順に落下という運命
これからの答自分で探さねば

富田林市 肥山一文

リーダーは私ですよとボチが鳴く

隠し事妻の追及目が泳ぐ

あの世へは古本一つ持って行く

マドンナの笑顔で和むクラス会

会話にも飢えてテレビに話しかけ

富田林市 山野寿之

ポケットの小銭弄る立ち飲み屋

歟の汗ホツとひと息青田風

貧しくも愛ひとしづく義捐金

ライバルに影を踏ませておく余裕

五階まで便利を避けて足と腰

寝屋川市 籠島恵子

遠回りするにはきつくなってきた

ニガウリを佃煮にしてまた返す

誘われてたまには乗ってみるグルメ

最後にはきつと言えないありがとう

ありがとうはいいつも小まめに言っている

寝屋川市 伊達郁夫

定年の顔をしている散歩道

百均の正味の値段思案する

笑ってる陰で誰かが泣いている

力抜くことを悟った曲り角

歎異抄触れて心が透き通る

寝屋川市 富山ルイ子

努力すれば夢現実のものとなり

生き難い世の中せめて笑い声

上げ膳に据え膳幸せに生きる

お守りになつてゐるらし癌保険

終身保険ささやかな葬儀代

寝屋川市 平松かすみ

Jアラート鳴ればトイレに逃げるのみ

願わくば核シエルターのいらぬよう

イロハなら手旗で出来るおばあちゃん

歳重ねぶどう一房持て余し

一周忌過ぎたら跳んでみようかな

寝屋川市 森茜

かなかなかな夏を尽くしているように

生きてゐることは莊嚴蝸叩く

老いるとは童になつていく鏡

この橋を越えれば淡々と嬬

裏白の紙は懇ろ吠えている

羽曳野市 安芸田泰子

灯を消せば夢連れてくる虫の声

自問自答自分の点は甘くなる

日記帳感謝感謝と留めたい

炎天下影は必死でついてくる

古里に青春の思慕埋めている

羽曳野市 宇都宮 ちづる

投薬と漢方サプリみんな飲む

リハビリが始まり暦埋まり出す

郵便受け夕刊だけが届く日々

サッカーも野球も負けた日の早寝

スマホタツチ思わぬ人に繋がった

羽曳野市 徳山 みつこ

さあ老いと格闘オクラ肉ひじき

投函を終えてさあさあ栗ご飯

名の連呼だけで高得票だとは

刃こぼれの鈍に亡夫の御霊あり

彩雲へ空想重ね軽くなる

羽曳野市 中川 ひろ介

歯が抜けて毛が抜け依怙地だけ残る

何もないでと実家の煮物しみる味

還れない墨絵の鳥が遠くなる

プライバシー無視の災害避難場所

欲の皮剥げばきれいなすもも達

羽曳野市 永田 章 司

大文字消えて秋風嵐山

地方食厳しい自然耐える知恵

自分史に消したい過去がふたつある

真実は消され記憶なしになる

故郷は田舎のまままでいて欲しい

羽曳野市 仲谷 真

まだ九月おせちの子約始まった

花屋さん月見の花が売れないよ

秋祭り地車を引く人が無い

ミサイルが飛んで来ても逃げられず

大相撲戦国場所面で面白い

羽曳野市 藤原 大子

心の窓開いて楽になれとベン

こだわりが小さくさせている世間

寄り添って美しさ増す小さき花

やる気出せば体力ちよつと待てという

ほんやりと返事していた大仕事

羽曳野市 三好 専 平

お酒さえ飲めない奴とさげすまれ

子も孫もないのに酒をやめている

深酒はするなと言うて母は逝き

土下座して酒を断る体たらく

嘘だから信じられず愛の歌

東大阪市 北村 賢 子

青信号やさしくメロディーが合図

喜怒哀楽共に紡いできた相手

逆風に抗い追い風に転ず

いただいた命それなり生きた自負

はるか遠く父母覗いてるうるこ雲

東大阪市 佐々木 満 作

人知れず天寿全うした孤独
味勝負お客の舌は肥えている

母さんの帯締め粋な濃紫
淡白な質で未練を残さない

秋最中ススキにトンボうろこ雲

枚方市 小林 わ こ

山車を引く里の子にある夢無限

日本良い国旬の野菜が食べられる

胸底の積木を崩すこの猛暑

逃げたいとき逃げる二つの部屋がある

今にわかる厳しい意見言っておく

枚方市 丹後屋 肇

草書体僕のこころを鷲掴み

我が辞書にスランプばかり載っている

駅伝の樺重たい選手権

ポジティブに死と向かい合う三部経

息苦しくなって目覚める孫の脚

枚方市 寺 川 弘 一

生きる為道路マップを買い替える

昆虫も殺せないけどステータキが好き

認知症昔神童だったけど

消しゴムと修正液がよく減るの

知らないうちに平均寿命越えていた

枚方市 二宮 山 久

頂点でこんなうまい空気吸う
飲んでみて味方とわかる酒を酌ぐ
欲捨てて生きる人生楽しけり

こだわりを捨てて老後を楽しまん
酔うほどに古い話に花が咲く

枚方市 二宮 紫 鳳

底力出して乗り切るこの猛暑

コスモスが咲いて我が庭おもてなし

感謝することは招く良き人生

秋の街弾ませながらおニュー靴

食欲の秋でお手上げダイエツト

枚方市 藤 村 亜 成

灼熱の陽を浴び喘ぐ墓洗う

死後のこと今なすべきこと墓に問う

だらしなく涎垂らしていた至福

抑止のための武装ごっこで減らぬ核

買ひ被る期待裏切るのがこわい

枚方市 山 口 弘 委 智

重い腰甘い言葉におどらされ

挑んでも跳ね返される五七五

功成らず名も遂げられず化粧とる

来年へかかせるビール残念会

豊かさを探す愉しみ白寿まで

藤井寺市 太田 扶美代

八十になつてもヤキモチ焼いたげる

ここでは泣きません涙壺がない

これくらいの哀しみならば大丈夫

無言電話神様だったかも知れぬ

マannersを一新風はもう秋に

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

鈴虫が人と交わる距離で啼く

半分はいも^うとだつた彼岸花

神経性の胃炎胸板まで薄い

恥ずかしさ捨てたらにんげんになれた

泣きそうになつたら姉も泣いていた

藤井寺市 高田 美代子

これならどうだ腕相撲指相撲

なる程ね賢い人は輪の外に

ライバルの背中視野から遠ざかり

ロゼワインでカンバイ風景が変る

上下左右を見飽きて眠くなつてきた

藤井寺市 田付 絹枝

スタートはシンプルライフと言われても

友伏せて絶えて淋しき絵の手紙

嫁お洒落スカート一つ流行色

どっこいしょ よいしょで家事も一区切り

やるせなき亡息子への思いをベンに乗せ

藤井寺市 増井 ヨシ枝

介護3生き甲斐もらう五七五

障害をもつて人にやさしくなりました

何もかもフツと忘れる日もあつて

花愛でて優しい心頂いた

花の氣を一杯もらう秋の日々

藤井寺市 吉田 喜代子

クーラーを使わず眠る心地好き

畑終え風呂に朝刊読む至福

眞子様の婚約祝う一市民

ミサイルで他国の海をゴミにする

人の輪も斜めにそつと入るこつ

藤井寺市 若松 雅枝

眞子さまのめでたい話弾む秋

つくつく法師声張り上げて夏惜しむ

老いの知恵一目置かれた時もあり

暑さ去り旅のチラシが其所此所に

ミサイル発射夕餉の箸も重くなる

松原市 森松 まつお

いも焼酎妻はロックの三杯目

寝つきいい妻が何とも羨まし

二三日外の空気を吸つてない

大雨の予報に迷う趣味の会

除草剤持つて久々墓参り

箕面市 大浦初音

赤いくつ履けばなんだか踊れそう
おだやかでなければいい句作れない
メモらねばすぐに消えてく五七五
ローン終え家も人にも老い目立つ
娘に言われ夫すなおに耳をかす

箕面市 酒井紀華

未練たつぶりローカル線のベンチ
満天の星仰げばほやき忘れてる
足跡を残さず消えたしのび逢い
人間の賞味期限が延びてきた
濃淡の気迫がせまる父の筆

箕面市 出口セツ子

楽しまな損と月一夫婦旅
温泉でのんびり観光しない旅
頼まれるうちが華だとボランテイア
日々予定あつて元気が湧いてくる
検査表どこも悪くはないと言う

箕面市 広島巴子

山登り一步一步と蘇生する
うそでしよう会ったばかりの友が逝く
友偲び夜長を虫と泣き通す
絵手紙に彼岸花描き天国へ
新米に香香味噌汁至福なり

八尾市 内海幸生

動けない足が聞いている祭笛
台風の跡を照らす陽つらからう
散る時季はとうに過ぎたに散る気なし
好き嫌い人は死ぬまで劫をもつ
千年の霊樹すごいな歩けぬが

八尾市 高杉千歩

シオートステイ渡り鳥です秋となる
脳よりも手足大事とやっと知る
八桁番号手首にベッド車椅子
シオートステイ スマホで繋ぐ二十四時
救急で来たから靴が見当たらぬ

八尾市 寺川はじめ

でっかい官舎朽ちて戸建が並ぶ世に
気迫では負けぬが体前のめり
不透明な世の中だけど日々平和
情報過多へ老いのスマホが手が出ない
透明と信じた社にも裏表

八尾市 村上ミツ子

不倫流行なげいても嘆いても
神ってるひとの周りが騒がしい
痛いと言うとうるさいといなされる
ろくなことはないお金が出しゃばると
食欲がおちない八十の胃袋

八尾市 山根妙子

終活の余白に恋の詩を書く
万灯会辛い記憶が風に揺れ
ミサイルを上げる花火のように打ち
肩揚げをおろし娘になつてゆく
美しい記憶にリボン掛けておく

大阪府 米澤 淑子

虫の音が小さいですねお月さま
ミサイル飛来してもうちには地下が無い
空席の花束悲し新学期
桔梗の根揃って湿布にした戦後
チヨビチヨビと出す婆ちゃんの知恵袋

神戸市 上田 和宏

亀と妻うなずき合つて会話する
赤とんぼちようど燕が巣立つ頃
奈良散歩鹿がゆるりとおもてなし
終戦にまだまだ学ぶことがある
一歩づつ前に行こうとだけ思う

神戸市 奥澤 洋次郎

半世紀我が家の味は定まらず
愛ということばで片をつけられる
4Bは私の生き血吸っている
松茸採りの自慢話が消えた里
きつぱりと終わつた今日の缶ビール

神戸市 山口 光久

わんぱくが尻っ放り腰で蟬を追う
欠点を味方につけて切り開く
図書館で明日のヒントを探し出す
ちぐはぐがあつて人生面白い
仏壇を断食させて気儘旅

神戸市 山口 美穂

亡父母の今を教えて彼岸花
秋刀魚の詩口遊みつつサンマ焼く
暑さに負け籠が外れたままの秋
ビル高くうろこの雲の邪魔をする
青春の一こまをふと思う秋

神戸市 山崎 武彦

冤罪を晴らす幟が陽に眩し
僕だつてテニスしました軽井沢
グルメ旅最後は妻の鮭茶漬
世渡りの上手な風に乗るつもり
地図のない町で飾らず有りのまま

明石市 糀谷 和郎

ごめんねと言えず引きずる明日も雨
惚れました決め手は君の箸使い
いい波を待つてるきつときつと来る
亡母の背の丸さを刻が呼び戻す
青空へ遠出しようか秋の地図

芦屋市 黒田能子

色色とあつたが今も添うている
意気投合タイプの違ふ二人です
歯車の一つ軋んできたようだ
見て見ない振りもあなたのためだから
団欒を今も忘れていない椅子

芦屋市 竹山千賀子

雑踏にのまれ自分を見失う
晩年を舞う彩りを模索中
ひとり寝を気遣うような窓の月
出る幕がまだありそうで生きている
競争心捨てそれからのいい流れ

尼崎市 市坪武臣

計画は財布の意見聞いてから
お帰りと響く故郷の寺の鐘
金持ちも同じ納豆食べて居る
歯車が噛み合わぬこのもどかしさ
大車輪働く蟻の冬支度

尼崎市 加川靖鬼

こっそりと蒔いたら間引きされた種
母さんのあじ味壺にためてある
アウトレット渡り歩いて買ったムダ
見る人のこころで変わる月の顔
犬までがオッチョコチョイという家系

尼崎市 永田紀恵

客一人なんだか不安過疎地バス
バカヤロー一喝主義の父でした
閉店セール看板かけ十年目
横恋慕伏せ字の君が居る日記
保護色になってあなたの腕の中

尼崎市 藤井宏造

春よりも冬へと向かう秋が好き
見切り品買ってこっそりVサイン
納豆の混ぜ方それぞれの流儀
買うまいと決めて試飲のワイナリー
のんびりと出来ない質で細身です

尼崎市 藤田雪菜

奥の間に灯りが点り盃蘭盆会
ふっ切れた思い朝顔との対話
化粧して自分一人の星になる
診療の待ち時間にはアメがいる
何色にも染まれる私白が好き

尼崎市 山田耕治

無人店買ってくださる人がいる
溝掃除して青空をひと跨ぎ
句が出来ぬ散髪屋へも行ってみる
保母さんと園児がわたる歩道橋
肩叩き券十枚綴りもらったよ

加西市 金川宣子

また転けた擦りむく膝もまたひだり
すれ違ふ美女はやつぱりいい香り
星三つ財布にゆとりできた味
寺参り満願叶う菊日和
つつがなく四季の暮らしを繰り返す

川西市 大坪一徳

戦いを終えた男に牙は無い
思い出と言うには傷が深過ぎる
サル曰く進化を止めるのも知恵だ
時として回りが見えぬ母の愛
センスある次も御出でと初句会

川西市 日野岡和之

竜宮の土産なにより紅さんご
年重ね幸せ重ね子沢山
何時の間に涼しい合唱蝉しぐれ
おもいやり孤独老人訪問日
結論はどうにもならぬ長電話

川西市 山口不動

クラス会幹事が逝って開かれず
先生が一番元氣と国便り
息子達成人病の適齢期
中学の宿題はムリじいじはば
下戸でした酒飲みからは哀れまれ

篠山市 酒井健二

パチンコに通いつめたと訃報聞く
骨上げをこいつ笑顔で見てるやら
善人になったつもりで愚痴を聞く
独り言言つて気持ちを整理する
華やかなセレブの間に笑み浮かぶ

篠山市 酒井真由

大甕にざっくり風の野のすずき
レモン一顆静かにほほえんでいる君へ
機嫌よく遊ぶ温泉日和なり
極楽もかくやと空は澄みわたり
イブ・モンタンの枯葉が舞って街は秋

篠山市 北澤稠民

この一杯心やすらぐエネルギー
敬老に備え平凡積み重ね
一枚のカード人生くるわせる
祭り寿司亡母の味にはまだ遠い
何事も意地を通した若い頃

三田市 足立つな子

選にもれその悔しさがバネになる
郷ぐらし新車にかえて娘が嫁ぐ
乳酸キャベツ腸が喜ぶゴロゴロと
ふるさとはケアハウス増え様変わり
惜しまれていい頃合いのいいゴール

三田市 上垣 キヨミ

涼風にホットコーヒー胃に浸みる

指折って秋の七草教え合う

秋味覚酷暑に絶えた深い味

ばあさんもナイターを見てエキサイト

おはぎよりビールが良いと亡夫の石

三田市 上田 ひとみ

うれしいなまた新しい仲間です

知らぬこと一杯あつてよく眠る

何ひとつ去年と同じことはなく

あたふたと重ねています年齢を

いい声で呼名しますね拍手です

三田市 尾崎 一子

幸せの真ん中に居て秋の風

核廃絶行き詰まる平和宣言

戦いは人間の定めでしょうか

秋の実り農にいそしむ背が光る

告知受け残るいのちはまだ温い

三田市 北野 哲男

たまゆらの恋果したか蟬落ちる

背中にも表情のある反抗期

久しぶり親父の髪も減ったなあ

聞こえてる振りをするから惚けにされ

ケアハウスパンツに名前書いてある

三田市 久保田 千代

そこまでの頑張り秘訣教えてよ

スポットライトにひとりよがりの夢の中

小気味良い歯型りんごの丸かじり

帰り道ひとりに惜しい月を見る

議員などならねばボロは出なかつた

三田市 多田 雅尚

ほろ酔いのセットで酔つた例なく

仏壇は無いが遺影に手を合あわす

A面の現役B面の老後

脳トレに二日遅れの日記書く

人工の頭脳も所詮ヒトの知恵

三田市 谷口 修平

ただいまと風鈴鳴らす千の風

良い事もごく稀に言う酔つぱらい

炎天下草書でミミズ乾涸びる

泥付きの四季を売つてる道の駅

新聞の俳句日本の四季を読む

三田市 野口 真桜子(晶子改め)

未知数の子やる気そがれる横並び

良い事がいっぱいあった日の不安

良く言えば羅漢ばかりの露天風呂

断片をつなぎ合わせて出す答

座標点ドアの向こうに置いてみる

諍いの種はいつでも酒のこと

術後しばらく顔出しにくい泌尿器科

長男ほど出来を気にせぬ次男坊

正座出来ぬ喪主に遺影の苦笑い

歯痛止めおまけにくれる胃の薬

三田市 福田好文

大回りプランへ孫と時刻表

無人駅琵琶湖眺めてにぎりめし

イチローの胡麻塩頭に見る苦勞

この僕と視点が違うプラタモリ

一つずつ夕日を閉じていく棚田

三田市 堀 正和

涼風と紫が好き萩桔梗

ばつちりの寝起き三食欠かさない

爪切りもデイサービスでありがたい

グループのはずむ会話は旅のこと

楽しみの食事感謝の手を合わす

高砂市 松尾 柳右子

句会へはからだの声を聞いてから

陰の力見ていてくれる人がいる

病院の電話独占してひとり

ビデオ判定勝負の流れ変えました

カエルの合唱爆睡の旅の宿

宝塚市 田中 章子

西欧の国それぞれの夏の色(ヨーロッパへの夏)

空青くカウベルの音風に乗る

諍いを知らず草食む牛の群れ

涼風のスイスの宿で「川柳塔」

テロ写すテレビ見ながら旅の宿

宝塚市 丸山孔一

タンポポへ土を許せよ石だたみ

ファッションのセンスと姿勢の仲違い

パソコンで切なる願いと言われても

そのうちと切抜き二十七年経った

自画自賛他人を待ってる時間無い

西宮市 秋元 てる

初恋が彷彿とする藍ゆかた

夢ならば自由自在よカスミ草

カレンダー繰れば紅葉の世界なり

覚えてた恩師の一句出てこない

君は太陽わたしも月と言われたい

西宮市 西口 いわゑ

しこりまだ敷居が高くなるばかり

小学生の挨拶うれし小京都

横断歩道孫にさとされ手を上げて

食用菊つまみに祖父の上機嫌

落ち込んでいられぬ孫が明日来る

西宮市 福島 弘子

西脇市 七反田 順子

いい夢だ母がホホエム一瞬だ
神仏みんな同じと思うのです
ピンポーンに犬が返事をしてくれる
越中の風の盆行く若かった
散歩する鯉と合うのが楽しくて

姫路市 古川 奮水

雑踏にトイレを捜すひとり旅
惣菜はデパ地下ですと決めてます
乗る度にビール弁当揃うたか
灰皿に社名飾った時代消え
楽しみの三横綱が見えぬとは

南あわじ市 萩原 狸月

サービスの過剰が客を甘やかす
男にしてと候補者ののどほとけ
肩書がついて人相悪くなり
退屈を知らぬ傘寿の好奇心
出かければ友達の有難さ

奈良市 阿部 紀子

五年前写真真名鑑若いなあ
五年後は臉二重にして撮るわ
あちこちに挨拶しましょピラを貼る
街路樹を切り大鉢につつじ植え
墓じまい墓地が次々更地です

奈良市 大久保 眞澄

罪を憎んでやっぱり人も憎みます
育毛剤ネコで試してから買おう
すきやきにしよう玉子とネギがある
香典袋五年もお金入れたまま
戦力外自分で気づけたらいいか

奈良市 加門 萌子

朝顔の数をかぞえて日々平和
田圃無い身だが稲見ることが好き
地震とか水とかもつと怖い国
町内の避難訓練役立つや
スポーツの快挙に浸るいい時間

奈良市 高橋 敬子

地位力なくて友情続けられ
写真には生前言わぬことも言い
朝ドラにかくも昔と知る昭和
形だけ才女に見せるお免状
公約が本気にしては多すぎる

奈良市 辻内 げんえい

ふるさと納税今年も届くサクランボ
桃ブドウ嫁いだ娘から産地もの
あっぱれを連発しての孫保育
日に二回お茶しましよう誘う妻
ふと思う苦勞知らずに生きてきた

奈良市 山本昌代

ボクが手を引くよと五歳走り寄る

食欲はルンルン老いを遠ざける

しつかりと食べる私にくる讚辭

一つ覚え三つ忘れてまるくなる

エイヤツと出掛けすつきりして帰る

奈良市 米田恭昌

引き際が大事とロボット首なでる

五〇歳まだ半人前の長寿国

天使やないわ私白衣の労働者

孫の部屋にチラリ本気度垣間見る

二歩下がり三步進んで師に続く

生駒市 飛永ふりこ

夏バテを撥ね除けられず秋迎え

やさしい声ほんに底には情の濃さ

グーチヨキパー地道でないとおぼつかぬ

一食を抜くといらつくダイエツト

花たちもきれいと誉めりやお華麗

香芝市 大内朝子

嫺やかに揺れて芯ある秋桜

わたくしの想いは一途子孝行

好きな事している幸よ青い鳥

秋風に御洒落ところが顔を出す

太陽と月のカッブルおめでとう

奈良県 安福和夫

亡き友の三人分はまだ生きる

次世代に何残せるか模索中

老婆心ばかりじゃ誰も耳かさぬ

再生可能エネルギーまだ内に秘め

黄泉で待つ友に会う時ドヤ顔で

奈良県 谷川憲

ビル街は吹く風までも忙しない

霊園もバリアフリーを売りにする

ナラ枯れに獣の飢えが気にかかる

住宅街ウリ坊見たとスマホ鳴る

不具合を言うたび葉増えていく

奈良県 中原比呂志

点と線スマホでつなぎ密会中

老眼鏡越しに目薬二三滴

敬老会アクシデントの救急車

あつたはず置いたはずだと日が暮れる

豹柄のおばちゃん背中も口もチャックなし

和歌山市 磯部義雄

病み上がりの妻の手料理舌つづみ

日常は水と空気の恩忘れ

妥協した夜は悶悶寝つかれず

敬老会ちよつと気になる人が居る

老いばれと言われたくない身嗜み

和歌山市 上田紀子

目の前の運を逃がした意気地なし
お豆腐に助けられてる齒の痛み
露地栽培自然の味に感謝する
じたばたはもう出来ません膝に腰
良い所探せば私にもひとつ

和歌山市 坂部紀久子

凭れ方下手でいつでも疲れてる
年ですネと言う病名もあるらしい
米寿くる芋蔓大豆粕を食べ
澄みきつた空へミサイル赤い染み
赤信号スマホタイムの様なじり

和歌山市 武本碧

見栄などはとつくの昔捨ててある
裏返しすると案外うまくいく
名前入りタオル朝夕顔を撫で
仲間割れしてるひまな崖の縁
見る人をすべて虜にする黄金

和歌山市 玉置当代

えんぴつの芯尖らして反抗期
ペチュニアの花の強さに負けた夏
人に言うほどでもないよ赤とんぼ
まじないをしても浮気がなおらない
日常のリズム狂ってきた誤算

和歌山市 土屋起世子

グーチヨキバー負けても笑う秋の天
大きく窓開けて朗報飛び込んだ
緊張をジョークでほぐす年の功
見送りの満面の笑み寂しそう
リフォームでくつろぐ畳消えている

和歌山市 堀富美子

五体とはうらはらハート燃える日も
開き直ると雑音も素通りだ
母さんの真似は出来ない忍の道
気が付くと年齢だけが走ってた
晴れ姿孫の門出に詠む柳句

和歌山市 松原寿子

手紙の束解けばドラマがこぼれ落ち
大正の小銭眠っている財布
生きる限り心折れても前を向く
非通知の受話器は取らぬ昼下がり
一步先読んで心を和ませる

岩出市 藤原ほのか

私を私らしく描きたい
通販であれもこれもとトライする
通販で買えないものは愛らしい
通販でピンピンコロリ薬買う
道づれは月と太陽だけいい

海南省 小谷小雪

琴よりも澄んだ音色を奏でたい

恥じらいもそのうち死語になるのかも

和解して少し多めのお小遣い

私より英語がうまい子が増える

楽しみは新語を脳に座らせて

海南省 堂上泰女

台風が有情無情を連れてくる

正直な友の余韻に浸る夜

愛してたんだろう光らす新仏

八日目の蟬へ贈った石の墓

嫁さんへ感謝シャネルを買って待つ

紀の川市 宇野幹子

原点になるまでネガを巻きもどす

少年の目に青空が果てしない

それからの夫婦へ洪が抜けてゆく

脳内にドミノ倒しの風が吹く

喜寿の恋まだ糊代がとつてある

紀の川市 北山絹子

支え合う二人の明日は素晴らしい

かすみ草ピンクのバラに憧れる

飼猫が内緒話の中にいる

一線を越えてデートを繰り返す

昭和史を辿れば父の海に出る

紀の川市 楠原富香

燃え尽きてやっと自分を取り戻す

満ち足りた日々が宝の山となる

運のない人に寄り添い生きていく

旅の果てやとと波長が合う夫婦

頂点に立って見逃す落とし穴

紀の川市 山東日出男

眼鏡かけ再度値札を確かめる

お捻りも飛び交っている村歌舞伎

モンタンの枯れ葉肴に酒を酌む

投げ銭をあとで拾っている平次

白黒のテレビに酔っていた昭和

田辺市 岡本昇

心なしか総理のお顔瘦せたよう

防衛相華奢で荷物が重すぎた

法相の答弁すべてアドバイス

是々非々の公明与党恙無し

働くという内閣の細い腕

鳥取市 池澤大鯨

雨男疫病神じゃない筈だ

雨男連れに晴れ女がいてる

蛇の目傘今では母をお迎えに

雨の日は砂利道裸足歩いてた

水溜りもはや鏡にする気なし

鳥取市 奥田由美

同人にマルをする時緩む頬
都合よく身体が痛む面会日
ラブよりも食い気に逃げる二人旅
鏡台に悩み薄める美顔液
自画像も虚像と変える首飾り

鳥取市 加藤茶人

チクチクと妻の小言が効く夜長
封印を解けば女子会良く喋り
補って余る天使の良い寝顔
ぜい肉を掴み飲んでるウーロン茶
友以上恋人未満以下余白

鳥取市 岸本宏章

好きなこととしても疲れる八十路坂
そうかそうか僕にもあった反抗期
離岸流海にもあった落し穴
ISも金正恩も愉快犯
文化勲章目指そう趣味の川柳で

鳥取市 岸本孝子

食材を使い切る日を決めている
残り物出るほど料理作らない
市場へは少なめの金持つて行く
盆飾り嫁に任せて手は出さず
後は頼むと嫁に告げる日来るだろう

鳥取市 倉益一瑤

脆い情重い約束してしまう
指メガネで覗くわたしの着地点
黄色い声はまだ出るうちは大丈夫
毒舌のオトコにちよつと興味わき
三面鏡裏から冬がやって来る

鳥取市 坂本とも湖

人質を無視するテロが許せない
身勝手な津波が町を七つ吞む
大臣に誰がなろうとボロは出す
錦織選手の汗が勲章だ
笑うなよ老いには老いの愛芽生え

鳥取市 田中天翔

神様にもらったセンス愚痴いわぬ
人生の夕焼け迎へ忙しい
裏方のとつても暑い納涼祭
雑草に命を落とすことは無い
旧姓の五倍生きたらすみません

鳥取市 谷口回春子

記憶無いどこかおかしい茶番劇
眼が泳ぐ言葉の奥に見える嘘
街角の監視カメラは嘘つかず
優しさに寡黙な夫本音吐く
もういいと言った途端に欲が出た

鳥取市 永原昌鼓

華やかに駆けたポルトの夏終わる

夾竹桃咲いてあの日が甦る

玉音は昭和ドラマに欠かせない

大花火君と見た日も遠くなる

ポルトにも賞味期限がありました

鳥取市 中村金祥

森しんしん読経と蟬がコラボする

痛み分け出来ぬところが核兵器

鍬を打つ錆びないように鍬を打つ

車椅子自分が乗った気で介護

こうすれば良いねと孫のする指南

鳥取市 夏目一粹

極楽はやつぱり呑んで寝ることだ

凡人で幸せでした楽でした

時どきは現を離れて夢を見る

人はみな迷いまよって墓に入る

自販機がポツンと過疎の村にある

鳥取市 平尾菜美

大所帯のお蔭か認知食い止める

運まかせいやいや苦勞買つてする

程々のプライド鼻が座ってる

つんのめるロボが時代の先をゆく

目配せの効く間柄ああ夫婦

鳥取市 福西茶子

目指してはいるがゆらゆらダイヤ婚

来るものは拒まず盆の大わらわ

十五夜の月が花火を称えてる

断捨離に待ったをかける長寿相

スイカ種食べても腸に芽は出ない

鳥取市 前田楓花

目が合つて付度なんだと気づく

騒動の言い訳ばかり聞くテレビ

耳だけで不倫報道聴いている

嫌だけど挨拶くらいするオトナ

冷たいが信じていない理想主義

鳥取市 山下凱柳

ゲリラ豪雨日本列島振り回す

不倫不正どこ吹く風の倫理感

五七五に喜怒哀楽を謳い込む

年金で赤字を埋めるなんて無理

非正規社員何時になるだろ結婚は

倉吉市 猪川由美子

総理夫人疑惑うやむや逃げ切つた

これ野党小粒の感が抜けないぞ

世知辛い世生きてゆくのにはパワー要り

プライドや作句するから生きてける

故ダイアナ妃二十年経ちまだニュース

倉吉市 牧野芳光

ひとつずつ命数える雨の音
とんがりを削り直して我も行く
思っている程には思われていない
人間の臭いを森で洗っている
筆と墨あれば描ける大宇宙

倉吉市 山中康子

み仏の情けにすぎる昨日今日
もう駄目と腹をくくってから再起
今日も来る曾孫の笑みにぶらさがる
へだたりが徐々に増します喜寿傘寿
軽く見た息子夫婦の孫の守

米子市 後藤宏之

戦争のつらい話はやめましょう
おすわりとおあずけだけは得意技
とっておき ここからだけのこの眺め
もう一度奇跡を願う拉致家族
幸せになれるメガネが見つかった

米子市 後藤美恵子

不祥者をにわか詩人に変える秋
ランプの下優しい文が綴れます
独り居の強がり月に見抜かれる
八十年防風林の枝下ろす
口惜し涙無駄でなかった遣る気出る

米子市 竹村紀の治

清掃車来るまでカラス食べている
スマホから顔を上げたら立ちくらみ
居眠りの生徒はいない模擬議会
流木の生き切った貌誇らしい
先頭を糖尿病が譲らない

米子市 中原章子

海育ち山の緑にあこがれる
お日様の機嫌が悪く農不作
上品と意地汚さがせめぎ合う
衰えを知らぬ意欲の好奇心
目標にパイパス見付け辿り着く

米子市 成田雨奇

妻病んでさざ波さえも立たぬ朝
誰からも来ないキャベツは終ったか
見かけなくなつた耳たぶつまむ真似
クリックを間違え消えた一時間
少女には何も言えない子であった

米子市 吉田陽子

夫とのコントに飽きて花愛でる
蒼々と繁る家族の古写真
独りでは生きて行けない森を出る
液状化させてはならぬ骨粗鬆
同じ味なし半世紀炊くご飯

鳥取県 石谷 美恵子

肥土にする為努力惜しまない
老い二人この頃子等に羨けられ
片付かぬ理由のひとつに長電話
知っている内緒だまつているモラル
最高のアクセサリーはいい笑顔

鳥取県 竹信 照彦

五千歩では不満な万歩計を持つ
日が落ちる速度に負けてオタオタだ
実る稲雀おどしと電気柵
人影がまばらな列車ワンマンカー
倉吉の地震復興まだ未完

鳥取県 西谷 悦子

私にだけの心のカード持っている
病院のカード増えない努力する
朝起きてからの気持ちが大切だ
青空が畑の手入れ監視する
ラジオの子供相談聴いて勉強す

鳥取県 細田 裕花

ラムネ飲むシユワーと若い味がする
無条件家族思いの手と足と
父母の顔して子らが帰省する
大都会熱風吐いて生きる子よ
味付けも国際化して舌を噛む

鳥取県 松川 行男

妻介護ゴキブリだつて留守守る
ゴキブリに道を聞いたら隠れちゃう
ゴキブリに残暑見舞の菓置く
割り勘で飲んだ相手が酔い潰れ
タクシーを呼んで見送る秋の風

鳥取県 山下 節子

海を背に浜の櫓で盆踊り
コンテナがヒアリを運び大騒動
運転をまかせせる人が居てビール
まかせます父手際よく事運ぶ
信用がある幅の利く人らしい

松江市 石橋 芳山

ブリズムの中に取り残された影
無防備に糸こんにやくが煮えている
遊ばれていたのか鼻先のピンク
キズ口は開いて返信がこない
プライドは干物のようになりました

松江市 小川 注湖

人寄つて語る動くが文化生む
百山を登った講話光る石
十円卵ありがと言つて三つ割る
ひまわりは満顔笑顔夏盛ん
歳取つたな右に左に動き立つ

松江市 藤井 寿代

ポツプステツプ着メロ変えてジャンプする
戦力外と言われ胸撫で下ろす
群れないと誓ったその日から一人
骨になるまで原色を着るつもり
金正恩のお遊びが止まらない

松江市 松本文子

お金はバブル 川柳は宝
コーヒーと音楽ソファアの側で
お香の匂いの女の人とすれ違ふ
我侬と思うがわたくしは私
どうしよう枯れゆく花と私と

出雲市 伊藤 玲子

海の夕陽キラキラ波と戯れて
浜風に鱒も私もよく乾く
謙虚さもセンス品格ある白だ
呆けテスト満点なんておちよくられ
寂しいと遺影見つめりゃよろしくと

出雲市 岸 桂子

日めくりの一枚にある哀の記憶
出雲弁わからぬ嫁が聞き返す
笑って泣いて大きくなつたボタン穴
事なかれ主義を通じたカタツムリ
赤信号渡る日もある義理もある

出雲市 小白金 房子

風は秋予感が誘う回り道
説法へ心を満たす秋彼岸
新米の艶サラサラと手にうける
刈りおえた田圃広がる風の詩
耐え抜いた向日葵残暑の中に立つ

出雲市 竹治 ちかし

便利さを求めた後に来た不便
気が付けば老いが足裏から覗く
綺麗な色のメダル欲しいという驕り
受けた球返せないまま古希の暮れ
ロマン談義弾む四つ葉と桜貝

雲南市 菅田 かつ子

偶然の再会老いの散歩道
錆びてゆく脳を磨いているところ
散らかした一間わたしの自由席
乗せられているナと思うが出る元気
百歳の後姿が美しい

雲南市 松本 昌

俺に似た仏像はなし京の旅
反省は仏の前でそれっきり
頑張ると病の友よあわれなり
新米の味を知らない孫育つ
うらぶれた我が古里の風に佇ち

無器用な男に従いてきた踵

島根県 伊藤 寿美

等身大の距離だしばらく見ていよう

定位置に老母が坐つて老母の家

原点にヒロシマがある郁夫の絵

父ちゃんが柱母ちゃんが壁になる

島根県 松本 はるみ

真ん中に川があつたと言う事実

せせらぎに佇つ白鷺の気高さよ

今日一句あした一句と茜雲

古里の稲のみのりに安らいで

忘れ得ぬ時代を生きて裏表

岡山市 工藤 千代子

半分は私のための青い空

秋というだけでこんなにすくお腹

昔話昭和を更に遡る

三分はとつても長いストレッチ

エプロンの紐で繋いでいる夫

岡山市 永見 心咲

人情にふれたら楕円形になる

刃こぼれが切なくなつた老いの坂

姉妹いま芒が原に咲きそろう

三拍子そろつて凹みなど知らぬ

素直になれない朝もある紅茶

日めくりは秋真夏日が終わらない

姑の立場になつて知る痛み

むずかしい話微笑みだけ返す

熨斗袋姉と中身を話し合う

アンコール出来ぬこの世を楽しまん

岡山市 前田 恵美子

タクシーをちらつと見てはバスに乗る

瑞風スズカゼに乗つた顔して写真撮る

笑われても自分の好きに生きてみる

八月は閻魔大王休暇中

「おかえり」と故郷の山ほほえんだ

笠岡市 藤井 智史

現状を変えたいブルタブを開く

合コンに呼ばれ干されているワタシ

川柳に託す結婚への想い

気持ち良い昼寝今夜は眠れない

振り出しに戻る婚活もう慣れた

岡山県 池田 たか子

生き甲斐の趣味は外せず手抜き家事

半分は聞こえぬ耳で笑い合う

体操の五分体の機嫌知る

コーラスのみすゞの詩に鬱とはす

墓ができ断捨離せかす彼岸花

岡山県 高岡茂子

使い方わからぬ内にこわれるスマホ

自分流ゆずりたくない正義感

忘れていた夢の火種が残っていた

思考回路停止血圧180

困りごと受けられません「ミズスマシ」

岡山市 田中 恵

青空が好きですわたしトンボです

信じ合うプラス思考の友がいる

この暑さ無理は通らぬ昼寝する

小魚をいっぱい食べて補強する

尖っても丸くなっても変わらない

岡山県 山縣 のぶ子

夕焼けもミサイルの海に怯える

残飯の整理ばかりをする一人

ひまわりも散ってしまえばただの原

最後尾まもる夫と登山靴

空蟬の網戸に思い止めたまま

広島市 岸 本 清

フルムーンカープ坊やのペアルック

ああ夫婦妻が凭れて船を漕ぐ

五十年オイと言う名の妻でした

亡父の顔知らない私七十五

ユーモアを足して余生を弾ませる

竹原市 石原 淑子

稲刈りもせず八月に新米を

じいちゃんと競う中二の力瘤

赤い羽根街頭募金小さくたつ

哀しいな営業スマイル美しい

順調です痛みは自分自分持ち

竹原市 岩 本 笑子

寄り添ってくれる影法師がいない

青空を知らず折紙の鶴は

抜け殻のあまりに軽き命よ命

ジャンケンポンいつも負けてる父であり

お医者様信じて今日も薬飲む

三原市 鴨 田 昭 紀

鍍兜をつけにんげんの輪に入る

野の花を摘んだ辺りにビルが建つ

急坂を越えると見えた青い空

嫁ぐ日に持たせる堪忍の袋

ノルマ果たせず焦る男の腕時計

岩国市 上 村 夢 香

心地よい疲れを癒す勝ちゲーム

炎天下名もない花が咲き乱れ

日々新たな小さな巨人無限大

見られてもいいことだけを書く日記

テスト前推理小説読みたがる

宇部市 平田実男

男にもてる男がほんまもん
ハンドルを右に左に生き上手
旧姓は忘れていない認知症
人間も麦も踏まれてから育つ
川柳がバネや砥石になっている

下松市 有海静枝

過ぎました なんだかんだと笑ってね
泣き言もウルトラマンは三分だ
落ち着きがないので長く悩めない
スケジュール詰めて虚しさ埋めました
モグラ叩きなどと言われて癌切除

防府市 坂本加代

ブレーキを踏まぬ程度の車間距離
マドンナを独り占めして嫌われる
留守をして飼ひ猫呼べば他人顔
日記にもほんとうばかり書いてない
夕焼けの千の彩り浴びて佇つ

東かがわ市 川崎ひかり

さあ次は俺の出番の幕が開く
先着順まん中辺に居る安堵
理不尽をまあなく包む順不同
順不同神のわずかな匙加減
きつと来る出番に手順整える

松山市 栗田忠士

そう言えばそうだったのか今気づく
無抵抗で生きるしかないダンゴムシ
涙こそ見せぬが顔が泣いている
愚痴一つ胸のボトルにしまい込む
なあタマよお前を看取るまで死ぬぬ

松山市 古手川光

ゆっくりと時が流れている故郷
気分転換たまにはせよと晴れ渡る
天気予報はずれて弾む祭り笛
介護保険使いたくない使いたい
待つて待つてストレス溜る診察日

松山市 宮尾みのり

ぎりぎりのところは他人に話せない
切なくてただ切なくて曼珠沙華
懸命に生きていますと曼珠沙華
東京の地下標識に案内され
安息のひとつき対話する柳誌

松山市 柳田かおる

限られたいのちへセミの応援歌
いただいた酢橘へサンマ買ってくる
何気ないことばにみそ汁が沁みる
ほほ紅をさして元気を作ってる
淋しがりやでいつもピエロになっている

大洲市 中居善信

謝るに平謝りの手があった
振り上げた拳を下げるしかないな
何だかんだと落ちつくところへ落ちついた
受け継いだ田畑どうするかが課題
ああ田舎放置田畑に廃屋と

西予市 黒田茂代

干し物に蝉鳴き止むの待つてやる
可哀相だが蓄切つとく夏の薔薇
耕運機のうしろをとこりとこり驚
忘れかけの郷愁誘うむかご飯
秋霖の風情に適うなまこ壁

西予市 西田美恵子

そこそこの美人と言われ気に入らず
懐に母は火を溜め風を溜め
産み終えた女の顔が美しい
雨は斜めに私を庇う傘が無い
水の裏の怖さを知った災害地

高知県 小澤幸泉

結ばれて結び返して四十年
お料理は上手出世はできません
開いて結ぶ握った両手離さない
とおい日の祭り高知で聴いている
祭り好き喜寿を過ぎてても変わらない

北九州 小松紀子

もう聞いたなどは決して言いません
シニア割申告なしでフリーパス
と言われてもそれが私受けとめて
良いネいいね夫はもつとほめ育て
足腰にお伺いたて旅プラン

唐津市 坂本峰朗

神仏に感謝が出来る程の幸
今日もまた手酌で明日の夢を見る
認知症ではないんだと闊歩する
ご婦人の多い講座に足が向く
世界に平和和食広がる

唐津市 山口高明

総裁はシエルター購入されるそな
組閣どう替えよと起きぬ旋風
肺疾と成る煤塵を吸いつづけ
世界一空気が美味いタスマニア
胸の奥割つて見せたい火が燃える

熊本県 岩切康子

菌の治療 初金冠を喜ぶか
巨大なねぶた見舞に癒される
転居した友との対話元気出た
憎い甥会えば可愛い祝い金
近頃は手土産提げて夫婦宅

熊本市 杉野羅天

百年の安全否定して豪雨

台風前夜僕は神さま仏さま

スナックで憂さを晴らしたオベレッタ

どうしよう老いてゾンビとなるならば

願わくば多衆一つとなる地球

沖繩県 森山文切

手招きをしているピンク色の猫

後悔は捨ててあるべき場所に立つ

死にたいと子役に叫ばせるドラマ

じいさんの遺産大量のクロレラ

ふりだしに戻るを狙うしかないな

(前月分) 大阪市 山本加お里

目に涙夫の体さすつてる

折にふれ亡母の言葉想い出す

久しぶり姉に抱きつき笑い合う

快眠の朝何もかもスムーズに

どうせなら笑って暮らす日も暮れる

(前月分) 倉吉市 牧野芳光

人生の楽しい時を輪切りする

六畳の間にも領有権がある

海の絵を揺らし深海魚を起こす

葉箱の側にシャネルが置いてある

鬼百匹積乱雲の中にいる

(前月分) 防府市 坂本加代

合理化で不便になったものばかり

動物の本能映すはずかしさ

脳血管夜のカミナリ思わせる

猫カフェに行かなくなつたつて家に居る

黙っていても伝わると思う甘さ

(前月分) 八尾市 内海幸生

穏やかなあんな笑顔をしてみたい

異教徒も口遊むだる讚美歌を

暑いのによく頑張つたねと花に水

ご先祖も暑かる墓の花萎れ

天災の多い地球を逃げられぬ

(前月分) 神戸市 山崎武彦

戦後史に破いた跡のある懺悔

語り部の一途な思い原爆忌

父の歳過ぎてても越せぬ亡父の背

少しずつ童女に還る車椅子

添寝した祖母の優しい団扇風

(前月分) 河内長野市 植村崑代

日に日に食事が美味しい退院前

二階から五階軽い人の仲間入り

ドア一幾つ病院の廊下

人は好き皆んな仲よく有りたくて

あほになるつて難しいよお父さん

(前月分) 寝屋川市 籠 島 恵 子

溜息の昨日と違う死生観

我儘はもう言えませぬ遠花火

片付けの仕上げわが家にあるルール

ご無沙汰もお互いさまになる齢

取り敢えず親の夢です塾カバン

お煙草

(つづき)

沖繩県 宮 すみれ

朝の汗庭の散髪五分刈りに

汗たらし顔の化粧が踊り出す

あこがれの君自転車でやってきた

向日葵のノッポの花が指揮者です

(前月分) 山口市 中 前 幸 子

花影にそっと落としていた肋

眠らない街信号は眠たそう

躓いた石から貰う深情け

落ちた偶像こころの痛みまだ癒えぬ

(前月分) 三田市 宗 福 清 司

本読んでイメージアップまならぬ

今は無理土地転がしの儲け方

想定内なら慌てること不要

有り余るとはいかぬ今のへそくり



森の句集

居酒屋

江 原 とみを

出生は伯耆の国の潮だまり

スタートの時からずっと犬かきだ

朧夜だこころ盗みにでかけよう

春になると家を忘れることがある

にんげんが桜の下に捨ててある

火葬場の煙さくらのほうへゆく

父親は由緒ただしいなまけもの

米櫃が風雲急をつけている

月給袋でコオロギが鳴いている

裏街は哀しいものが干してある

浮き雲をひとつ掴んで旅に出る

昨日まで居酒屋にいた樹木希林

流れ星の果てを見ているおじいさん

賑やかに飲んでこの世をごまかそう

(平成1996年10月13日 発行)

川柳塔の

川柳讃歌

⑮

上方芸能評論家 木津川 計

カタカナを多用する人信じない

高瀬 霜石

「ユーザーにプレミアムコンテンツとパーソナルコンテンツをシームレスにエクスペリエンスしてもらうためにローカルとクラウドで提供したい」(17・6・13、朝日)と説明するIT製品の発表会があるそうだ。何のことか僕にはさっぱりわからない。明治の先学はフィロソフィーを「哲学」「ソサイアティ」を「社会」と翻訳した。中国人も賢い。コンビニは「便利店」ゲームソフトは「遊戯軟件」パソコンは「電腦」。霜石さん、脱帽ですね。

三角の二辺はおんな対おんな

両川 無限

二辺どころか藤山寛美は旺んだった頃、十三辺に愛人を住ませた。付き人に十三個の鍵を持たせて順に訪ねたという。漢字の解釈に一家言持った役者で「友」という字には人が何人もいる」と見透したが「私の真実の友

は稲垣完治(本名ただ一人)と。喜劇の寵児も孤独だった。シ(さんずい)の字を嫌ったのは政界の遊泳術を心得、汚職で肥る人間を許せず、重荷を運ぶしんにゅうの字を好んだ。さて無限さん、二辺の女とはどなたですか。

線引きはつまいが円が描けな

永見 心 咲

その寛美が「書きにくい」と洩らした漢字がある。「愛には家みたいな中に心があつて、又もある」と。松竹新喜劇の方向を線引きし、二四四カ月連続無休公演を牽引した超ワシマンだった。ために有力幹部に退団されたり、招聘役者と衝突したり、線引きはうまいが円を描けない喜劇王だった。自宅では嫁さんに冷たくあしらわれ、娘たちにはおやじギャグを囃われた。心咲さん、愛が書きにくいように円を描くのも難しいことですね。

思いやり足すとまあるい輪が描ける

升成 好

しかし、桂枝雀は絶えず周りを気遣い、まあるくまあるくを心掛けた落語家だった。高座を降り、退場するとき、裏方に必ず頭を下げた。遠去かる桂米朝の後ろ姿に最敬礼もした。弟子を思いやったから桂べかこたちはいまも枝雀を慕う。定時制高校から神戸大学へ現役で通った秀才だったが鬱に苦しみ、自死

した。それほど苦しんでいた彼の心を思いやると今もつらい。好さん、枝雀のまあるい輪は命と引き替えの思いやりだったのです。

先生の子も塾力パンかけてゆく

吉岡 修

「あの男、引つ越したの」「まだイテンのちやう」「値段をよう聞かれるのはウルサイです」「ドアがつぶれた」「そらアキマヘン」「高層住宅に住んだ訳を言え」「それは公団ネン」「風呂の釜が破れた」「完全にユーモラス」「君の車、動かないの」「つぶれて欠陥ね」「幼稚園児が並んでる」「オサナイデ、オサナイデ。」「襲名とは」「ヒロウがかさなります。」「先生の子も塾へ?」「カクしてること書かないで」と修さん、言われそうです。

駅弁を買いに大阪駅に行く

榎本 日の出

日の出さんに僕は見られていたのだ。まぎれもない、大阪駅へ駅弁を買いに行ったのは僕です。いつも八五〇円のおこわ弁当を妻の分と二つ買うのです。「車窓に映った自分の顔を道づれにして、湖水をわたり、とんねるをくぐり、珍しい少女や牛の歩いてあるあいランドのやうな田舎へ行こう」と丸山薫はうたいました。日の出さん、僕もおこわ弁当を持って蜻蛉の飛ぶ田舎へ行きたいのです。

新川柳鑑賞 (69)

麻生 路郎

歳は歳だけの素顔となり寂し

(没食子)

鏡の中の自分の素顔をつくづく眺める。いつのほどにかヒフがたるんで若さが消えている。年は争えぬと思う。「寂し」の語、軽く扱ってはあるが多少説明的である。

姓名学正田美智子の名も並び

(文 秋)

市場附近などでよく姓名学を説いている男にぶつかるが、それには天下に名をなした人たちや、その付近で新聞種になった人たちの名を並べ姓名名によって、その人の運勢が左右されるものであるから、悪い姓名を持っている人たちに名を変えてあげよう、これから生まれる赤ちゃんには名をつけてあげようと、人の弱みににつけこんだ商売をやっている。

その姓名学先生が、よい例のところへ

早速皇太子妃に選ばれた正田美智子さんの名を並べたというのである。穿ち句として面白いと思う。

順番を並べかえさず花輪来る

(好 郎)

花輪にも親戚一同から贈られるものや、同業組合や、首相やボスや、交際範囲によつて各方面から贈られるものがある。そこで世話役は花輪の並べ方に随分とアタマをなやますのである。必ずしも親疎関係にはよらないからである。この点をとらえた穿ち句として大いにうなずかせ

影法師あるのを空巢わすれてた

(谷 水)

空巢が抜き足さし足でしのび寄つたが、壁に大きく自分の影法師が写っていることには気づかなかつたというのである。時にはその影法師にギョツとしておびえることもある。この句はそういう人間の弱点を巧みに衝いている。

釜ヶ崎に住んで

今さつき出て来たんやと丸刈の

(見)

釜ヶ崎はスラム街である。ポリスもここでは威力がないと云われている。「今

さつき出て来たんや」は云うまでもなく、刑務所から出て来たのである。いつ散髪をしたのか判らない人たちにまじつて丸刈りが光るのもそれがためである。観察はなかなか鋭い。

霧の街乞食も詩情ある如し

(見)

霧のたちこめた街を乞食が歩いていて、何んとも云えない情緒が流れていて、それは一幅の画である。しかしながら画の中の乞食に詩情が湧いて、街の中を漫歩している訳ではない。作者も知悉しているので、「詩情ある如し」と結んでいるのである。

云うまでもなくその詩情は作者その人の詩情である。感じを詠んだ句として秀れている。

人間になつたと思や薬壘

(〇 丸)

働らき抜いて、地位も出来、少しは金も出来てヤレヤレと思う途端に、病魔に襲われたのである。それが人の世の現実で誰もが同じような道を辿るものだと悟つてしまえばそれまでであるが、悟りきれないところに人間のなやみは尽きないのである。

自選集

小島蘭幸

九十歳はもう長寿ではない母よ
悪いことするとき顎が出る二歳
引退会見を羨ましいと見ていたか
妻若しまだ原色のままである
完璧でした淋しい男でした

土橋 螢

地獄から楽しいことをして遊ぶ
土のついた大根がよく売れる
長生きをして若者の邪魔をする
泣く女笑う女にだまされる
長生きをしてもよいかと飯を食う

西出楓楽

豪華客船まだ諦めたわけではない
シエルター付新築売っているという
眉つばの話に耳が痒くなる
私にはイーハトーブは今わが家
黄昏れたらしいお洒落にうとくなる

仁部 四郎

家系図の展覧会が黒字とか
家系図に異性に弱い人がいる
家系図に探すセンスにカネのこと
家系図をたどると妻は仇です
家系図をくらべて秋の酒を酌む

前 たもつ

想定外神はいつでも傍にいる
好奇心いっぱい学び川柳誌
今日中にやらねばならぬ事が増え
救急治療いつでも受ける町安堵
人間らしく老いる努力をしています

三宅 保州

日本語で言えば飾りというゲスト
右派と左派シンメトリックたり得るか
動物園にたくさん居ったのはヒト科
そんな時牽制球に引つ掛かる
父という男に男意識する

宮西 弥生

どか降りが秋の入口を塞ぐ
札束を追う真直ぐな裸足
ひと言を忘れて笑えない語れない
体裁をかくし真夏のサンングラス
酒もすこし男もすこし若かった

村上玄也

時代遅れは承知ガラケー使いよい
早押しのカイズ年寄りには不向き
滑舌が悪なり歯がゆいと思う
噛みだすと焦つてさらに噛む始末
色眼鏡外し真実見極める

八木千代

次だって
ほろほろと語らいながら萩の道
隠れ道 逃げ道などもあつたけど
平らではないが一途に踏みしめた
長い迷路の出口は次の入口で
椿ならどうする わたくしの迷路

山本希久子

丁寧に結ぶ塔まつりの御縁
エンディングテーマの重さ長い夜
切手一枚友情を深くする
限りある命と知りつな不遜
補助線一本この世の謎が解けました

両川洋々

身替りの鬼を一匹飼つておく
羽生結弦が熱い視線の先で舞う
温暖化地球も他人事でない
北の駅には高倉健がよく似合う
戦友の遺骨が今も俺を呼ぶ

板尾岳人

命までかけて長生きする莫れ
一日は軽し一日は重たし
命より健康であれ墓参り
ゴキブリよひとり笑いをする勿れ
わろてんか過ぎゆく秋が寂しけれ

奥田みつ子

パパに似た目元可愛い孫二歳
病気より老いが怖いと九十歳
今朝の空佳いことあるかうろこ雲
バラリンピック努力のあとの限りなし
甲山に入る夕日に手を合わす

川上大輪

羽目を外して定形に戻れない
無味無臭敵か味方かわからない
深呼吸ですか ため息なんですか
気休めにサブリばかりを飲んでる
頭冷やせとお日様も背を向ける

木本朱夏

夜明けまで母の痛みに寄り添うて
曼珠沙華 死者には死者の言葉ありて
音もなく金木犀の零るるよ
無花果の葉陰になにか居る気配
石榴割れ叫んでみても誰も来ず

小西雄々

都倉求芽

回れ右しても幸せにはなれず
面影は忘れ歩いた白い道
翼はえるまで大空を見えています
しゃぼん玉どこまで飛ばせば満足か
樹齢百年ときどき神が降りてくる

斉藤 荔

企画力抜群だった同志の計
うつつらと夢に出たのは青い薔薇
活断層だろうと明日へ種を蒔く
赤い実が熟れたと鳥も知っていた
樵の木の森に原風景がある

新家 完司

この国の臍は出雲の御柱
雑踏もいい高原の風もいい
まほろばのころ伝える茄子の紺
寂しさの余韻を残す大花火
戦争をストップできぬ神ばかり

津守 柳伸

お守りと言う高額なガン保険
和洋室増えてシニアの旅ごころ
湯煙を恋しくさせる虫の声
熱中症豪雨も避けたすすきの穂
糖度12西瓜の夏も衣替え

重ねての不義理が重い夜ひとり
祝う気はないが誕生日の自覚
秋の陽へのちを燃やす曼珠沙華
おいしさに殺生の罪忘れてる
お賽銭用に五円玉とっておく

第37回 川柳塔みか月川柳大会

日時 11月26日(日) 午前9時開場
場所 鹿野町総合福祉センター「和泉荘」
鹿野市鹿野町今市651-1

TEL 0857-84-3113

出句締切 11時30分
兼題と選者(各題2句 未発表句 席題なし)

「仲間」小島 蘭幸 選 「伝説」森中恵美子 選

「迷路」河原 千壽 選 「復活」新家 完司 選

「化石」長谷川博子 選 「果物」清水美智子 選

「簡單」牧野 芳光 選

当日会費 2000円(昼食・発表誌呈)

欠席投句 1000円(小為替希望・切手不可)

投句方法 用紙自由 住所・氏名・電話番号記入の上左記宛

投句宛先 〒689-0405 鳥取市鹿野町鹿野1065

山野すみれ TEL 0857-84-3045

投句締切 10月31日 消印

宿泊懇親会費 14000円(山紫苑) 懇親会のみ 6000円

※宿泊申し込みは10月31日まで森山盛桜まで

〒689-0423 鳥取市鹿野町中園180

TEL 0857-82-11491

主催 川柳塔鹿野みか月

薫風先生の句集「古稀薫風」などに収載されている句にこんな句があります。

一茶忌の赤林檎より青林檎 薫風

小林一茶（1763～1827）は信濃の人で非常に多くの俳句を残しています。

雪とけて村いっばいの子どもかな

大根引き大根で道教へけり

悠然として山を見る蛙かな

薫風先生の句集から一茶の俳句に似た雰囲気句と思う句を選んでみます。

犬小屋にベンキで窓が描いてある

草の芽が出たぞ おしっこさせながら

三輪車 ポストへはまだ背が足らず

一茶は母を幼少時に失くし、継母との折り合いが悪く少年時代に江戸に奉公に出ます。三代後半に信濃に帰り、病気の父を看病しますが父はほどなく死亡。継母や腹違いの弟と遺産相続で大揉めしますが、なんとか話をつけて財産の半分ほどを相続して信濃に住むことになりました。

52歳になってやっと若い嫁をもらい子が四人も生れたものの四人とも生後一、二年で死去し、嫁も数年後に死去、その後二度目の嫁とはすぐ離婚、三度目の嫁との間に女の子を得たが、その子の誕生前に一茶自身が死去し、娘は父親に会うことはできなかつたものの、四十歳まで生きたようです。

さて冒頭の薫風先生の句、一茶が信濃の人であったことから一茶の象徴として林檎を取り上げ、一茶の生涯に鑑み、艶やかな赤い林檎より、落ちついた色の青林檎こそ似つかわしい……というのが私の勝手な解釈ですがいかがでしょうか。

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

ボーイが来るとお辞儀をしよう

政治より燃えるものありプロ野球

世話になる妻だ喧嘩をしてならぬ

湯豆腐のゆれを見ているわが余命

さくら咲くこんなよい日におとむらい

雑草と言う草はない名は鬼遊

送り火のリン鳴りやまぬ父よ母よ

神様へ使いふるしの身をゆだね

どつと使えぬ年金のありがたさ

戦争をするなど余命たまりぬ

贅沢は敵だと今の世を生きる

雑兵のひとり一人に母がいる

いちにちを生きて日記の白いまま

政治家に頼って生きてゆけますか

税務署の冷房を出る炎天下

妻が病み暑くて永い夏だった

戴いた銘酒が秋を待っている

魔女狩りの如くたばこが嫌われる



川上大輪選

佐賀県 真島 久美子

諦めてからが美味しい缶ビール
無邪気では済まぬ話の中の椅子
言の葉を紡ぐ誤解の無いように
自分史の削った場所が闇である
降り出しに戻った顔で帰宅する
余所見したまんまで秋が通り過ぎ

那覇市 前川 真

青空に種も撒きたくなる日和
無駄足を踏んで上げて骨密度
人間の着ぐるみたまにそっと脱ぐ
君の汽車来ない今でも駅に居る
出不精になって欠伸の旅靴
なるようになる方角へ靴を履く

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

順調に老いてゆきます忘れもの
ストレスを溜めて鉛筆よく折れる
貧乏な頃の絆は太かった

ドットコムホームページと言われても

無器用な女で橋が渡れない

妥協するたびにプライド邪魔になる

横浜市 川島 良子

わたくしの歩幅で踊る六十路坂

雑談の中で拾った知恵袋

ストレスも生きてく脳の刺激剤

疲れない距離にアナタがいてくれる

月下美人咲いてわたしの夏終わる

前向きな話明日はきつと晴れ

貝塚市 吉道 あかね

ふたりして一人前になる記憶

生と死も幸も不幸もみなセット

介護保険掛け捨てならばバンザイだ

体型は崩れて来たがまだ元氣

在来線に咲くコスモスは美しい

暑い寒いと気候のせいにして怠け

大洲市 花岡順子

明日咲く合図につほみ色を付け
機械音痴まだスマホには手が出ない
イノシシが入るとよそ見する案山子
両方が無口でも間が持てぬ
みそ汁は遠くになつた朝のパン
それぞれの個性和音として響き

和歌山市 北原昭枝

夢にさえ来ぬ人待つ秋の風
夢ならば覚めずにいたい傘の中
追いかけて追いかけられた夢のあと
前触れか何度も同じ夢をみる
ちっぽけな夢なら少し頑張れる
幸せへつなぐ小さな夢を織る

倉吉市 若松由紀子

遠い日に母が着ていたチャンチャンコ
父さんは今日も苦虫かんだ顔
ご近所の噂を拾う婆三人
天国に行った気分の仕舞い風呂
ありがたい法話寺出てすぐ忘れ
ため込んだ腹の贅肉かくせない

池田市 上山堅坊

自転車のマナー免許を作らんか
ひそひそ話ゴング鳴らして輪に入る
一瞬の沈黙腹の虫殺す

甘酸っぱさしばし味わう梅の種

やれやれと思うは白寿過ぎてから
逝かれてみればさすがだったと想う妻

箕面市 中山春代

ハロウインに染まるせっかちな九月

Jアラートが平和な朝をかき乱す

握手する腕をもたない北の国

五キロほど落とせば入る衣更え

朝市を目当てにはげむ六千歩

秒針に削られている余命表

豊中市 荒巻 夢

カラフルな浴衣もいいがやはり藍

むき出しの闘争心の清々し

朝ドラは善人ばかりおもしろない

三枚目入ってドラマ引き締まる

夢は夢素顔晒すな大女優

一点の曇りもないとどの口で

豊橋市 藤田千休

トクシヨーいずこも同じ楽屋落ち

句箋にはやはり楷書がよく似合う

秋の陽に最敬礼をする稲穂

二心ばれて疎遠の夫婦雛

爽やかに打てば響きたいい呼名

改造へ金魚の糞が名を連ね

福井市 伊藤良一

翔べぬまま虫干しだけで仕舞う羽根
長い目で見よういつかは開花する
古希だとして小皿に盛った夢を持つ
好きだからだから文句も出でしまふ
座りたい椅子はいつでも他の人

大阪市 田中ゆみ子

実るはずだった田畑の土石流
怒ってるうちはじいちゃん大丈夫
会いたいな貴方が植えた花が咲く
生きてきた匂いが集うネオン街
お隣の柿の葉家の庭が好き

大阪市 中島栄子

独り暮し自由であるが虚しくて
秋の仕業か亡き人達が懐かしい
何を供えよ今日はあなたの誕生日
孫達が来れば年金走り出す
人生余白枯木に花を咲かせましょ

大阪市 樋口眞

夏ばてを慰問に来たか秋の風
気温二度下がりがこんなに楽だとは
新聞の硬いページは夜に読む
眠れぬ夜作り溜めする自由吟
五年保証切れた直後に故障する

大阪市 森廣子

カレイの煮つけ骨美しく残される
うぬぼれのたった一つが捨てきれぬ
倅せばかり人は追いかけて疲れてる
夏の終わりに死んだ金魚の小さい墓
夏が行くこの気の焦り何だろう

大阪市 横山里子

祈りつつ丁寧に折る千羽鶴
余白からポトリと時は流れ落ち
夜勤明けひたすら眠る娘の白髪
薄味に慣れてゆれてる正義感
幸せは明日食べる米あればこそ

大阪市 吉田知之

思い出に世界めぐった夫婦旅
左利き甚五郎やと得意顔
天地人誰がつけたか意味深い
万歩計家の中でもつけておく
手をあわせ三度の食事一人膳

池田市 太田省三

この町は校歌に残る水の里
村立が市立へ校舎そのままに
台風へ愛のキャンドル準備する
手配書の顔が私によく似てる
太陽がひとりぼっちで帰る島

河内長野市 原 熊 知津子

光射す方へ向かつていく思考

少年を男にさせてゆく野心

鍵穴から秋風がくるワンルーム

なんとなくもの足りぬ日の長電話

正論に纏わりついている過信

河内長野市 穂 口 正 子

趣味ごとに見せる私の七変化

一皿に昨夜の残り並べ昼

犬逝つて主なき小屋が捨てられず

夏の終わり宿題もつて孫が来る

丁寧に生きて余生を慈しむ

堺市 近 藤 治 子

鉢植の花ぐつたりと主待つ

ヨッコラショ背すじ伸ばして行く散歩

ぐつたりの野菜しゃきつとさせる術

猛暑です昼寝で元氣とりもどす

決心をして行く盆の墓そうじ

吹田市 岩 口 のぞみ

値上がりで秋刀魚睨んで鯛買う

体重計やせたら乗ろうとしまいこむ

渋柿も妻もそろそろ円熟味

猛暑にもやせず実りの秋になり

やや下手に作る工作難しい

高槻市 三 谷 白 黒

残業をしないで工期守れとは

本物を上にして出す収集日

おしゃべりなペットのような女房です

豊かだねいつでも玉子食べられる

子離れし夫婦二度目の恋仲に

堺市 羽 田 野 洋 介

酒止めてどこか空しい昨日今日

たっぷりと込めた皮肉が通じない

必死だと口では言うが目は笑う

招待状上様なんて願い下げ

緊張感弛んだ時が落し穴

豊中市 荒 木 郁 子

老夫婦ゴーヤジュースで夏凌ぐ

必需品ペットボトルとパラソルと

力抜き素直に歳と向かい合う

独居の身電話のベルに身構える

共に生き相棒の良さ噛み締める

豊中市 貝 塚 正 子

幸運の知らせ卵に黄味が二ヶ

女子会も辛口の酒粋に飲む

母さんが長女に託す次女の世話

気掛りな人のうれしい便り来る

溜息を安いノートに沁みこます

寝屋川市 岡本 勲

かくしごと妻の目線があぶり出す
ゆつくりと泥をはかせる妻の技
行くともすることもなく医者へ行く
浴びるのは酒とシャワーと妻の愚痴
欠点も長所もなく今米寿

八尾市 田邊 浩三

杖無しで曾孫について行けぬ足
金婚式市の連絡で気がついた
政界のあちこちに要る透明度
わが家には必要の無い透明化
呑むほどにまとまる話割れてくる

大阪府 神野 千恵子

寝転んでいるのも日課少し鬱
たてまえで終わってしまう自己主張
茹で具合この頃少しやわらかめ
祝日の意味は問わずにただ休む
円空の木仏の笑みに心解け

神戸市 輿水 弘

偏屈も熟れて八十路に味を出す
老夫婦お出かけ競いおしゃれする
柔らかい棘に気付かずはしゃいでる
ママと叔母仲良く太目笑い合う
言いそびれ唯唯感謝悪友が逝く

神戸市 近藤 勝正

レンタルのベッドは残る満中陰
遺された山と畑を持って余す
また一戸屋根に草生え灯り消え
ああ転ぶ分かつてるのに止められぬ
逆走を気遣う妻がキーン隠す

神戸市 玄 番 美恵子

核のない平和な地図を子に託す
敬老日まだまだ達者旅プラン
推敲の堂堂巡り元の位置
スタートライン立つ少年の夢無限
虫干しに母の匂いを連れてくる

神戸市 山根 弘華

老女でも越えねばならぬ坂がある
あこがれた君は今頃の星に
にぎやかな野菜畑は会議中
没ばかり一句が抜けてはずむ足
古里へ昭和さがしに一人旅

尼崎市 清水 久美子

秋めいて枯草色になるバッタ
そんなこと自分で言っちゃ値が下がる
場の空気読んでカメレオンになる
飛び入りでこけて笑いを独り占め
主語無しの会話まとまるはずが無い

篠山市 永井 かほる

ユーモアと元氣と笑顔明日の糧
あの人の笑顔に会える野菜畑
新しい今日を頂きおかげさま
この平和負けたおかげと言うべきか
年金に見合う買物かごの中

三田市 九村 義徳

灯を消してさらに深まる猜疑心
鮮やかな指し手ベテラン唸らせる
危機管理磁石はいつも北を指す
敵ながらあっぱれ胸のすく台詞
地産地消四季折々のおもてなし

三田市 松本 ゆかり

高原のフレッシュユース胃に重い
高原のお花畑に老ハイジ
芋の子を洗う溽暑の軽井沢
抜け殻は網戸に力入れたまま
夢の同じ枯野に立っている

宝塚市 太田 としお

合言葉また天国で逢いましょう
坊さんもよく笑いはる怒らばる
忘れるって神さまからの贈り物
正直に生きて驕らず落ち込まず
信じない平和平和と叫ぶ人

姫路市 中野 忠

鈴虫が仲を取り持ち友を呼ぶ
早朝の汗もさわやか畑仕事
生きるには多少の欲と金もいる
草取りも一匹の蚊に手を取られ
押入れの整理邪魔する古布団

奈良県 長谷川 崇明

死んだってあまり泣かない金魚飼う
夫婦でも喧嘩もします他人だし
それぞれの母国語燥ぐ電車内
正論を吐いて多数の高い壁
この星の森の緑は清浄器

和歌山市 倉橋 悦子

尼寺へ駆け込むように雨やどり
虫の音に夏の乾きが消えてゆく
待っていた秋がまばらにやって来た
袋帯母の温もり結ぶ秋
自治会の傘寿の祝いランチ代

和歌山市 定松 宏枝

とりあえず残しています葬儀代
福耳と言われる程の徳も無く
玄関を独り占めする甲虫
夏休みザクザク崩す欠水
お早うと先ず声かける植木鉢

鳥取市 田賀 八千代

胸のボタン外し青春背伸びする
真実の愛が朽木を目覚めさせ
嬉しくて甘え上手になる私

取扱い注意私は火の女

セツトされた親の土俵で物足らぬ

鳥取市 山野 すみれ

踏み外しやつと気が付く高さです
控え目と言っていないながら先回り
大切な誰の物でも無い地球

軽トラに乗ってペンツを眺めてる
立ち位置を迷いいつでも見上げてる

倉吉市 大羽 雄大

ハグをしてやりたい電話泣いてる
明日がある横着もんの先送り

売らんかな急いでモラルは後回し
日めくりの薄さに重みのしかかる

町内の監視カメラは知っている

倉吉市 岡崎 美知江

不意打ちの難問酔いもさめて来る
笑い皺ほどよく増えた老いの顔
いい話風があちこち運んでる

温もりがたつぷり母の肖像画
自分史に笑顔一枚貼っておく

倉吉市 田中 けいこ

家々に冷房がつき暑くなる
櫛木を切ってしまった植木屋さん
あたり前がいかに愉快かと思う
少しずつティッシュペーパー小さくなる
季節感が普通列車でよく見える

倉吉市 宮田 風露

八十路でも出番があった運動会
老いの目に積んどく本が増えだした
半袖が長袖かなと迷う空

断捨離は五欲があつて先送り
ミサイルが飛んでも逃げる場所がない

米子市 生田 和之

いつの間にか寝ていたらしい齡となる
後期来てトホホが増えて叱られる

この酷暑僕も家電も故障がち
喜怒哀楽全て涙に処理させる

核戦争に一歩近づくと世に不安

米子市 池田 美穂

三代にしつかりコピーされた顔
振り過ぎて打ち出のこづち電池切れ
樟脳の匂い従え母デイへ

濡れ落葉剥がす痛みをまだ知らぬ
活断層活発化する夫婦間

米子市 伊塚 美枝子

太陽に向かう向日葵かしら右
食べ放題わが胃袋の限度知る
飲み放題飲むぞの元氣最初だけ
雨降れと空を仰いだ日もあつた
シウルシウルドン歳をとつても踊る胸

米子市 川 本 美津子

ピンポーンと我が家のチャイムいつも鳴り
蝉達も玉音聞いて泣いたはず
鑑定団に私の値段聞きたいな
ハンサムもいいけど金はもつと好き
磨かれた林檎の美肌お年頃

米子市 雑 賀 美和子

核の傘日本自立がなぜ出来ぬ
汚染水凍土壁では止められぬ
ノリ弁とは扱いうまい財務省
沖繩に飴は要らない基地無くせ
持ち越したさよならメタボどうしよう

米子市 戸 田 真理子

甲子園の土が涙で乾かない
雑草に聞いてみたいね伸びる術
回り道しても目標失わぬ
万歩計が歩け歩けと急ぎ立てる
レントゲンがトキメキまでも写し出す

米子市 見 山 温 子

渋る夫の手を引き散歩秋の風
母の形見仕立て直して娘に譲る
息子夫婦じいをあずけてリフレッシェ
若者のいない村にも収穫期
八十路の旅孫にねだられデイズニーへ

鳥取県 飯 野 菖 子

頑張つて半分出来たホツとする
手を取つて孫にバランス頼みます
バッチリときたえた腕が頼りです
米蔵で栄えた庄屋今空家
宝の米積んで農業諦めぬ

鳥取県 門 村 幸 子

しみじみと老いの時間は「とつておき」
ゆっくりでいいと悟つた下り坂
免疫力このくらいでは死にはせん
映画館もつたいなくも席まだら
生命線涸れないようにガッツ足す

松江市 山 根 邦 代

毎日をバラ色にして恙無し
熱中症夏バテせずに八十二
呑みこんだ愚痴七色の虹となり
うす暗い何する気なし雨の音
秋風に伸びてた気持ちしまり出し

雲南市 永見 安子

朝の内だけならだせるから元氣

メモ紙はあちらこちらに置いてあり

集注し力をこめる筆の先

ゆっくりと演歌味わう今日の雨

帰省した孫へ小さく見える部屋

松山市 郷田 みや

あいまいな沈黙おいて行った人

時時は点検をする命綱

中断すると今がどこかへ飛んでいく

部品ひとつ換えても同じだと思ふ

記念写真いつもあなたは右の端

瀬戸内市 東 楨 ますみ

躓いてからが重たい空になる

あの日からザワザワザワと揺れる胸

棘のある言葉はまるい背で流す

鯛雲ほろりと想う母のこと

サヨナラも言わずに今日が落ちていく

高知市 三 谷 松太郎

年寄りが年寄りに聞く言い伝え

加齢です体質ですと言われても

戦後派もシーラカンスさむつりに

暗いのが好きらしいが蛍かい

額入りの顔など言うな先の先

岡山市 小野 美那子

愚痴抱いて案山子の真似も三日まで

うなずいて口はチャックで聞き上手

入るなど言われりや障子穴があき

吠えたいが浮き上がるのが恐くつて

古希の坂手の鳴る方へよろよろと

広島市 松尾 信彦

正確さちよつと乏しい地獄耳

老眼鏡意外な歳を暴露する

苦勞した話に徳利幅利かせ

日々精進何かが残る少しずつ

父の背が役に立たないデジタル化

尾道市 小畑 宣之

聞く耳を持たぬ上司に腹背し

どん底と思えば後は上がるのみ

虫時雨テレビの音量アップする

百冊のアルバムついに粗大ゴミ

チヨイ悪で生きる人生たくましく

竹原市 若年 幸子

ひと目惚れ愛のハートは直球で

診察はパソコン内に居る私

五七五言葉遊びの万華鏡

まだ七十路気力体力ポケットに

名月へあなた居そうでメールする

府中市 岸田 武

彼の国のドンに拳骨くれてやる
フランスパンあんたの自負も堅いのう
線香花火末尾の五秒無口なり
大物のふてぶてしさに憧れる
もう五十息子がおじん臭くなる

広島県 日谷 寛

あすがある今日一日をよく生きる
あたらしいところへ赤いいろを足す
あわてまいあせる心へ花ことば
あやふやな足へほらほら万歩計
あとがないあとがないよと砂時計

山口市 青木 隆子

晴れ舞台終えて消えゆく七日蟬
土竜の子ようやく窓を開け放つ
お月様も隅で見とれる大花火
若き日のストレス胃潰瘍の跡
若い頃母を泣かせた悔い一つ

山口市 中前 幸子

人形のまばたき何か言いたそう
遠い日の想いをコスモスの揺れに
はぐれ蛭が一匹胸の奥に棲む
波打ち際に残したひと欠片の愛よ
秋の絵から抜け出して来たアルルカン

福岡県 本田 さくら

「世界ネコ歩き」見るたび逝ったタマ想う
二センチの蛙あちこち夏謳歌
うまい米汗と涙で浮かぶ顔
わが庭に笑みが見たくて花を買おう
台所の時計なぜだか急ぎ足

シドニー 坂上 のり子

素足から春が伝わる廊下かな
陽は沈む明日へ希望託しつつ
後期高齢よくも言つたと膝笑う
孤独死がよぎりシャワーで間に合わず
大らかな生き様継いで生きてます

札幌市 斉藤 宏子

怒られた口調で犬を叱る僕
運動会風を翼に子等走る
愚痴話黙って聞けば子の自慢
生きる道迷い迷った青春譜
何となくプラス志向の青い空

札幌市 富永 恵子

大雨が不法をあばくエネルギー
やすらぎ園ながい旅路の港町
姫路城本丸口でひと休み
乗り越えた四角三角立ち泳ぎ
よかつたね握る手のひら猫の舌

弘前市 高森 一 吞

達人は大上段に構えない
蓮の花ひらりと止まる赤トンボ
短針と長針びったり合う間合い
徘徊の妻そつと風船になる

白河市 鈴木 たけし

おべべ着てちよつと戸惑う七五三
戦っているから歩にも力ある
表札へ出戻りの娘を小さく添え
万歩計歩き過ぎだという数字

松戸市 山下 明子

お疲れさま夏に乾杯終りにも
ミルク飲み人形かバス止まるたび
夏の長雨所作なくてゴロ寝する
負けて勝つ女の意地のみせどころ

東京都 高岡 弥生

夏休み終わってママの夏休み
定年後孫に癒され感謝する
文化祭こっそり見てもバレている
定年も延長されて頑張れる

横浜市 巖田 かず枝

雑巾を縫えば窓拭きしたくなる
映画館テレビの音の古い二人
飲み会は雨天決行遠くても
六ヶ国まずは乾杯しませんか

横浜市 長島 亜希子

道徳教育センセイ方に要りそうな
夫の予定聞いてわたしの予定決め
電話してみれば良かった姉が逝く
間違いは睡眠不足のせいにする

佐渡市 高野 不二

口だけはとても米寿と思えない
外国から来た虫一匹に大さわぎ
栗拾う期待を込めて散歩道
コレクション処分に苦労する老後

名古屋市 山本 三樹夫

国会は倫理教育まずは先
空にしてひたすら歩く遍路道
文化財先祖の祭り引き継がれ
政党は枯葉をつつき幹を見ず

江南市 脇田 雅美

家計の足し代わるがわるに行くパート
働き過ぎ元気な人も骨休め
ダイエットに熱中し過ぎ拒食症
湿り気味の心を干して爽やかに

豊橋市 小松 くみ子

MRIしつかり写す内脂肪
庭師来てなくなった巣へ鳩が泣く
笑えませすしゃべるインコのヨイコラシヨ
ライバルがニヤリとしたぞ何かある

豊橋市 西郷紀美代

危機感を持ってゐるけど出ぬ一步
蔓延ったドクダミを抜く雨上がり
見逃した月下美人の花憂え
不機嫌は寝不足でしたまだ子ども

京都市 櫻崎篤子

より添った猫も居なくて風は秋
来世も猫がいいよと言つてやり
苦しまず何よりだった手を合わせ
出棺へひたすら経をとなえ居り

大阪市 磯島福貴子

歩み寄り歩み寄つての金婚譜
ごめんなさい素直に言えず悔いばかり
北と米わがままボスに好きにされ
太陽の恵みを思う野菜高

大阪市 小野雅美

胸底のナイフ時折光らせる
絡み付く糸はハサミですつぱりと
再起動しても誰にも気づかれず
マネキンの洋服買った初デート

大阪市 柴本ばつは

無茶したなあその一言でもう涙
昨日今日妻は声まで秋らしい
おたがいに忘れたきこともつ夫婦
選り抜きのリングでしたが売れ残る

大阪市 田中廣子

秋夜長祖母の思いで語りあう
濃い霧で星座観測夢の中
久し振り友と出会つてはずむ声
連休に孫と出かけるプラン立て

大阪市 長高俊雄

女房と口論の果て千日手
名も挙げず罪を犯さず凡夫です
パーゲンと聞けば駆け出すああ庶民
居直れば窓際という良きポスト

大阪市 前川善之

高齢者生きる健康食事から
お年寄りに見せる笑顔に見る笑顔
ミス一つ悔いを残して消えていく
核のゴミ捨て場無いのに再稼働

大阪市 松田聰

ゲリラ雨今当然になつてきた
ブレ金を誰も言わないどうなった
Jアラート果たして役に立つのかな
投げられた煙草のけむりモラル見る

堺市 梅木澄空

電話口同居の苦勞聞く深夜
真向かいにコンビニできて繰る雨戸
秋風にやっと自分を取り戻す
法話よりしびれる足に気をとられ

堺市 小林 若芽

天に舞う煙へ情がたち切れぬ

すずき群れあの世この世は紙一重

いい出逢い残り時間が惜しくなる

お向かいの窓の灯りでほっとする

堺市 松永 庄三

ハイヒールくの字くの字の初歩き

生前に聞きたかったよその弔辞

搗きたての餅にも似たりメタバ腹

CTに写る我が身はロースハム

堺市 大和 峯二

アベノミクス語ることをすら憚れる

九条があつてはじめて長寿国

軍事費に消えた年金もどしてよ

ていねいも期間限定すぐもどる

泉大津市 助川 和美

飲みたくて釣った魚を分けにくる

京の旅紅葉が二人包みこむ

七輪で焼いた秋刀魚は美味かった

寄り道をさせない妻のお味噌汁

河内長野市 中島 一彌

クモの巣にかかるトンボのつきのなさ

目標が理想に変わる休肝日

チラシ見てレシビ探して夕餉決め

朝刊のポストの音が目覚しに

河内長野市 森田 旅人

悔い残る挑戦避けた逆上がり

持ってたら金庫の中に閉じこもる

笑顔だけ見せ合う二人どこか無理

あるところにはあるんだなあと詐欺の記事

豊中市 木藤 こみつ

補欠でも入学すればそれでよし

養殖の鮎にたつぷりの脂

引つ越しが趣味でお金が貯まらない

虹の色の順は変わらぬ雨上がり

豊中市 源田 啓生

秋の波想い出ばかり繰り返す

妻の手に仏が時に手を添える

ネット漬けさて何を問い何をかう

歩かないジャコメツティが訴える

富田林市 小出 修三

百歳が杖を突かずに医者通い

ボケ茄子にならぬ水遣り肥料やり

ボランティアのウクレレにのる雲にのる

ケアをする人も加わりフラダンス

羽曳野市 磯本 洋一

この国のどこを踏んでも熱帯夜

注意報晴れても雨も熱中症

大雨と地すべり異変何時終わる

繰り返すし猛暑大雨此処彼処

枚方市 坂本 ミヨノ

まだ暑い湯豆腐つまみ酒を飲む
果物や好物供え愚痴こぼす
虫よけの袋で死んだ虫哀れ
にぎりめし今年の梅香自慢です

箕面市 寺井柳童

向日葵も項垂れているこの猛暑
手を合わせ五山送り火芋殻たく
知らぬ間に右へ右へと進路変え
休刊日いつも通りにポストまで

八尾市 前田紀雄

年中無休ブレ金なんか知りません
手術台竜宮城に参ります
一線を越えて人生パーになる
お金など要らぬ無償の愛欲しい

八尾市 山川寧

玉拾い空蟬にふと手が止まる
フェデラーが負けて睡眠とり返す
バベルの塔ブリュゲルの技神の技
神の技イメージ拡がるバベルの塔

大阪府 小栢 こそえ

声出して笑うだけでも元気湧く
今になり思案している余地ない
大切に生きる限りのある余生
彼岸花いつもの道を照らします

大阪府 高木道子

志は低しプライドだけが超高し
忘却も育って亡父の十七回忌
猛暑過ぎ五臓六腑も助走する
鏡から飛び出したのか生き写し

大阪府 中内 孚彦

振り返れば人の応援ばかりして
大英和この前はいつ引いたかな
国宝が触ってみたい距離にある
折に触れ初恋の女顔を出す

大阪府 畑中節子

錆びる脳柳句で磨き日々謳歌
老いの脳ストレス詩にして遊ぶ
野菜畑老いを励まし生きる杖
空元気がつくり気落ち顔の皺

神戸市 田本古鈴

えんま様かわいい嘘をお目こぼし
現世に覚めて寂しい夢のあと
言い逃れあの世できっと裁かれる
綻びをひとつ縫うたび真人間

伊丹市 延寿庵 野鶴

切りむらのナスに浮かれた跡がある
心地よいことばの端を薄く切る
どじばかりひそと待ってる蟻地獄
蛇行して学んだことが役に立ち

伊丹市 西川 富士雄
遺言書書く氣にさせた立ちくらみ

医者よりも長い問診見舞客
お医者さんたまには脈をとってくれ
可愛いと思う孫とは話題なく

伊丹市 平井 富夫
ヘソクリの隙間にふしぎ請求書

孫しぐさ爺に似てくる嫌な癖
物知りの爺を動かす煽て方
我が夫文句と愚痴の聞き上手

小野市 田中 辰夫

赤札品裏に表に品定め
毎日の広告までも読む老後
夏休み終り色づく運動場
屋上を使い緑を増やす街

加西市 山端 なつみ

丘ズラリ太陽光の発電だ
緑消しこれがクリーン発電か
晴れのち曇時々雨の私
暑い嫌寒い嫌で年が過ぎ

篠山市 長谷川 善輔
淋しさはしばらく見えない子の笑顔

友の死に香典の字が震えてる
世の中が便利になると出不精に
その顔は何を言いたい猫に問う

篠山市 藤井 美智子

人生の役目もすんで趣味に生き
秋風がおいしいお茶を入れてくれ
目が冴えた夜はラジオの深夜便
亡兄も亡夫も私の胸に居る

三田市 幸田 厚子

冷えピタで熱ひく程の恋でした
打ち上げた花火の煙竜となる
非常線張るかのような女郎ぐも
盛り塩の店を横目に屋台村

三田市 宗福 清司

意味深なジェスチャーだけど分からない
現役時涙なくして語られぬ
喜寿過ぎて涙ぐむこと増してきた
受信ベル鳴っても取らぬ方が増え

三田市 辻 開子

ダイエット意志が弱くて進まない
介護中レールに乗れぬ日もあって
捨てる術母は下手でも娘は得意
へそくりが赤字補填に顔を出す

三田市 馬場 貴美江

癌治療放置するのも選択肢
スマホには歩調合わせぬ八十路です
初めての育児は楷書疲れます
触診は病を癒す老い人よ

三田市 東内 美智子
空気がみたくいそれでもあなたここに居た
二人居て旨い不味いも二皿に

お寺さん見て来たように慰勞する
ホスピスに委ね自然に逝った顔

宝塚市 岸田 万彩

秋空にぼつかり浮かぶ空思想家

退屈な話題を変えろ隙探す

一件の経過知ってる縄のれん

積ん読で半分読んだことにする

西宮市 福田 正彦

ワイドショー想像の域で語り合う

友として足りる言動探り合う

スキヤンダル政界人事の風物詩

涼風も冬の匂いに乗せる朝

三木市 山口 久子

この暑さ祖母食なくて寝てばかり

若き頃思いうかべて化粧する

デイサービス人いろいろに苦勞あり

耳なりと蟬の鳴き声暑さ負け

奈良市 尾畑 なを江

考えてるのに返事がないと言う

乗せられてアツシー君が精を出す

もう一度やってみたいな無鉄砲

人生を花火と思う長さ知る

和歌山市 鍋嶋 澄子
鰻食ベスタミナつけて凌ぐ夏
色なくてひがな病室うら寂し

試練くる雨か雫かもう晩夏
母偲び空に向かつて手を合わす

和歌山市 福呂 秀子

時時はへまして年を論される

たこ焼に真面目に蛸がかくれんぼ

夏の日の麦茶減り方バロメーター

退屈な日を無くしてマイペース

和歌山県 森下 よりこ

夏を咲くむくげの色のはかなげに

あまり暑くて立ち枯れの菊の株

ニンニクを食べすぎ娘に嫌われる

煮含める高野豆腐の久し振り

鳥取市 大前 安子

大丈夫今日の自画像笑みがある

難問一つお隣様に助けられ

相身互いが四分六になつてゆく

歩かねば社会の風が遠くなる

鳥取市 上山 一平

涼風に三日坊主もやる気出す

ミサイルにもぐれと言われ術がない

猛暑でも裸はだめと閻魔さま

いさり火がくつきりと見えない気分

鳥取市 津村 律子

三横綱の大穴埋める豆力士
老夫婦畑の管理重すぎる
生長の早さ感じる雑草地
陽を背負い一直線に草むしる

米子市 永井 三津子

捨て犬も今じゃ我が家の天下人
桔梗咲くまず一番に夫の墓
朝夕と亡父へ手合わす子の愛し
帰るたび荒れた田畑に増す不安

倉吉市 田中 紀美恵

母の手はほんわか温い春の色
飛んで跳ね世界の果てでのんびりと
年金日孫飛んで来て持ち逃げる
めちやくちやに心飢えてる地球です

米子市 野川 宣子

入所待ちお年寄りにも狭き門
はいいいえ時間のかかる老いの耳
ひたすらに奇跡祈った介護の手
年寄りが輝く出番作ってよ

倉吉市 堀 かずこ

何気なく見えた鏡の我が姿
三線の音色が胸にくつとくる
ふるさとの土をふんだら泣けてきた
暑すぎる流れる汗に秋を待つ

鳥取県 児玉 規雄

来年は犬が猫より威張る年
讓位制あれば昭和も短かった
二年生出来悪すぎる永田町
一強で政治野球も興味そぐ

境港市 中井 虎尾

帰省せぬ本当の理由は金欠や
蝉しぐれ終りてさみし残り蝉
さあ寝るか俺は起きてる夢の中
あらごめん化粧中かね酔芙蓉

鳥取県 下田 茂登子

時効になった過去を何度も思い出す
兄弟が親看る看ない採めだした
一人居の寂しさ一人かみしめる
福祉課もなかなかきつい事を言う

米子市 田村 周子

行列をしても食べたい食道楽
一日一回面白いへまやってます
面白い人でどこでも人気者
飼い犬に咬まれて口惜し医者通い

鳥取県 橋本 整

腕組んで行きたかった終の旅
よく食べてよく寝る老いの果報者
九十坂声上げ笑う膝小僧
聞き流す息子の技も愛と知り

松江市 相見柳歩
舌先のこととはじめにバレている
謎を解く書籍は既に並んでいる

堂々と柶をはみ出す気前良さ
毛穴までヒトは見ている訳でない

松江市 中筋弘充

ふしだらな神もおそらく居る出雲

飲んだくれよりもつき合いやすい酔っ払い

即席も結構行ける妻の留守

模様替えしてはならない妻の留守

出雲市 黒目ひでお

まっすぐに行かねばならぬ道ひとつ

託したい流れ星にも願いたい事

克己心長い人生いろいろだ

峠越え向かい風にも負けられぬ

玉野市 片岡富子

迷い道いつも旗振る友がいる

目標を増やし明日へと繋いでる

良い事が湿らぬように仕舞い込む

割引券使いたい時期限切れ

岡山市 大杉敏夫

少しでも痩せたい等と妻が言う

成行きで割った茶碗を買いに行く

久方に背な流されている不安

中元は奥方用のオンパレード

広島市 田桑恵子
やっと秋月とぬる爛虫の声
ATMカメラに見られ落ち着かず

同じ服微妙な笑みですれ違ふ
広島人朝の挨拶カーブから

竹原市 土井輝恵

七人兄弟順番に逝く寂しさよ
快感は蠅を仕留めたはえ叩き

夕飯の時間が待てぬビール栓

散歩道彼所も此所も休耕に

竹原市 六田半徳

月桂樹二本並んで庭守る
うばめかし大きくなつて何思う

金柑の木にやつと芽が出て夢つなぐ

五葉松我が家のスター姿よい

府中市 田辺和子

何時までも私探し秋の空
認知症と笑って言える都合よさ

騙されてみるも覚悟の上のこと

度の過ぎた物好き疲れ口にせず

三原市 笹重耕三

パパママを大工にさせる夏休み
キャッチボールしたらバレそうな疑惑

逆走を拒まぬ年寄りの頑固

ぬるま湯が好きでなかなか抜けられぬ

三次市 伊藤 寿子

味噌汁が旨い体調良しとする
ひと言を飲めば苦勞もしないのに
右脳左脳さびていくのが分かる日日
乗ってはダメ毘がしかけてありますぞ

宇部市 高山 清子

忘れたい過去を他人がむしかえす
見切品上手に使う老いの知恵
愚痴とゴミ出さない様に老い独り
難解な言葉を義歯でかみ砕く

今治市 渡邊 伊津志

健康が病自慢の輪の外に
七色の眉を売ってるマニフェスト
陽の恵み新芽と対話して飽きず
悔しい日納豆捏ねて黙ってる

佐賀市 清水 園實

孫からのみやげにお礼娘へ電話
庭の草老いて草取り金払う
宅配屋誕生祝忘れない
傘寿過ぎめし半分でダイエツト

唐津市 岩崎 實

初盆後庭師やつとこ来てくれる
残された者の記憶も限りあり
わが夢は掃除ばかりではかどらず
やつと立ち右や左へふらつとし

唐津市 吉富 節子

東京に友居て電話長くなり
生きるなら元気で居れば良き事も
下向かず上向き皆と笑み増やそ
パパだけがテレビであとは皆スマホ

山鹿市 前田 幸子

ハマユウが心開けというごとく
笑わせる人がいるからデイ楽し
うそ八百笑わせなさい老い仲間
しのび寄る涼風吹けばもの想う

沖繩県 あら さくら

趣味を持ち進化しながら花咲かす
頑張った走ったこけた過ぎた日々
はつきりと言わせてもらおう鏡より
紅濃ゆく鬼が来たぞと逃げる孫

沖繩県 禱 ももと

向日葵は満面笑顔猛暑好き
百合の花百万本の夫婦咲き
サークルは皆先生で生徒だれ
片思いはずむ心は人知れず

沖繩県 島村 つばき

言いかけた言葉忘れて咳払い
手のしわを曾孫に語る母白寿
今月も一疊分のローン減り
安眠もこむら返りに邪魔をされ

(宮すみれさん、中前幸子さん、宗福清司さんの句は45頁にあります)

橘高薰風句抄

(橘高薰風川柳句集) 平成十三年発刊

秋空に遠い景色を思い出し

美しい貝殻に似た若き寡婦

松茸をこけしのように掌にのせる

そろばんの玉債権者目白押し

ラッシュエアワーちりめん雑魚に相似たり

水枕干す秋の気が一入に

富士小さし生みの親をば思い出す

おとといと昨日と今日の虫の声

弱肉強食鱔皮の鞆持ち

特急は颯爽鳶の輪を残し

礼を尽くし礼を失し師と旅にあり

七月の奢りを極む水の精

踵かえさん魂青に溶けぬうち

混浴のさながら古き風俗画

工藤幸吉さんへ

半白のオールバックに知情意が

蛇行して蛇行して川淋しけれ

老夫婦喜びごとに疎くなり

極月やわが父の死を立話

鳥籠に雀飼うべき鳥ならず

百合も薔薇も花輪になれば俗っぽし

勲章の欲しい七才七十才

銀漢へわれも不眠の病持つ

病みて長し仏像のごと拭かれおり

日向ぼこ病衣は襤褸になり易し

波の音雨粒一つ顔に落ち

お使いの継母こわし道こわし

魔の山と見えず初日の下にあり

誹風柳多留一一二篇研究 53

小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男・山田昭夫
石川道子

清 博美

444 出来るとちじう小袖をハもらふはつ

小栗 『太平記』(卷二十一 塩治判官讒死の事)に見える高師直横恋慕の句。塩治判官の妻への仲介を引き受けた「侍従」は、うまく口説き落とせたら師直から小袖を貰う筈だったということ。間男の手引き賃が小袖だという「卑俗化」の面白さを狙った句だろう。

野暮な詮索をすると、『太平記』では、「出来る」前に師直から引出物として小袖を差し出されている(受け取ったかどうかははっきり書いてないが)。主題句の作者がこれを見落としたとは考えにくいので、一ひねりして「うまく行ったら頂戴します」くらいの返事をしたのではという設定にしたのかもしれない。

先ツ五両じじうにはむきたのむなり

天五信一

(参考)『太平記』

武蔵守いとどうれしげに聞きとれて、「御物語のあまりにもおもしろく覚ゆるに、まづ引出物申さん」とて、色ある小袖十重ねに、沈の枕を取り添えて、侍従局が前にぞ置かれたる。侍従にはかに徳付きたる心ちしながら、「あらけしからずの今の引出物や」と思立て立ちかねたるに、

清

賛。

445 松江のすゝきやんとはんれいハよび

小栗 松江まつえは、中国の松江しょうこう。鱧を名物とし

た(日)。

『平家物語』や『太平記』に見える「范蠡・魚腹の手紙」の句。

越王・勾践が会稽山の戦に破れて呉国に幽閉されていたとき、范蠡は魚の行商人の姿となって獄に近づき、魚の腹に手紙を納めて投げ入れた。そして、これを読んで勇気づけられた勾践が、呉王夫差の石淋を舐めて赦免されるという話に繋がっている。

〔太平記〕巻第四「備後三郎高德が事付たり呉・越軍の事」

主題句は、范蠡が魚の行商人を偽装したときは、「鎌倉の鰹」ならぬ「松江の鱧」と呼び歩いただろうということ。

はんれいハはつかしそうに魚を呼と

宝13頁3

半平と名をかへさかなうつて来る二〇六
清 賛。

446 あたらしいふんどしをして外科へ行

小栗 江戸時代は性病も外科の診療科目である。診察・治療してもらいに行く時は、新しい褌をしていく。いつの世も変わらぬ患者の心理である。

外科の前へきり口上でまくる也 傍三45

出しておみせなさいと外科ビシヤリ建

一五九 16

清 賛。

447 たんざくハ重忠しごくぶどしん

小栗 不同心は、同意しないこと〔日〕。

ここで「短冊」は、頼朝が黄金の短冊を付けた千羽の鶴を鶴ヶ岡八幡宮から放したという俗伝のこと。句意は、頼朝の重臣畠山重忠はこのような派手な行動には不同意であつただろうと。重忠は、忠勇に情も兼ね備えた武士らしい武士で、奢侈なことは大嫌いというコンセプトで作られた句だろう。

鳩にてはいかゞと秩父申上ヶ

八七 12

頼朝のちへのたねまく畠ヶ山

宝 12 楼 2

清 賛。

448 門松のなぐれ今戸で鬼をやき

小栗 なぐれは、①売れ残ること。またその物。②廢物。③傍杖。とばっちり〔江〕。

松の内が終わって用済みになった門松を燃料にして、今戸の瓦師が鬼瓦を焼くというのであろう。縁起物の門松と鬼を対比させたところが手柄という句。

今戸でハ人間ノ鬼をかまへ入れ 二四 36

瓦師ハ鬼の天窓を焼てくい 二二 乙 13

清 賛。抜いた門松の行方がわかった。

449 生酔をあつかわせてはとしま也

小栗 今一つはつきりしないが、生酔のよ

うな扱いにくいものを扱うのは、やっぱり経験を積んだ年増が上手だというだけの句であらうか。外のことについてはまるきり生娘だが、コト生酔を扱わせては年増並の手並みである、という風に読めないことも無いのだが、もう一つ実感を伴わないようにも思うので、冒頭の解としておく。

生酔をいつそけいはくして寐かし 二四 9

しつはりとうそをつくの八年増なり

細井 やはり年の功でしようか。

明 二 札 1

伊吹 同右。前説に賛。

清 同。

450 かんがへて見て此さきで聞かつしやい

小栗 道を聞かれた御仁がしばらく考えた後で、「わしもわからんから、この先でもう一度聞かつしやれ」などと返事をするとい

う、誰にも経験がある日常の一こまを切り取った句。

伊吹 賛。古びない句。

清 賛。

451 たいこもち大やお帳につくどころ

小栗 御帳に付くは、悪事をはたらいたり、親から勘当されたりして、公の帳簿に、その名が記載される〔日〕。

大屋は五人組の一員として江戸町政の末端に位置する存在である。店子について責任を負い、公事に連署・付き添いの義務があるほか、店子から犯罪者が出れば、監督不行き届きで処罰された。

主題句の場合も、店子の太鼓持ちが何か不始末をしたので、危うく処罰されるどころであつたというのであろう。「太鼓持ち」とわざわざ限定している意味が今一つはつきりしないが、太鼓持ちは道楽息子のなれの果てであつたり、食い詰め者の転身であつたり、要するにうさんくさい人種であつたり、要するに、当時の感覚では、「太鼓持ちなら大屋に迷惑をかけることをやりそうだね」と共感できる句ということであらうか。

清 賛。

英語 de Senryu ⑦①

麻生路郎句集 『旅 人』

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

PTAに出るを社交と思う母

*The PTA meeting
where mothers think
it is a social club*

無くなると知っても さらの傘を貸し

*knowing he'll never see
the new umbrella again
he lends it anyway*

PTA meeting PTA *think* 思う *social club* 社交界 *know* 知る *never* 決して~ない
see 出会う *判る* *umbrella* 傘 *again* 再び *lend* 貸す *anyway* とにかく

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句⑪ ポーランドの俳句を引っ張る俳人
ロバート・カニア (Robert Kania, Poland)

ロバート・カニアはヨーロッパを代表するハイク詩人です。ポーランド俳句協会の会長やヨーロッパ句会をはじめ、2015年には古都クラコウで開催された第2回国際ハイク大会主催者として活躍しました。彼の作品はアサヒ・ハイキスト・ネットワークやアメリカのハイク誌 *Frogpond* にもたびたび登場しています。彼のハイクの特徴は11音節から12音節の短い語彙による3行の作品に仕上げられています。凝縮された語彙の持つイメージから、彼の生活や生き様が透けて見えます。ポーランド語と英語で詠まれたハイク集、39 *haiku*(2015) から作品を引いてみましょう。ウィットに富んだ彼のハイクをお楽しみください。

cold morning--/ a doe is running/ from shot to shot

(寒い朝 弾丸のなか鹿走る)

ruins of a castle/ wild flowers/ in the ballroom

(荒城の舞踏会場 野花咲く)

night with kirsch--/ homeless raises a toast/ to the moon

(ホームレス月に乾杯 チェリー酒抱き)

hot night on the lake/ first kiss/ among mosquitoes

(初キスや蚊が邪魔をする夜の湖暑し)



女のきもち (2)

素肌に自信のある人や、化粧品アレルギーの人は「スツピンで勝負」でしょうが、大方のご婦人はファンデーションや口紅ぐらひはご使用になっておられるようです。

ただそのメイクアップ方法などについてはそれぞれの好みであり、他人が干渉することではないでしょう。

目標を小百合に決めて磨く古希

宇都宮ちづる

くちづけの予定もなくつづける紅

西原 典子

隠すとこいつばいあつてまだ化粧

山田 葉子

お化粧が下手で美人にまだなれぬ

秋貞 敏子

化粧して待つていたのに誰も来ぬ

若松 雅枝

逆らわず歳相応の薄化粧

鴨谷瑠美子

吉永小百合さんは今年の三月で七十二歳になられました。いつまでも若々しい大女優を目標にするとは大胆ですが、諦めずに向かつてゆく「チャレンジ精神」こそ若さの秘訣でしょう。くちづけの予定がなくても、お化粧が下手でも、誰も誘つてくれなくても薄化粧ぐらひはしておきましょう。

可愛いと言われたエクボ皺になり

安田 忠子

友達は美人わたしは歯がきれい

石田 都

店の名を訊きたい髪とすれ違つ

楠見 章子

別人になりたくなくてつけまつげ

池田 純子

七十に見えないようにイヤリング

渡辺 富子

イヤリング孫の話はしないわよ

東川 和子

男女を問わず、人を輝かせるのは「自信」です。自慢だつ

たエクボが皺になってしまったのは残念ですが、まだ歯並びなど、何か自慢になるものがある筈です。髪をセットして付け睫毛とイヤリングをつけたらたちまち別人。もう孫や終活の話などゴメン。もつと夢のある話をしましょう。

ふつくらな女になるうミルクティー

松村 華菜

干からびたお肌へペビーオイル塗る

大内 朝子

唇もトマトも完熟ですかしこ

西 恵美子

色っぽい女を演じきるつもり

松井 文香

ハイヒール履いてお尻が若くなる

荻野 圭子

ハイヒール履いたら次の日は寝込む

北村 賢子

多くの男性は「ふつくらが好き」なのは前々号で述べた通り。スリム願望など捨てて「ミルクティー」で身も心もふつくら。ペビーオイルを塗って、完熟トマトのように色っぽくなって、ハイヒールで颯爽と行けばイケメンもイチコロ。だが、無理をし過ぎると翌日は足腰が立たなくなることあり。

通販のせいにして着る派手な服

矢倉 五月

千円のドレス着こなし褒められる

笠嶋 恵美

娘の服を買い微妙な若作り

平井美智子

お茶漬けを啜りシャネルを買いに行く

紫 しめの

これが目に入らないかと持つシャネル

古今堂蕉子

ブランドの鞆は見える方に持つ

古久保和子

お化粧の次に女性を際立たせるのはファッション。少々派手であっても顔と自信でカバー。激安ドレスでも娘のお古でも着こなすのがおばちゃんの凄いとこ。おかずを始末して、亭主の小遣いを減らしてようやくゲットしたシャネルのバッグは堂々と見える方に持つ。これもおばちゃんの鉄則。

第23回 川柳塔まつり

同人総会

・第五回「春の川柳塔まつり誌上大会」を実施し、前回を大幅に上回る700名の応募を頂く成果であった。

平成二十九年第五十二期川柳塔社同人総会は十月七日午前十時よりホテルアウ

イーナ大阪で開催された。総務部島田誠一の司会で開会し、冒頭小島蘭幸主幹からご

出席の皆様にも雨模様の中、出席いただいたお礼と日頃の協力支援に感謝が述べられた。

又、塔運営も同人の拡大など成果も見え、概ね順調である旨報告され、今後も引き続き

引き続き頑張る所存との決意も含めた開会の挨拶をいただいた。その後小島主幹を議長

に選任して議案審議に入った。

第一号議案の平成二十八年年度事業活動を片山かずお企画部長が報告した。

・第二十二回「川柳塔まつり」を開催し参加者321名であった。

・本社句会の充実に努め、年間を通して100名越えを達成できた。

・経費節減を徹底的に実践し、今期も収支黒字化を達成した。

次いで鈴木いさお会計部長から平成二十八年年度の収支決算書及び財産目録の提示と報告があり、藤村亜成会計監査が監査承認の旨報告した。特に質疑は無く、一号

議案は拍手で承認された。

第二号議案の平成二十九年度の事業計画について片山かずお企画事業部長から各部

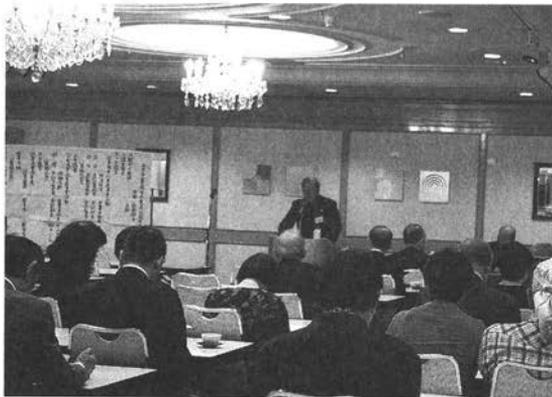
別に活動計画を提案、また鈴木いさお会計部長が新年度予算案を提案本件も質疑は無く

く二号も拍手で承認された。

第三号議案として、新家完司理事長よ

り役員の新任、再任人事が提示され拍手をもって承認された。新任役員名は後掲。

又、議案に関する最終質疑の中で、塔社役員75歳定年制に関し高齢化社会の中で更なる延長をとの意見があった。これについては後刻常任理事会にて検討することとした。新役員を代表し藤村亜成新常任理事の挨拶があり、最後に川上大輪副主幹の閉会の辞で総会を終了した。



同人総会の模様

事業活動報告

2017年(平成29年)

10月1日 22回川柳塔まつりおよび

平成28年度同人総会を開催。

11月12日 川柳塔碑合祀法要を実施した。

(高野山大霊園。合祀者8名、

法要参加者合計14名)

主な受賞・表彰

*本社句会 月間賞永久保持者 居谷真理子

*藤井寺市市制五十周年感謝状

川柳藤井寺(代表高田美子)

*(社)全日本川柳協会功労賞 三宅保州

*全日本川柳大会十回連続参加賞

鈴木公弘、小沢淳

出版・句集の刊行

奥 時雄 句集「苦句八一歳」

大山滝句座 合同句集「大山瀧」

翠 洋 会 合同句集「翠洋」

澤井 敏治 句集「明日を生きる」

六甲川柳会 合同句集「ろっこうみちⅡ」

片岡智恵子 句集「松風」

ほたる川柳同好会 合同句集「ほたる」(第5集)

そうりゆう会 合同句集・その九

物故者 (一〇名)

波多野五楽庵 平成28年 8月17日没 88歳

高島 啓子 平成28年 8月22日没 78歳

藤岡ヒデコ 平成28年 9月27日没 84歳

宮園射月芳 平成28年 10月1日没 87歳

林 瑞枝 平成29年 1月30日没 91歳

恒松 町紅 平成29年 2月14日没 93歳

小林由多香 平成29年 2月25日没 89歳

野田 栄呼 平成29年 5月13日没 86歳

平島美智子 平成29年 6月5日没 82歳

松尾 和香 平成29年 6月17日没 82歳

新任役員(再任・留任は含まず)

常任理事 藤村 亜成 中川ひろ介

内田志津子

参与 古今堂蕉子 坂 裕之

理事 石田ひろ子 上田ひとみ

澤井 敏治 栃尾 奏子

中村 恵 藤田 武人

新同人 (28年10月、29年9月)

有海 静枝(下松市) 伊藤のぶよし(男鹿市)

上出 修(豊中市) 上村 夢香(岩国市)

宇賀 史郎(奈良市) 小河 柳女(鈴鹿市)

奥田 由美(鳥取市) 鴨田 昭紀(三原市)

川名 洋子(八王子市) 木田比呂朗(塩竈市)

小松 紀子(北九州市) 近藤 修二(松山市)

菅田かつ子(雲南市) 高杉 力(大阪市)

高橋 敬子(奈良市) 田中 天翔(鳥取市)

田中ゆみ子(大阪市) 谷口 修平(三田市)

仲谷 真(羽野野市) 中村 伸子(上尾市)

永田 紀恵(尼崎市) 西田美恵子(西予市)

日野岡和之(川西市) 平井美智子(大阪市)

藤田 雪菜(尼崎市) 細川 花門(神戸市)

前田 洋子(日置市) 松本はるみ(雲南市)

丸山 孔一(宝塚市) 宮野みつ江(岸和田市)

柳田かおる(松山市) 山口弘委智(枚方市)

同人総会出席者(順不同・九二名)

澤井敏治 山崎武彦 福土慕情 山本希久子

初代正彦 大内朝子 松山芳生 大久保真澄

安土理恵 長浜美籠 安福和夫 宇都満知子

鶴田遠野 伊達郁夫 遠山唯教 今井万紗子

田中章子 川上大輪 小林わこ 久保田千代

水野黒鬼 島田誠一 村上玄也 松尾美智代

池田純子 藤井智史 前たもつ 内田志津子

柿花和夫 小島蘭幸 能勢利子 吉村久仁雄

新家完司 牧野芳光 藤井宏造 森松まつお

内藤憲彦 松岡 篤 三宅保州 江島谷勝弘

木本朱夏 西出楓葉 榎本舞夢 出口セツ子

山野寿之 吉岡 修 藤村亜成 片山かずお

川端一步 藤井文代 山口光久 上田ひとみ

藤田武人 藤井寿代 松原寿子 山岡富美子

石田隆彦 坂 裕之 大浦初音 岩佐ダン吉

石橋芳山 坂本加代 籠島恵子 佐々木満作

中村 恵 永見心咲 栃尾奏子 古今堂蕉子

前田楓花 丹下凱夫 寺賀史郎 居谷真理子

川名洋子 寺井弘子 渡辺富子 鴨谷瑠美子

北野哲男 丹後屋肇 村上直樹 中川ひろ介

榎本宏子 杉本義昭 原 洋志 榎本日の出

原田すみ子 鈴木いさお 藤原千恵子

大田扶美代 緒方美津子 斉尾くにこ

山口弘委智 飛永ふりこ

おじいさん おばあさん

西村 哲夫



西村 哲夫氏

川柳に出合つて言葉の難しき、使いこ
なす小癪こぼさ、自分自身が持つている言葉
の未熟さを思い知らされた気がします。
原語体系、日本語として成り立たない外
国語の語彙はそのままカタカナとして書
きます。サンキユウは只あなたに感謝す
る事で、ここに有ること難しのありがと
うとは意味が違います。今では当然のよ
うにサンキユウありがとうに成ってい
る。もつと日本語を見直さなければと感
じました。当然を当前と書き当たり前と
言葉が出来ていく、当然でない出来事が
有ること難し「有り難う」なのである。

2月頃「題」を「お

じいさん、おばあさん」

と言ったものの、今の
今でもどうお話をしよ

うかと思索しています。

素直な「おじいさん、

おばあさん」という言

葉の意味・あるいは何処でどう使うか少
しばかり考えさせて貰いました。

まずは言葉ということですが、難しい
です。言葉の文化があります。日本語は
述語的文化といわれます。主語がない文
化。たとえば台所から良い香りがする。
結果を出して困を言う。湯（水）を沸か
す。嫁（娘）をもらう。飯（米）を炊く。
仏教用語ですが「因中説果」と申します。
私がない文化、主語として私を言わなく
てもいい文化、その上に立つての言葉。

物と事

事とは伝わらない。事柄・出来事・事
件。大事・ご無事で・仕事・物事。思考
し得る対象の一切を意味する。(例 私
の事を知っていますか)。物は事の現象
に対し、その現象を担う不変な実態を想
定して用いる語とある事を物にして伝え
る。物の究極が言葉である。言葉とい
うのは事の葉、木の端っこというのが葉。
ヒトたらしめているのは言葉の偉大性

生物学者・福岡紳一の記事。

生き物が暮らすところには争いはついで
てまわる。あらゆる生命体は細胞レベル
で自分の子孫を残そうと最大限の努力を
するもので、生き残るために他と戦うこ
とは遺伝子にプログラムされている。そ
して遺伝子の命令に生き物は抗えない。
だから生き物の世界で争いが絶えないの
は仕方がないことだと。身も蓋もない。
「世の中安穏なれ」スローガンは雲散霧
消してしまふ。でも続きがあった。唯一
ヒトだけが遺伝子の呪縛から逃れ得る生
物となった。「争え」「奪え」「種を残せ」とい
う遺伝子の命令に対して、「協力し」「分け
与え」「個を大事に交流する」という価値
観を作りだすことにヒトは成功した。そ
れはヒトが言語を持ち、深く考えるよう
になったからだ。深い思考がヒトをヒ
トたらしめたというのである。サンスク
リット語で人間の事(こと)を「マニシヤ」
といい、それは「考える(もの)」「思慮分
別のある(もの)」という意味であった。こ
れらの根源が言葉なのである。思考する
が故に未来への不安が起こってくる。そ
のまんま現在、今の不安となり今の私の
行動そのものが何をやっていく事やら。
未来の先取りをする。一番の証拠が自
殺。それを食い止めるのがじいさんばあ

さんの何気ない言葉なのかと思ったのです。

明治時代にネーチャーという言葉が入ってきた。日本語にはこれを現す言葉がない。そこで仏教用語から来る自然という言葉で「しぜん」と読ませこれに当てた。

【ブラクリティ→經典（中国語）に翻訳する際、論に出る自然を此に当てた】西洋は、私と自然（しぜん）がまずあって自然を私の対象と見ている。日本は明治以前自然という言葉がなかった。アイヌのカムイ（神）がこれに当ててあったと考えられる。山の神・海の神と表現していたようだ。

仏教用語の自然とはまさしく、私の計らいを加えない。「おのずから然り」私の手を加えない言葉が自然というのである。自然は私の計らいがない、人間の手を入れない事。私（主語）が無くて通じるのが日本語。西洋は私を主張、譬え「徳永和上アメリカでの授業あなたの意見を聞かれる」。日本は私を主張しない。譬え「がばいばあちゃん運動会のお弁当」「人に気付かれないようにするのが本当のやさしさ」

「川柳でもって私の中の悪汁を絞り出す」とは路郎の表現。

陰膳と離れの意義

家族の食事の中心はおとうさん。お父さんが居なくても此処にいるという体で陰膳をし、一緒に食事をする。これが家族の有り様だった。じいさんばあさんは家族から引退するが、尊ばれる存在となり離れて暮らす。食事の時にはまず一番に呼びにゆく。父の親である故、一番であることには違いないが、家族の中でじいさんばあさんの存在感は主張しない。

（お祖父さんお祖母さんの使い方）

「昔とは父母のいませし頃を言い」路郎の句には父さんの句はあるが、「お婆さんに限り死にたがり死にたがり」じいさんは見当たらぬ。「古稀は良し弟子に孫弟子ひ孫弟子」本当の孫の句はない。私は登場しない。

先に述べたがばいばあちゃんのように他人様に私を分かってもらわなくても良い。私を主張しない日本文化ですから。孫が勝手に、おじいさんおばあさんの中に、私のいのちを見るだけです。先祖も私から一方通行で見ているだけ。何処までを先祖というのか。ひいじいさんは曾祖父は八人いることになり、縁からいえば一六人が相まって私が此処に存在する。寺の一五代目は三二七六六人が相まって一五代目の存在を成している。私

の存在を知るとなると何処までいけば良いのだろうか。生物の存在はコラーゲンと聞くと、地球が出来る四〇億年まで遡らなくては、私の存在はあり得ない。

じいさんばあさんは、今たった二代前の話である。年代の重さだけではない。川柳を通じて路郎葎乃は結ばれた。川柳がなければ母は存在しない。それぞれがそれぞれの縁のいのちを頂いた。

寢床でする話を伽という。夜伽も同じで一晩かけて夜を通してする話である。ちなみに臨終とは終わりに臨むのである、まだ終わっていない寝ている状態、娑婆世界の終わりを迎える状態をいう。

お伽断に見るおじいさんおばあさんお話をするのは親かも知れないが、内容はおじいさんおばあさんがメインの話である。父母に言えば怒られることも、じいさんばあさんには優しく包んで、人生訓を教えてもらえる。自分の事をじいさんばあさんという言葉に乗せて、自分の存在を知らしめて下さる事が有り難い。じいさんが死んでしまったら先祖となるが、川柳の中にいつまでも生きていることを教えてくれた。

祖父母から漏れ出た命重たくて 哲夫
（西村哲夫さんは麻生路郎の五女梨里さんのご子息である）

各賞表彰・記念句会

第三回川柳塔まつりは十月七日、ホテル・アウイーナ大阪で開催された。某国のミサイル発射、衆議院解散などの慌しい世情をよそに、北は青森から南は沖縄まで十歳から九二歳、参加者三二二名の盛会であった。



受賞者（敬称略）後列右から、海老池洋・原洋志・延寿庵野鶴・内藤憲彦・籠島恵子・前列右から、松山芳生・大久保真澄・主幹・柳田かおる・中山春代

会場正面の金屏風の前には麻生路郎師の胸像。いつものことながら暖かくはにかんでおられるように見える。司会進行は水野黒兎・古今堂蕉子。開会の辞は新家完司理事長。小島蘭幸主幹の挨拶。祝電の披露のあと六賞の表彰式が行われ、各受賞者に主幹から表彰状と記念の楯が贈られた。

続いて本年度の新同人の内、出席者の一五名が紹介され、秋田から参加の伊藤のぶよし氏が代表して、新同人としての抱負と決意を力強く述べられた。蘭幸主幹を囲んで表彰者及び新同人の記念撮影が行われた。

おはなしは西村哲夫さん。題して「おじいちゃん おばあちゃん」。哲夫氏は路郎師の五女・梨里さんのご子息である。すなわち路郎師のお孫さん。僧侶である哲夫氏のおはなしは大変示唆に富み、哲学的であった。（詳細は78頁参照）

暫時の休憩のあと記念大会に入る。各題天位には記念品が贈呈され、川上大輪副主幹の閉会の挨拶を以って無事滞りなく記念大会は終了した。

月間賞は上嶋幸雀氏。（池田市）
司会（黒兎・蕉子）協取（奏子・万紗子）
清記（富美子・勝弘・憲彦・正彦）

撮影（松岡恭子）



兼題「もしも」

斉尾くにこ選

会う夢が叶うならまず薫風師
風船が百個もあれば飛べるかな
若過ぎるもしもの写真撮り直す
人生のお代わり一丁願います
行く先は自由もしもという翼
もしもって今なんですよ子供たち
もしここで笑えば許すことになる
四コーナーのシナリオまさか期待する
非常袋に辞書と真つ赤な口紅を
龍宮城へもしもの思ひ亀を飼う
緊急連絡書斎に貼っておくことに
出会い頭一瞬背筋凍りつく
ギネスまでもしも生きたらどうしよう
爺ちゃんの長湯気になり胸騒ぎ
生きてたら一番風呂は父のもの
老い深むもしもが増えていく
百歳で大臣賞をとるもしも
フグ料理先ずは夫に食べさせる
妻もしも美人だったたら人の妻
もしも僕が女だったたらボク選ぶ
初恋が実っていたらうふふふ

藤井 則彦
久保田千代
田中 天翔
中川 一男
山本希久子
加島 由一
米澤 俣子
五味 尚子
古久保和子
松本あや子
小島 蘭幸
澤山よう子
宮崎シマ子
久世 高鷲
中島 一彌
笹倉 良一
上山 堅坊
増田 隆昭
山口弘委智
鈴木いさお
松岡 篤

せめてもと非常袋のリニューアル 山田 順啓
 一言の添え書きもしも浮かばせる 橋田 秀穂
 わたくしがもしもの時はただ横に 高田まさじ
 妻の留守へそくりの無事確かめる 穂口 正子
 もしもから生まれるトトロ ドラえもん 栃尾 奏子
 もしももしもと平和憲法遠ざける 内藤 憲彦
 お帰りのなさいと壘蜜がもしも 丹下 凱夫
 熱爛がプラス思考にするもしも 倉益 一瑤
 僕が知る君ならここで逃げないよ 居谷真理子
 孤老死のもしもが溢れ出るポスト 坂本 星雨
 合掌の中へもしもをつけ加え 海老池 洋
 人文字の練習SOSです 次井 義泰
 くちびるの紫へもしもが止まる 水津加央里
 こけた時もしも車が来ていたら 安田 忠子
 戦争にもしも勝ってたらゾツとする 辻 肇
 転動のもしもへ妻も英語塾 萩原 裡月
 新同人もしも入選したならば 仲谷 真
 もしもに備え棺の寝具合顔うつり 徳山みつこ
 甘すぎるおはぎもしもを詰めたから 青砥たかこ
 イフは無いもぐらたたきで押さえ込む 森井 克子
 タケコプター有ったらしいな膝と腰 村田 博
 たんぽぽを吹いてもしもを考える 能勢 良子
 弾け出る豆はもしもの笑いかな 藤田 雪菜
 肩かこの中はもしもで充ちている 原 洋志
 たらればを並びたててる風の私語 杉本 光代
 多数派になつたら僕はだらしな 岩佐ダン吉

人生のイフ追いかけている枕 山田 耕治
 心配がもしもの箱を積みあげる 菊地 良雄
 恐竜がいたらベットにしてしま 西 美和子
 パーチャルの世界で飛び跳ねるもしも 郷田 みや
 佳
 福島菊谷原発にあるもしも 藤井 寿代
 星空に何度もワープするもしも 石橋 芳山
 夜よ眠れ鏡にもしも閉じ込めて 木本 朱夏
 アラジンのランブが眠るおもちや箱 真島 涼
 積み上げる「もしも」バベルの塔になる 牧野 芳光
 人
 歴史のif知の空想をかき立てる 谷川 憲
 地
 猜疑心性善説を裏返す 大杉 敏夫
 天
 憶測の海に私という小舟 真島久美子
 軸
 湖のドレープ打ち寄せるもしも



兼題「歌」

久保田千代選

雲間から母の鼻歌秋はそこ 今井万紗子
 鈴虫のソプラノ秋の封を切る 松山 芳生
 五線譜へアカトンボ飛ぶ秋の天 延寿庵野鶴
 落ち込んだ日には夜明けの歌がある 岸井ふさゑ
 朝明けのハミング響く台所 初代 正彦
 ラジオからの歌を身体が覚えてる 山田 葉子
 ハミングをしながら卵かけご飯 郷田 みや
 ひび割れた傷口シャンソンが沁みる 石橋 芳山
 五歳児がベサメムーチョをリクエスト 上野多恵子
 シャンソンに重なる永らえた命 安土 理恵
 何でもええ歌えとマイク渡される 早川 遡行
 音痴でも歌詞をミスったことがない 清水久美子
 健気にもサビをきかせている音痴 山田 順啓
 重症は自分の音痴知らんこと 松岡 篤
 五線譜をかき乱してる父の歌 村上 玄也
 風呂場から親父のなにわ節の声 坂上 淳司
 鈎裂きのころへ沁みる母の歌 渡辺 富子
 こんこんと酔えば湧きでる古い歌 大堀 正明
 お隣りの歌に合せて昭和を唄う 櫻崎 篤子
 リバイバル昭和の心掴みとる 松原 寿子
 カラオケの手直ししてる風呂ゆるり 吉岡 修
 青い山脈歌うわたしのサブリです 石田ひろ子
 紅白は欠かさず偉大なる情性 井丸 昌紀
 父の樹のてっぺんに吊る反戦歌 両川 無限
 堂々とした晶子の反戦歌 柴木ぼっは
 ひめゆりの塔に乙女の鎮魂歌 井澤 壽峰

反戦歌みで誓った彬の碑 澤井 敏治

人を恋う歌は祈りになってゆく 平井美智子

木枯らしが歌うイマジン聴こえぬか 高杉 力

青春をガッツポーズにする校歌 美馬りゆうこ

パルトンの告白ソプラノで受ける 鈴木いさお

にぎやかな歌でさみしくなる独り 加島 由一

悲しさをほぐすほどよい歌に会う 山本 昌代

イントロで我が青春が立ちあがる 柳田かおる

最後には校歌でしめるクラス会 鈴木 栄子

背中押す歌詞を味方にアスリート 古今堂蕉子

阿久悠をめくると五線譜が炎える 前田 楓花

ナツメロが僕の心の拠り所 片山かずお

出直しの背中に母の応援歌 伊藤のぶよし

ふさぐ日は瞬く星が応援歌 小野 雅美

被災地と手を携える花は咲く 梅澤 盛夫

傷口を洗ってくれた童歌 楠原 富香

安来節泥鰌掬いの出番です 山内 迪

川柳は余生色どる応援歌 永田 紀恵

ロボットが唄うヨイトマケの歌 竹村紀の治

ねじ巻いて河内音頭の輪が回る 山野 寿之

空っぽになるまで歌う淋しがり 太田扶美代

路地裏に漏れる演歌の人くささ 島田 誠一

住

ポプデイルンから貰っているパワー 丹下 凱夫

緑あつてやがて夫婦は歌になる 橋田 秀穂

自分史に重ねて歌う四季のうた 鴨谷瑠美子

軍歌うたう父の悲しい目を見たか 西出 楓楽

数え歌母は童女になりました 岩田 明子

人 働哭の海に漂う鎮魂歌 武本 碧

地 青春のマグマ噴き出すひばり節 村上 直樹

天 言の葉を紡いで歌に季が巡る 水野 黒兎

軸 コスモスも音符になって野に歌う



兼題「追う」

早川 遡行選

百名山へ夢追いつづけあと十座 鈴木いさお

一票の行方徹夜で追うテレビ 次井 義泰

真相を追うほど深くなる疑惑 佐々木満作

青い鳥追ってる内におばあさん 金子美千代

ほがらかに生きて小さな夢を追う 穂山 常男

夢追うて邪馬台国へ行くもよし 山田 耕治

五十年沢田研二を追うている 上野多恵子

警官も犬も逃げると追ってくる 吉崎 柳歩

夢ばかり追うて人生道半ば 杉本 義昭

剣山の森一輪を追っている 栃尾 奏子

棟梁の背中を追った丸鉋 島尾 政男

追憶の世界に亡母が生きている 鶴田 遠野

生きている限り飽くなき夢を追う 清水久美子

夢を追ううちに悟った向き不向き 西澤 司郎

シヤボン玉追って叶わぬ恋ばかり 森 廣子

コスモスの迷路で彼を見失う 松本あや子

子育てと金に追われた頃が華 谷 久美子

追い風に乗って未来をこじ開ける 山口 光久

追い付けぬ背中ばかりを追っている 斉尾くにこ

うっかりと歳を忘れて蝶を追う 伊達 郁夫

どこまでも監視カメラが追ってくる 藤井 宏造

うまい酒うまいアテ追い脂肪肝 新家 完司

追いついた時に幻だと気付く 牧野 芳光

先人を追えば険しい山がある 龍島 恵子

亡母に似た人を思わず追いかける 三宅 保州

ライバルの背中を追っていく闘志 五味 尚子

奈良古墳木簡の墨追うロマン 榊木 宏子

逃げていく若さを追ってけつまずく 渡辺 富子

追うほどに夢と女は遠ざかる 都 武志

追うものがあつて絶えない向う疵 山岡富美子

追う逃げる逃げるから追う恋の唄 緒方美津子

案山子まで流行を追う里の秋 澤井 敏治

流行を追いまネキンの冷たい目 川名 洋子

わろてんかええ年こいて夢追うて 山本 進

夕焼け小焼け亡母の残像追っている 両川 無限

まだ女してます恋を追ってます 鈴木 栄子

徘徊の後追う路地の星月夜 中西 宏夫

追い付いた遠端に消えるシヤボン玉 楠原 富香

追いついてさてここからが急な坂 内藤 憲彦

トイレまでメールで仕事追ってくる
ドラキュラに追っつけられて目が覚める
も一人の私を今も追っている

白球を追った青春悔いはなし
トッパ追う自分もいずれ追われる身
九秒台追ってカモシカ風になる

夢を追う国がミサイルもてあそぶ
追っかけて結ばれました二十歳の日
追えばすぐ叶える夢を一つ持つ

老いたっておしゃれたのし追ってます
次の世はちがう人生歩みましょ
尻尾にも蠅追う役目ちゃんとおる

追越したバイクは青い風だった
山は逃げないゆつくりと追う登山靴
追い掛けるときは素敵に見えたのに

順追って話そう酒を追加する
平均寿命追って頑張るストレッチ

深追いと気づいた時は崖つぶち

追憶の彼方に夢が踊る

紫の月になるまで追いかける

追い駆けて見ても適わぬ夢でした

トイレまでメールで仕事追ってくる
ドラキュラに追っつけられて目が覚める
も一人の私を今も追っている

白球を追った青春悔いはなし
トッパ追う自分もいずれ追われる身
九秒台追ってカモシカ風になる

夢を追う国がミサイルもてあそぶ
追っかけて結ばれました二十歳の日
追えばすぐ叶える夢を一つ持つ

老いたっておしゃれたのし追ってます
次の世はちがう人生歩みましょ
尻尾にも蠅追う役目ちゃんとおる

追越したバイクは青い風だった
山は逃げないゆつくりと追う登山靴
追い掛けるときは素敵に見えたのに

順追って話そう酒を追加する
平均寿命追って頑張るストレッチ

石田ひろ子

藤井 寿代

川上 大輪

西出 楓葉

本田 智彦

村上 直樹

遠山 唯教

安田 忠子

吉村久仁雄

吉岡 修

大浦 初音

大坪 一徳

原 洋志

山本希久子

柳田かおる

森松まつお

松尾美智代

福士 慕情

井澤 寿峰

前田 楓花



兼題「ブレイキ」

福士 慕情選

不倫願望だからブレイキ取り外す

一線を越えてブレイキ甘くなる

都知事から踏み絵が届く元議員

国連のブレイキ効かぬ北の国

村度にブレイキ踏んだ跡がない

暴走を止める一票持つている

タレントも議員もブレイキのない不倫

ひと言をグッと飲み込みあかんべえ

再稼働アクセルばかり踏んでます

ブレイキが壊れたみたい喋りすぎ

ブレイキが要る程早く走れない

ブレイキは掛けぬ最後の恋だから

町角のブレイキ命持ち帰る

地獄門ブレイキ踏んでバックする

急ブレイキの音にたじろぐ繁華街

ブレイキを踏んでも止まらない悪夢

ブレイキを踏み間違える老いの影

ブレイキが効かず老化が加速する

ブレイキとブレイキ効かぬ物忘れ

ブレイキが外れ仮面が剥がれ落ち

ブレイキは反骨ですか愛ですか

ボンコツ車ブレイキだけは新車なみ
左手のやんちゃ右手がたしなめる
徳利の底へブレイキかけに来る
一升瓶もブレイキがかららない
ブレイキが故障二次会三次会
過ぎたるは毒とブレイキ踏ます酒
またしてもスカート踏んだ男下駄
喋ったら妻に笑顔で足蹴られ
ブレイキを踏むなどユダの声がする
じゃじゃ馬の妻の手綱をグイと引く
不渡りの列車が停まる駅がない
ブレイキをこわし熱愛まっしぐら
思いきり泣きなさい止めませんから
顛末はブレイキ痕が知り尽くす
ブレイキの音一瞬の明と暗
子の自立ブレイキ踏まぬ親でいる
ブレイキを踏んでやりたい熱カパン
塩砂糖酒もブレイキ要る病
ミルクユついブレイキが甘くなる
食欲のブレイキ壊すバイキング
ブレイキは野暮秋が呼ぶ酒が呼ぶ
ためらいとブレイキ痕のある夫婦
ブレイキのきかぬ性格にも困る
ブレイキを踏めば空転する思考
母さんの一言雨も止まりました
平坦な道でブレイキばかり踏む
あと一歩足を出せない癖がつき

両川 洋々

川端 六点

内藤 憲彦

藤原千恵子

鈴木 栄子

細川 花門

加島 由一

中井 萌

前田 紀雄

藤井 文代

丸山 孔一

平井美智子

櫻崎 篤子

竹口 清信

丹後屋 肇

土田 欣之

黒岩 靖博

谷 久美子

肥山 一文

みざわはな

七反田順子

笹倉 良一

水津加央里

片岡 加代

山野 寿之

伊藤のぶよし

池田みほ子

村田 博

牧野 芳光

山本 進

中西 宏夫

五味 尚子

西 美和子

西澤 司郎

田中 朋子

阿部 俊八

宇野 幹子

北野 哲男

中岡千代美

石田 隆彦

村上 直樹

永見 心咲

前川千津子

久保田千代

嶋澤喜八郎

郷田 みや

杉本 光代

ブレイキが甘くてちよんぼばかりする
ブレイキに危機一髪という奇跡

風鐸の風と語っている時間
余命半年時計は容赦なく進む
見て歩くだけが女でいる時間

古川 洋子
坂本とも湖
川端 六点

原風景一挙に時間巻き戻す
贅沢な時間を病から貰う
貴方という時間たつのを忘れます

大堀 正明
坂本 星雨
田中 章子

再会に恋のブレイキあまくなり
お喋りにブレイキかける指一本

鶴田 遠野
岩切 康子
無の時間楽しむように夫婦の茶

片岡 加代
片岡 好
片岡 好

わたくしの時間盗んだ人も老い
さかのぼる時間ときどき嘘をつく
少しずつ折る時間が増えてきた

思考力停止傘寿の認知症
冷静になろうなろうと手を洗う

井澤 壽峰
真島久美子
紙の鶴残り時間を飛びなさい

長島 敏子
真島久美子
山本 進

ランドセル私はとても忙しい
ゆつくりと醜酔をして丸くなる
やわらかい時間流れている授乳

書いた辞表破かせたのは子の寝顔
地

村上 玄也
腕時計見ぬ約束で逢う土曜
テイタイム猫も期待をして座る

大西 將文
上田 和宏
中西 宏夫

病む妻の寝息を頬に秋夜長
泣いた日があつて時間が生きてくる
手探りの時間の先にある希望

天
報われたなみだ感謝が止まらない

齊尾くにこ
今まさに核はいらない平和賞
薄の穂時間が語りかけて来る

美馬りゅうこ
前中 知栄
辻内 次根

人情に溺れ潮時読めずいる
秋あかね遠い時間と交差する
待たされて惚れた弱みの嘘をつく

軸
ブレイキを踏んでばかりで進めない

松原 寿子
幸せな時間と思う朝ごはん
東の間に詩人にさせて秋のペン

市坪 武臣
加川 靖鬼
市坪 武臣

人のため使う時間を汲んでいる
今夜また長い時間とする勝負
人情に溺れ潮時読めずいる

兼題「時間」
田中 新一選

お坊さん時間どおりに座をはずす
懸命になると時間に価値がつく
こむら返りの痛みに耐えている時間

大島美智代
上野多恵子
富田 末男

春樹読む今夜の雨に音がない
断ち切ったとたん時間が動き出す
疑いは晴れて時間が流れたです

一秒の誤差で生じた運不運
碁敵が来る時時計に針がない

鶴田 遠野
西出 楓楽
榑尾 奏子

郷田 みや
大久保眞澄
川上 大輪

妻の時間食べてしまったのは僕だ
還らない時間を問うてばかりいる
疑いは晴れて時間が流れたです

健康だ時間通りに腹が空く
二日酔い体内時計狂わせる

油谷 克己
次井 義泰
憎しみを忘れるくらい懐かしい

石田 隆彦
菊地 良雄
小川賀世子

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです



兼題「時間」
田中 新一選

結論はまだ九回裏の奇跡まつ
ジャムを煮る素直になつていく時間
いい時間でした友達増えました

小川賀世子
郷田 みや
大久保眞澄

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです
疑いは晴れて時間が流れたです

人

寂しさに負けて時間が絡みつく 石橋 芳山

地

過ぎたこと言うまい月は満ちてくる 菱木 誠

天

幸せな時間二つの椅子で足り 小林 若芽

軸

虚しさを引き摺りながら独りめし



兼題「魚」

小島 蘭幸選

煮魚は老母に任せている我が家 中井 アキ

海水温一度上がって消えた魚 上田 紀子

雑魚でよし今を大事に生きる老い 穂山 常男

正念場鱒の群れに紛れ込む 富永 恭子

雑魚群れて雑魚が蠢く都市砂漠 中蘭 清

豪快に郷は鱈の一本釣り 北村 賢子

群れてなお鱒一匹ここに座す 前中 知栄

釣り好きの釣りは釣果を気にしない 片山かずお

大漁旗見るとみすゞに突き当たる 澤井 敏治

雑魚という軽さ余生を泳ぎ切る 山岡富美子

天寿全う小骨の多い雑魚のまま 高杉 力

鮎解禁父の投網の音がする 田中 天翔

食文化どうあれ秋はサンマ焼く 笹倉 良一

地魚と地酒で旅を締め括る

目刺し焼くみすゞの詩がふとよがる 金子美千代

過疎化した村に戻って来たためだか 島田千鶴子

ミサイルはゴメン 水族館の魚 赤松ますみ

さかなクンみたいな生き方が理想 谷口 東風

雑魚なれど不戦の誓い堅持する 柿花 和夫

釣り堀の隅で孤になる空になる 長島 敏子

釣って来た魚合掌してさばく 榎本日の出

歩道橋魚眼レンズのオトコたち 榎瀬みちを

鱒さえ命ひとつを輝かす 森 廣子

雑魚群れて群れて守っている命 山野 寿之

まんぼうとのんびり広い世を泳ぐ 水野 黒鬼

汽水湖の魚に右派も左派もいず 吉村久仁雄

魚には海も悩みを打ち明ける 青砥たかこ

海遊館ジンベイザメと泳ぎたい 本田 智彦

雑魚群れて平和の歌をうたわんか 大内 朝子

解体ショーされる心配ない鱒 吉崎 柳歩

金魚を掬うひと時の独裁者 升成 好

哀しみを越えて鱒は沖へ向く 渡辺 富子

家計簿に優しい雑魚が好きなき妻 鶴田 遠野

回遊魚に働き詰めの父をみる 島尾 政男

アンチオビも私もかなり臍曲がり 藤井 寿代

魚の小骨喉に刺さったまま生きる 坂本 星雨

鮎食の果てに愛されてる目刺し 小林 若芽

一年の計に鮎釣り解禁日 萩原 狸月

回遊魚海にバスポートは要らぬ 広瀬 勝博

村田 博

金子美千代

島田千鶴子

赤松ますみ

谷口 東風

柿花 和夫

長島 敏子

榎本日の出

榎瀬みちを

森 廣子

山野 寿之

水野 黒鬼

吉村久仁雄

青砥たかこ

本田 智彦

大内 朝子

吉崎 柳歩

升成 好

渡辺 富子

鶴田 遠野

島尾 政男

藤井 寿代

坂本 星雨

小林 若芽

萩原 狸月

広瀬 勝博

魚へんの漢字ゆたかな食文化

雑魚だった頃は自由に泳いでた 川上 大輪

月二回人魚になれるスイミング 松尾美智代

ジュウジュウと秋刀魚野武士のような面 藤井 宏造

金魚すくい金魚は赤ちゃんなのです 柏原 夕胡

生き延びる鱗一枚ずつ捨てて 嶋澤喜八郎

まばたきをしたら怖そう魚の目 平尾 正人

ジンベイザメになってしまったわたしです 高田美代子

さまざまな試練に耐えたなあ鱒よ 緒方美津子

鯖鱒さんまで老化遠ざける 藤原 大子

頑固さはシラカンスに敵わない 山東日出男

秋刀魚焼く目から零れた海の色 宇野 幹子

鯛よりも文学性のある鱒

鮎釣りに行って土産は地場野菜 森中恵美子

一合の酒と目刺しで国憂う 細川 花門

アンコウとオコゼになって来たふたり 山崎 武彦

やる時はやるマンボウの自尊心 倉益 一瑤

竹村紀の治

チョウチンアンコウが笑わせてくれました 西 美和子

父の座に尾頭付のあった頃 木本 朱夏

天

廃校にめげず遠泳するメダカ

軸

おいしい初め本当に鯛を釣って来た

上嶋 幸雀

参加者の感想

川柳塔まつりに参加して

牧野 芳光（同人・鳥取）

出不精の私ですが、このところ毎年川柳塔まつりには参加しています。そのたびに皆様の懐かしいお顔を拝見し、挨拶を交わし話をさせてもらっています。昨年と今年は懇親会へは参加せず、大阪在住の親しい友達と四十年ぶりの話をし過ぎてしまいました。

さて、川柳塔まつりとは、まさに「まつり」であり、全国から集まってこられる柳友と話をするのが一番の目的だと思っています。このまつりのために運営に携わり、滞りなく運営されている方々に最大の賛辞を贈りたいと思います。

表彰式に参加して

延寿庵野霧（同人・鳥取）

三百余名が集う会場は熱気むんむんであつた。川柳の基本は「分かり易く、やさしい表現の中に深さも追求するものだ」

と先輩から教わつた。

各兼題の入選句は、まさしく私にとつてはお手本にすべき句ばかりだつた。

今回の「賞」は、私には、もう一度川柳の原点に立ち返つて作句して、研鑽を重ねなさいという啓示として拝受しました。これからも先輩諸氏のご指導ご鞭撻を切におねがいするものです。

言葉は真心

辻内 次根（同人・和歌山）

路郎師の微笑んでいる像が好きです。

会場の張りつめた雰囲気が好きです。

心に響いたのは、大阪の句会へ広島から夜行列車で通い、毎回没の人に路郎師の「もう来るな」との蘭幸主幹のお話。

今日のお話「じいちゃん ばあちゃん」

の言葉の文化おもしろく聞きました。日本語に訳せないのがカタカナ語と……

言葉は真心かも知れない。前の「もう来るな」も、愛情と信頼があつて通じ合える。

番傘田中新一主幹の軸吟とひとことに目頭が熱くなりました。

全没から学ぶもの

相元 世津（誌友・神戸）

川柳塔まつり ご盛会おめでとうございました。心地よい熱気の中で幸せな一日でした。スタッフの皆様の笑顔に受付でほっと一息、美しい会場での賑やかな交流も楽しませていただきました。ご住職のおはなしも、いいお声に眠る間はありませんでした。ただこれからという前に全没のお話、少し考えました。何度もの全没から学ぶもの、それは大会に参加してこそ得られる何かがあるのではと思ひながらの帰り道でした。——感謝——

まさかの入選

梅瀬みちを（誌友・鳥根）

私は今回のような大きな大会は初めてなので会場の立派なホテルや、参加者の数に圧倒されました。選者の方々も誌上でよくお見かけする高名な方々ばかりです。句が読みあげられるたびに、「なるほど、こんな表現が……」「こんな見方が……」と感心するばかりでした。

ところが最後の「魚」の兼題で私の句

が読まれたのです。まさかと思っていましたので、びっくりして、つい呼名ができませんでした。でもこんな大きな大会での入選は、私の大きな励みになりました。また参加しますので、次回も盛大に開催されることをお祈りします。ありがとうございました。

至福の一時

小野 雅美（誌友・大阪）

そは降る雨の中、午前十一時前に到着した会場は参加者の熱気で満ち溢れていました。受付もスムーズで受け取った句箋は250番、名札を付け身が引き締まる思いでした。

入選句の披露も耳を澄まして数多くの佳句を聞くことができました。脇取の栃尾奏子さんの呼名は大きく聞き取りやすかったです。

302名の出席者にも拘わらず、トラブルもなく盛会の内終了したのも、スタッフの皆様準備運営のお蔭だと感謝しています。

川柳塔まつりに参加して、至福のひとつきを過ごすことができました。

熱気ムンムンのまつり

上田ひとみ（同人・兵庫）

川柳塔まつりの名のとおり、明るく楽しい一日でした。参加の皆様の熱気に圧倒されながらも、耳から目からタップリ川柳に包まれて充実した時間でした。

お名前とお顔が初めて一致した方もあって親近感が倍増しました。声を掛けて下さった方々、ありがとうございました。スタッフの皆様大変お疲れ様でした。川柳っていいな楽しいなど、また思いを深くしました。また来年もお会い致しましょう。

懇親宴

二句会の熱気そのままに、三階葛城の間に場所を移し、懇親宴が開催された。司会は片山かずお、藤井宏造。新家完司理事長の「これからが本番」という開会宣

言に続き、番傘川柳本社田中新一氏の発声による乾杯で、宴がスタートした。

円卓で食事を楽しみながら、遠来の柳友とも親交を深める歓談の時間を過ごし、若手四人組によるセーラー服姿（ちなみに女性二、男性二人である）でのダンスを皮切りに、賑やかにカラオケタイムが始まった。川柳塔すみよし女子会、智史さんリードの「高原列車は行く」、鳥取島根合同による「貝殻節」、忘れてはならない「六甲風」など、自然に会場一体となって盛り上がり、また、千代さんの本格的なびやかな歌声に魅了される時間も味わうことができた。

楽しい時間が流れ、おなじみの「星影のワルツ」でのフィナーレを迎えることになった。小島蘭幸主幹、完司理事長の歌で全員が手をつないで一つの輪となり再会を誓い合う、最高の時間であった。

木津川計氏の発声で「万歳三唱」し、川上大輪副主幹の閉会宣言で、心を残しながらも散会となった。

（大久保真澄）

第23回 川柳塔まつり

川柳塔



会場風景



小島蘭幸主幹
の挨拶



新同人の方々（小島蘭幸主幹を囲んで）



川上大輪福主幹
の挨拶



受付ロビー



作句風景



川柳塔 WEB 句会サイト



麻生路郎師銅像



司会の水野黒兎氏

懇親宴



乾杯の音頭をとる
田中新一氏



全日本川柳協会事務局長
本田智彦氏の挨拶



木津川 計氏の挨拶



奏子・智史・文切・久美子



楽しく合唱される皆さん



万歳三唱



川柳大会参加者

総数323名
(順不同・敬称略)

〔青森〕 福土慕情 松山芳生

〔秋田〕 伊藤のぶよし

〔東京〕 川名洋子

〔神奈川〕 菊地良雄

〔福井〕 みつ木もも花

〔愛知〕 恵利菊江 富田末男 金子美千代

早川遡行 脇田雅美 関本かつ子

山本三樹夫

〔三重〕 吉崎柳歩 青砥たかこ

〔京都〕 櫻崎篤子 藤井文代 今井万紗子

前中一見 前中知栄 榎本宏子 三宅満子

山田葉子

〔大阪〕 穂山常男 油谷克己 赤松ますみ

阿部俊八 池田純子 池 森子 石田ひろ子

井澤壽峰 井丸昌紀 岩田明子 磯島福貴子

上嶋幸雀 上出 修 上山堅坊 指宿千枝子

榎本舞夢 海老池洋 江見見清 岩佐ダン吉

大浦初音 大堀正明 荻野浩子 内田志津子

奥村五月 大治重信 小野雅美 宇都満知子

籠島恵子 柿花和夫 加島由一 江島谷勝弘

片岡加代 賀部 博 川端一步 榎本日の出

川端六点 久世高鷲 黒岩靖博 大島美智代

乗原道夫 小林若芽 小林わこ 太田扶美代

坂 裕之 酒井紀華 坂上淳司 小川賀世子

坂本星雨 櫻田秀夫 澤井敏治 片山かずお

沢田和子 島尾政男 島田誠一 鴨谷瑠美子

初代正彦 杉本光代 杉本義昭 岸井ふさゑ

鈴木栄子 関よしみ 高杉 力 木藤こみつ

伊達郁夫 田中新一 田中朋子 古今堂焦子

田中廣子 谷久美子 谷口東風 齋藤さくら

谷口 義 丹後屋肇 次井義泰 阪井美世子

土田欣之 辻 肇 鶴田遠野 佐々木満作

寺井弘子 寺川弘一 遠山唯教 柴本ばっは

栃尾奏子 富田啓二 内藤憲彦 嶋澤喜八郎

内藤光枝 中井アキ 中井佳子 島田千鶴子

中井 萌 中川一男 中島一彌 神野千恵子

中蘭 清 長高俊雄 仲谷 真 鈴木いさお

中村 恵 中山春代 西澤司郎 高田美代子

西出楓楽 西美和子 西村哲夫 出口セツ子

能勢良子 原 洋志 樋口 眞 徳山みつこ

日野 愿 肥山一文 平賀国和 富山ルイ子

藤井則彦 藤田武人 藤塚克三 中川ひろ介

藤村亜成 藤原大子 穂口正子 西川ひろし

本田智彦 前田紀雄 前たもつ 原田すみ子

増田隆昭 升成 好 松浦英夫 平井美智子

松岡 篤 水野黒兎 都 武志 弘津秋の子

村上玄也 村上直樹 森井克子 藤井満州夫

森 廣子 矢倉五月 安田忠子 藤原千恵子

山根妙子 山野寿之 山本 進 松尾美智代

雪本珠子 横山里子 吉岡 修 松本あや子

米澤淑子 福田和子 美馬りゅうこ

宮崎シマ子 森中恵美子 森松まつお

山岡富美子 山口弘委智 山本加お里

山本希久子 吉村久仁雄

〔兵庫〕

青木公輔 市坪武臣 上垣キヨミ 山下純子 山田順啓 山本昌代 飛永ふりこ

上田和宏 梅澤盛夫 大坪一徳 上田ひとみ

米田恭昌 渡辺富子 西久保隆三

〔佐賀〕 真島 涼 真島 芽 真島久美子

尾崎一子 加川靖鬼 金川宣子 上野多恵子

長谷川崇明 山下怜依子 佐々木まき子

〔熊本〕 岩切康子 杉野羅天 鷺頭英司

北野哲男 小山紀乃 楢元世津 延寿庵野鶴

〔和歌山〕 石田隆彦 上田紀子 山東日出男

田中章子 谷口修平 多田雅尚 緒方美津子

宇野幹子 柏原夕胡 川上大輪 藤原ほのか

御芳志お礼(敬称略・順不同)

冨永恭子 中島憲三 長島敏子 奥澤洋次郎

木本朱夏 楠原富香 小谷小雪 古久保和子

田中新一・小島蘭幸・新家完司・森中恵美子

永田紀恵 野口晶子 長浜美籠 奥田みつ子

武本 碧 辻内次根 中西宏夫 松原寿子

川上大輪・西出楓葉・前たもつ・鴨谷瑠美子

能勢利子 萩原理月 藤井宏造 久保田千代

三宅保州 森口美羽

西村哲夫・柿花和夫・内藤憲彦・斉尾くにこ

藤岡りこ 藤田雪菜 細川花門 清水久美子

〔鳥取〕 倉益一瑤 後藤宏之 斉尾くにこ

福士慕情・村上玄也・松山芳生・大久保眞澄

堀 正和 松井文香 丸山孔一 城水めぐみ

新家完司 竹口清信 田中天翔 坂本とも湖

水野黒兎・島田誠一・長浜美籠・久保田千代

村田 博 森本高明 山内 迪 瀬島流れ星

平尾正人 前田楓花 牧野芳光 竹村紀の治

早川遯行・岩切康子・酒井真由・山本希久子

山口光久 山崎武彦 山田耕治 中岡千代美

両川無限 両川洋々

鶴田遠野・籠島恵子・坂 裕之・古今堂蕉子

七反田順子 前川千津子 みぎわはな

〔島根〕 石橋芳山 今岡健柳 梅瀬みちを

楢元世津・山口光久・榑本宏子・富山ルイ子

山口ヨシエ

藤井寿代 伊藤玲子

藤田武人・栃尾奏子・寺井弘子・居谷真理子

〔奈良〕 安土理恵 安福和夫 池田みほ子

〔岡山〕 大杉敏夫 丹下凱夫 工藤千代子

山崎武彦・松原寿子・小澤幸泉・片山かずお

阿部紀子 宇賀史郎 大内朝子 居谷真理子

永見心咲 藤井智史

木本朱夏・山岡富美子・江島谷勝弘・

大西将文 加門萌子 木嶋盛隆 大久保眞澄

〔広島〕 小島蘭幸

鈴木いさお・番傘川柳本社・わかくさ川柳会

五味尚子 笹倉良一 谷川 憲 澤山よう子

〔山口〕 坂本加代

京都塔の会・川柳塔わかやま・川柳塔みちのく

中堀 優 林ともこ 菱木 誠 水津加央里

〔愛媛〕 郷田みや 柳田かおる

きやらぼく川柳会・川柳塔沖繩準備室

古川洋子 松本柊子 毛利元子 高田まさじ

〔高知〕 小澤幸泉 橋田綾子 橋田秀峰

コーキ封筒(株)・美研アート

『川柳塔』の一行詩人・小島蘭幸論

—麻生路郎の人肌のポエジーを求めて—

文学博士・東京川柳会副主宰 平^{たいら}宗^{そう}星^{せい}

II 麻生路郎と小島蘭幸の

（人肌のポエジー）

麻生路郎が「一行詩人」の文を発表した年に小島蘭幸はわずか九歳。まだ川柳を始めていない。蘭幸が川柳を始めるのはその六年後の昭和三十八年、十五歳の時であった。同級生に竹原川柳会の山内静水会長の二男がおり、その会長邸で同級生たちと川柳を作り始め、竹原川柳会に入会。その後、竹原市で開催された第六回近県川柳大会で定金冬二選に入選。昭和四十二年に川柳塔社の同人となり、昭和四十三年一月には、広島三十六題川柳大会で初めて選者となる。蘭幸、十九歳。昭和五十二年、二十九歳で結婚。その記念に川柳句集『再会』を刊行。平成三年に竹原川柳会の会長となり、平成二十二年には、川柳塔社の六代目の主幹となる。

平成二十六年十月の川柳塔九十周年記念川柳大会では、記念品の一つとして川柳句集『再会Ⅱ』が刊行された。以下、この句集に収録された作品を取りあげ、「小島蘭幸論」を展開してみたい。

産声よどんどん潮が満ちてくる
ライオンの風格に似て子が這うよ
一年生の帽子よ小さい旅人よ

これらの作品には、子を想う父親の気持ちがよく表現されている。こうした子を詠む作品には、「よ」という呼びかけの語が用いられているが、そこには麻生路郎の次の作品の影響が強く感じられる。

俺に似よ
俺に似るなど
俺を思ひ

また蘭幸の川柳には、子の他に妻や父母を詠んだ次のような川柳もある。
みかんむくみかんの匂いする妻よ

父の貌して蠶螂が振り向いた
旅の母から少女のような電話来る

蘭幸の川柳の大きな特色は、麻生路郎が「人間陶冶の詩」である川柳に求めた（人肌のポエジー）ともいえる暖かい人肌の温もりのある詩情である。

この（人肌のポエジー）は、師を想う次の川柳によくあらわれている。

師の句碑は師のかたちして風といふ
「師の句碑」とは、岡山県の弓削駅前にある昭和二十五年九月十七日に建立された麻生路郎の次の川柳をさしている。

俺に似よ
おれに似るなど子をおもひ

この句碑が「師のかたちして風といふ」と蘭幸は表現しているが、他に麻生路郎の句碑を詠んだ次のような川柳がある。

句碑除幕旧居が光り出して来た
ふるさとの山に抱かれて句碑眠る
師の句碑のぬくさに触れて来た初春だ

また蘭幸には、麻生路郎と麻生茂乃夫妻の比翼句碑を詠んだ次のような作品もある。

比翼塚から海を見る橋を見る
お月様比翼の句碑の上に出た

尾道市には、平成十三年七月七日、志賀直哉旧居前文学公園に路郎の「おれに似よ 俺に似るなど 子をおもひ」と蔑乃の「飲んで欲し やめてもほしい酒を つぎ」の句碑が建立されている。

創刊号ひらくと波の音がする

檸檬忌と名付けて夢を語らんか
塔ひとつ瘦身の師の影に似る
檸檬七個塔の形にしてみせる

また「創刊号」の句は、大正十三年二月十五日に麻生路郎が創刊した「川柳雑誌」を指すのではなく、昭和四十年十月に「川柳塔」（通巻四六一号）と名を改めて発行された雑誌を指しているのではないだろうか。麻生路郎の死後、この誌名になって中島生々庵が二代目の主幹となり、西尾葉が三代目の主幹となり、平成六年には、橋高薫風が四代目の主幹となり、河内天笑が五代目の主幹となる。

この四代目の橋高薫風の代表作には、次のような抒情的な作品がある。

恋人の膝は檸檬のまるさかな

蘭幸は、この句から平成十七年四月二十四日に七十九歳で亡くなった薫風の命日を「檸檬忌」と名付け、墓前で師と

夢を語り合いたいと願っているのである。「塔ひとつ」の句の「瘦身の師の影」も薫風の姿を描いたものであろうか。「檸檬七個」の句にも薫風の姿が投影されているように思われる。

昭和トンネル抜けてぼくは生まれた

蘭幸は「昭和トンネル抜けて」の句で暗い戦争の時代が終わり、「ぼく」は生まれたと語る。昭和二十三年三月二十日、広島県竹原市に生まれた彼は戦後生まれの広島県出身の川柳作家なので、句集には広島を詠んだ次のような川柳もある。

噴水の虹ヒロシマに夏が来る

電車から見るヒロシマにある涙

「ヒロシマ」という土地の風土が川柳作家の蘭幸に大きな影響を与えている。

また蘭幸の次の川柳には、麻生路郎の川柳にみられる（人肌のポエジー）が認められる。

おとうともいもうともいるひとつの火

動物園のキリンの首に雪が降る

ひとりぼっちになってしまっただけ走る

鳥になれなかつた私がいる野原

先頭を歩いた鬼を忘れない

「先頭を歩いた鬼」の川柳は高杉鬼遊を

追悼した川柳だが、「川柳の鬼」と言えば、私は先ず定金冬二を思い出す。「定金冬二作品集無双」に収録されている次の川柳の「芒」には、その冬二自身の姿が投影されている。

にんげんのごとはで折れている芒

冬二は私の最も尊敬する川柳作家のひとりである。この作品は冬二の代表作。

蘭幸は十代で冬二選に入選し、よき師に恵まれたが、その中でも特に師と慕う薫風の影響は大きいと思われる。蘭幸が愛誦する薫風の川柳が次の作品である。

水平線 今にどんでん返しある

蘭幸にも「水平線」を題材にした次の作品がある。

水平線を見ている迷い消えている
薫風の句は川柳の地獄を描き、蘭幸の句は川柳の浄土を描いているが、両者の句は共に作者の心象風景を描いている。

私が橋高薫風に最後にお目にかかったのは平成十一年五月二十三日の剣花坊の愛娘・大石鶴子の葬儀の時であった。弔辞を述べる薫風の瘦身の後ろ姿は仏塔のように端正で崇高な姿であった。

（続く）

（敬称略）

愛染帖

新家 完司 選

(投句280名)

よく寝たな少し美人になつたかな
横浜市 川島 良子

(評) 美容の大敵は睡眠不足。ぐっすり眠つた朝の鏡には、20年も若返つたような艶やかで綺麗な肌。というほどでもないか？

格好は悪いがサドル下げて乗る
尼崎市 山田 耕治

(評) もう恰好に拘る歳ではない。先ずは安全第一。どっしり腰を据えてゆつくりペダルを漕げば、違つた景色が見えてくる。

私の器量は木の葉井あたり
大阪市 栃尾 奏子

(評) 鰻井ではない。カツ井でも親子井でも天井でもない。青ネギと薄切り蒲鉾を玉子で綴じただけの木の葉井とは、えらいご謙遜。

Jアラートより空襲警報が良い
八尾市 前田 紀雄

(評) 国民向けの注意喚起のになぜ英語なのか。かつての「空襲警報！」が分かりやすく危機感もあつて良いのではないか。

大阪府 米澤 淑子
フカヒレに負けてはならぬお味噌汁

(評) 味噌の旨さだけではなく、野菜や魚介類などの具材によって様々な栄養も摂れる和食の原点。フカヒレスーブ何するものぞ。

大阪府 江島谷勝弘
ジツと視る尻尾を振っている人

(評) しつかり観察すると見える「尻尾」。もちろん振っている相手は権力を握っている人や金持。みっともないことである。

兵庫県 脇田 雅美
扇風機思つようには首振らぬ

(評) 一応は首振り角度を調整できるようになっている。だが、自分が望む角度にはならない。頑固な役人のように融通が利かない。

懐に忍ばしているあかんべえ
松江市 石橋 芳山

(評) 懐の「あかんべえ」を表情に出さないのが良識あるオトナ。だが、相手に悟られぬように忍ばせるのはなかなか難しい。

イケメンと食事ビシクの汗を掻く
尼崎市 清水久美子

(評) 映画のワンシーンのような最高且つ緊張のひととき。「ビシクの汗」が出るうちが華。そのうちソワソワもドキドキもしなくなる。

幸せは疲れるものだ孫の守り
河内長野市 穂口 正子

(評) 走り回る幼児は少しも目を離せない危険物。「しあわせ」と感じるのは半日ほど。二日も預かつたら心身ともにグツタリ！

京都府 樹本 宏子
大文字も床も行かずに去つた夏

米子市 生田 和之
リウマチと老化の中で夏が行く

大阪府 平井美智子
幸せが来るぞと開ける秋の窓

貝塚市 石田ひろ子
ひんやりと蛇口の水に秋の色

高槻市 島田千鶴子
Tシャツが色褪せた頃秋が来た

大阪市 森 廣子
トーストの匂いも変わり小さい秋

堺市 内藤 憲彦
耳鳴りかと思つたら早や秋の虫

今治市 渡邊伊津志
住む家を自由に選ぶ秋の虫

堺市 加島 由一
春ほどは秋の七草騒がれず

松山市 柳田かおる
イノシシが一日早い収穫祭

神戸市 奥澤洋次郎
継ぐ者が途絶える暮前秋彼岸

和歌山市 坂部紀久子
主の田を守り通して彼岸花

和歌山市 土屋起世子
分譲地おまけ付きです彼岸花

三田市 上田ひとみ

メタボ気味いいえはつきりメタボです

鳥取市 福西 茶子

キッチンの一疊そこがメタボ源

福井市 伊藤 良一

写経する無の字だらけも無になれず

沖繩県 宮 すみれ

陽の明かり寝坊の海馬ロック解く

神戸市 山口 光久

青筋を立てた時には負けている

奈良市 大久保眞澄

神経痛にストーカーされている

松江市 中筋 弘充

お局も老いて故障者リスト入り

掃除機から一円玉を取り返す

妻は留守風呂場で寝ないようにする

京都市 三宅 満子

今一度燃りを強めて共白髪

三田市 福田 好文

グーグルで探してたたと急な客

法事みな土日で困るずる休み

櫻原市 居谷真理子

エアコンのオンには妻の許可がいる

独りでしょお買いなさいと言うウナギ

鳥取市 岸本 宏章

意地悪になれとチェスやら囲碁将棋

自動ではないと気付いて押す扉

金正恩の喜ぶ顔は見たくない

鳥取県 斉尾くにこ

九条の改憲レイテ島に問う

羽曳野市 吉村久仁雄

激辛を食べ朗朗と反戦歌

河内長野市 森田 旅人

言いたいことメモリーに入れ黙ってる

箕面市 中山 春代

ハロウィンの波にのれない昭和っ子

大阪市 高杉 力

ダンスでも家でもリード通じない

米子市 中原 章子

長生きへアルプミン値を減らさない

弘前市 高瀬 霜石

友だちはごめんこうむるハムレット

佐賀県 真島久美子

銀恋を知らぬ男の持つマイク

堺市 矢倉 五月

新品のクーラー静かで消し忘れ

包丁もわたしもなまくらな独居

米子市 竹村紀の治

ミサイルが怖い失敗なお怖い

藤井寺市 太田扶美代

ファイティングポーズで国は護れない

財産無しと言うておく書いておく

ヒヤヒヤとするたび一口歳をとる

好きな酒平気で駄目と言うお医者

輸入品蟻のおマケもついて来る

高槻市 富田 美義

今までは美德の筈の付度が

青森市 守田 啓子

こぼれ秋母の失くした音拾う

枚方市 寺川 弘一

極楽に警察官は居ぬだらう

三田市 野口 晶子

恋うらないまた振り出しに戻る夜

宝塚市 太田としお

価値観の同じお方と五十年

和歌山市 松原 寿子

楽しさ嬉しさ記憶の襲へたみ込む

明石市 糍谷 和郎

年寄りの定義いずれば百になる

西子市 黒田 茂代

うたた寝から覚めて耳鳴りまた戻る

宝塚市 岸田 万彩

群泳のイワシの好きな民主主義

河内長野市 原熊知津子

インスタグラム自分を好きな人ばかり

河内長野市 黒岩 靖博

カボス缶送れと孫のライン来る

鳥取市 倉益 一瑠

エプロンを外しときどき深呼吸

大阪市 樋口 眞

多芸だが平均点のものばかり

河内長野市 村上 直樹

変人から見れば世の中みんな変

夫の趣味川柳ですと妻自慢
大阪市 平賀 国和

たかが一句喜怒哀楽の玉手箱
河内長野市 大島ともこ

閃きは一瞬だからメモをとる
鳥取市 夏目 一粋

練りあげた一句がまたも没になり
三田市 足立つな子

没続いたため息ついて天仰ぐ
鳥取市 山下 凱柳

ダンスすると全没完治早くなる
神戸市 上田 和宏

川柳は最後のさいごまで止めぬ
芦屋市 黒田 能子

今朝もまたラジオ体操聞くベツト
三田市 堀 正和

捨て切れぬ女心と化粧品
河内長野市 谷 久美子

少しポケ少し悲しみ無くなった
和泉市 横山 捷也

血の色が青くなりそうゴーヤ好き
榎原市 安土 理恵

顎力人一倍と医者ほめる
河内長野市 中島 一彌

落石注意避け方までは書いてない
岡山市 藤成 操江

頑固爺 初孫生まれ只の爺
高槻市 松岡 篤

同じ場所おなじ時間に眠くなる
岡山市 永見 心咲

強いなあ憎いカーブに華がある
尼崎市 市坪 武臣

ロボットに勝っているのは食い気だけ
米子市 池田 美穂

戦中派ちびた鉛筆捨てられず
京都市 清水 英旺

桃ブームピンクの服を買いました
宝塚市 田中 章子

相続の後にしがらみ付いて来た
奈良県 谷川 憲

耳鳴りに調子合わせる蝉の声
藤井寺市 田付 絹枝

眉毛にも白髪いつしか二、三本
高槻市 初代 正彦

喪服着てオレオレ詐欺の話など
大阪府 高木 道子

漫画本むかし見るなど叱られた
鳥取県 竹信 照彦

上向いて生きているのに曲がる腰
芦屋市 竹山千賀子

肩こりをけろり忘れたフィットネス
池田市 上山 堅坊

金木犀の香りを辿り散歩する
豊橋市 小松くみ子

美人薄命妻は益益元氣です
堺市 坂上 淳司

サイダーにラムネがボンと意地を張る
那覇市 前川 真

A I ロボ貴方の職を狙ってる
大阪市 田浦 實

手のひらに欠伸の型が付いている
岡山市 田中 恵

遠い耳通せば輪から外される
倉吉市 大羽 雄大

急がないシルバースhirt空いている
東かがわ市 川崎ひかり

力まずに生きよう後期高齢者
奈良市 米田 恭昌

哲学も昼寝も入れてヨガ楽し
岡山県 山縣のぶ子

老人にお肉売り場は寒すぎる
神戸市 細川 花門

楽爪か手の爪ばかり切っている
山口市 青木 隆子

税務署に儲かりまっかと思われても
豊橋市 藤田 千休

逸品の豆腐であるが既製品
鳥取市 山野すみれ

カニかまの味をカニだと思ひ込む
笠岡市 藤井 智史

やんわりとホッペにチュウで機嫌とる
沖繩県 あらさくら

もったいない知恵絞りたい廃棄食
河内長野市 藤塚 克三

奈良県 長谷川崇明

月を愛で窓辺のワイン小宇宙

寝屋川市 森 茜

ワイン含めば一瞬おし黙る

大阪市 坂 裕之

休みの日昼からビールありとする

大阪市 小野 雅美

嗜む程度言いつつビール三杯目

三田市 北野 哲男

花に水僕には泡がありがたし

大阪市 藤田 武人

地酒には地元の味が似合います

羽曳野市 中川ひろ介

温暖化高いサンマで呷る酒

大阪市 若本 安代

固い殻割って私も縄のれん

弘前市 稲見 則彦

酷暑にも燗酒二合欠かさない

岡山市 丹下 凱夫

八月十五日肅々と飲んでいる

八幡市 今井万紗子

飲み仲間やさしいところ皆おなじ

宇部市 平田 実男

先生も酔うとやっぱり千鳥足

西予市 西田美恵子

懐は空ご機嫌な千鳥足

大阪市 榎本日の出

はしご酒家に帰ればホッとする

三田市 尾崎 一子

ごほうびは極上一献祭り笛

八王子市 川名 洋子

記憶ない酒が本音を漏らした夜

沖繩県 森山 文切

耳鳴りは安いお酒を飲んだせい

姫路市 古川 奮水

空き缶を拾い集めてまた飲むか

鳥取市 前田 楓花

この世での楽しい日々はアツちゅうま

塩竈市 木田比呂朗

空財布またポイントに煽てられ

大阪市 宇都満知子

お財布にレシートだけが溜まります

和歌山市 古久保和子

とことんに探す小銭の落ちた音

横浜市 菊地 政勝

仏壇に努力しますと言いつ聞かす

鳥取県 細田 裕花

わらべ唄100曲サラサラの心

高槻市 原 洋志

ソプラノでアルトの患者元氣付け

河内長野市 辻村 ヒロ

ときめきが乾かぬようにミルクテイー

羽曳野市 徳山みつこ

張り切って投げたウイंकみな逸れる

米子市 後藤 宏之

だんだんと義父に似てきた山の神

堺市 遠山 唯教

ことわりもなくミサイルが越えていく

川西市 山口 不動

北鮮に打ち上げ花火見せてやれ

田辺市 岡本 昇

お出かけならお気をつけてよオスブレイ

三田市 久保田千代

物騒な世へのほほんと葱坊主

四條畷市 吉岡 修

理論では崩壊してるはずの国

大阪市 内田志津子

勤勉に動き続ける自動ドア

鳥取市 上山 一平

漁火が地球に鼓動伝えている

出雲市 伊藤 玲子

日本海のピチピチ食べて呆けまいぞ

三原市 笹重 耕三

誘いには乗らぬIDなど持たぬ

下松市 有海 静枝

保証書は付いていないが元氣です

唐津市 山口 高明

禁煙のババがライター隠し持つ

豊中市 貝塚 正子

いたずらも許す気にさす小猫の目

香南市 桑名 孝雄

婚活へ爺の好みも言っておく

富田林市 片岡智恵子

悔しさは茶花の銘がすぐ出ない

共選欄

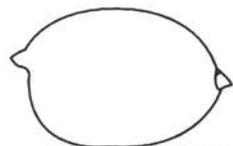
檸檬

椽

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 356名)



κ. κ

「応援」 山口 光久 選

子育ての応援財布軽くなる
好物とエールを詰めて子に送る
ぐずぐずの背を押す妻がいてくれる
足腰よガンバレ百はまだ遠い
ホームでの声援100倍のチカラ
沿道の声援受けて走りきる
負けて泣き応援席に頭下げ
しっかり握手した手を信じたい
駆けっこのびりが声援あびている
応援の波がうねって九コンマ
父兄リレー黄色い声に励まされ
エール交換どっちも勝利信じてる
ほめられて一歩踏み出す子供たち
応援しますトンネルを抜けるまで
応援の風景変えたカーブ女子

堺市 齋藤さくら
三田市 上垣キヨミ
札幌市 三浦 強一
西宮市 亀岡 哲子
横浜市 川島 良子
防府市 坂本 加代
羽曳野市 永田 章司
豊中市 池田 純子
香芝市 大内 朝子
八尾市 山根 妙子
大阪市 高杉 力
茨木市 藤井 正雄
羽曳野市 三好 専平
岡山県 小野美那子
豊中市 上出 修

「応援」 斉尾 くにこ 選

バタヤンの演歌は俺の応援歌
エール交換聞きたび日本好きになる
一強は困る頑張つてよ野党
阪神応援にジェット風船欠かせない
ソックスに目印付けて運動会
小道具はセンスにタオル袴ばき
応援の美人弁士に聞き惚れる
背中に置く手の温もりはただ無言
母が子に生涯振っている小旗
応援の甲斐があったね9秒9
応援席美人とらえるカメラアイ
手をかざす目で追う孫のひとり立ち
懸命に拍手したけどよその孫
大喚声湯船に届く逆転打
恋せよと春の夜風が背中押す

岡山市 丹下 凱夫
羽曳野市 吉村久仁雄
大山市 金子美千代
豊中市 木藤こみつ
寝屋川市 平松かすみ
奈良県 長谷川崇明
倉吉市 岡崎美知江
下松市 有海 静枝
尾道市 大本 和子
松江市 藤井 寿代
橋本市 石田 隆彦
大阪市 寺本 実
松江市 榎瀬みちを
広島市 田桑 恵子
大阪市 長高 俊雄

我が家への応援頼む嫁探し
 グリーン車は子のプレゼントフルムーン
 夕焼けの見事さ明日へ応援歌
 人知れず君を応援しています
 げんなまを持って応援駆けつける
 応援の囁れた声が治らない
 ヘソクリが孫の門出の足になる
 シンガリへやんやの拍手鳴り止まず
 笑い合うために応援惜しまない
 六甲おろし虚ろに響く負け試合
 駄目な人見ると応援したくなる
 タイガース応援グッズ欲しい
 白勝てと言って赤にも勝てと言う
 大応援選手に神が乗り移る
 ガンバレ一ひときわ高い母の声
 応援に九秒台で答え出す
 立ち上がる君に応援したくなる
 恋の道応援やはり母一人
 また来いよ拍手で送る甲子園
 雲間から届くエールは母だろか
 頑張れと親父一言言っただけ
 なよりの応援でした金一封
 黙々と汚泥掻き出す茶髪の子

米子市 池田 美穂
 田辺市 岡本 昇
 岸和田市 宮野みつ江
 桜井市 安土 理恵
 唐津市 坂本 峰朗
 豊橋市 西郷紀美代
 岡山県 大杉 敏夫
 伊丹市 延寿庵野鶴
 広島市 松尾 信彦
 大阪市 井丸 昌紀
 和歌山市 武本 碧
 大阪府 神野千恵子
 岡山市 永見 心咲
 枚方市 丹後屋 肇
 芦屋市 黒田 能子
 大阪市 若本 安代
 鳥取市 前田 楓花
 枚方市 小林 わこ
 箕面市 寺井 柳童
 八幡市 今井万紗子
 米子市 生田 和之
 四條畷市 吉岡 修
 札幌市 斉藤 宏子

「頑張るな」高齢者への応援歌
 消しゴムもペンも応援してくれ
 折々に私励ます本がある
 秋風が応援くれた一万歩
 老いの歩を励ますように曼珠沙華
 風船が打球飛ばすと信じてる
 太陽と月二人の笑顔いつまでも
 存続を応援するが乗らぬバス
 神さまの応援風向きが変わる
 凱旋門脳裏に浮かび食いしがる
 手を差し伸べる段差難儀の車椅子
 銀河からフレーフレーはきつと父母
 心のうちで声援して知らんぶり
 頑張れと親父一言言っただけ
 そのうちになんとかなると言うてやり
 テーブ切る耳に響いた母の声
 母ちゃんの応援いつも海苔の文字
 私の応援団は電子辞書
 膝の悲鳴へヒアルロンサン出番です
 応援団かかし並べて過疎の村
 若者が素早く被災地に向く
 被災地の特産品を買ってくる
 グリーン車は子のプレゼントフルムーン

河内長野市 中島 一彌
 紀の川市 宇野 幹子
 西子市 西田美恵子
 鳥取県 飯野 菖子
 高槻市 富田 美義
 宝塚市 岸田 万彩
 横浜市 川島 良子
 松江市 中筋 弘充
 豊中市 松尾美智代
 倉吉市 牧野 芳光
 篠山市 長澤 喜弘
 生駒市 飛永ふりこ
 鳥取市 池澤 大鯨
 米子市 生田 和之
 羽曳野市 三好 専平
 堺市 近藤 治子
 弘前市 稲見 則彦
 和歌山市 古久保和子
 堺市 矢倉 五月
 米子市 伊塚美枝子
 大阪市 近藤 正
 貝塚市 吉道あかね
 田辺市 岡本 昇

がんばれと夜空に光る亡夫が居る

加古川市

吉村めぐみ

応援の中にしつかり母の声

鳥取県

山下 節子

リハビリに家族の笑顔嬉しくて

八王子市

川名 洋子

高島田母の応援背に受けて

京都市

櫻崎 篤子

被災地へガンバレよりはガンパロー

鳥取県

児玉 規雄

応援に論吉を連れて来て呉れた

三田市

北野 哲男

ピリの子へ大応援の運動会

吹田市

須磨 活恵

補欠でも応援席に親の顔

犬山市

関本かつ子

受験場あの日親父も傍にいた

西宮市

秋元 てる

応援は出世払いの肝っ玉

鳥取市

加藤 茶人

あたたかく見守るだけのサポーター

東京都

川本真理子

ガンバレのばあちゃんの声聞こえたよ

宝塚市

田中 章子

受験子へ塩を利かせて握る飯

橿原市

居谷真理子

清の字が上にあるから光る貧

弘前市

高瀬 霜石

応援の脚が眩しいチアガール

枚方市

藤村 亜成

反対の父が応援してくれた

笠岡市

藤井 智史

ラッキーセブン応援席は黄に染まる

神戸市

玄番美恵子

尺取虫が歩く応援してやろう

藤井寺市

太田扶美代

病む妻の傍でしつかり手を握る

弘前市

福士 慕情

秀句

声援が悲鳴に変わる逆転打

南あわじ市

萩原 狸月

応援に祖父母四人と親二人

鳥取市

中村 金祥

声嘎れて身振り手ぶりの応援歌

姫路市

古川 奮水

白勝てと言つて赤にも勝てと言う

岡山市

永見 心咲

敵方へ応援したい人が居る

宇部市

平田 実男

応援に力を貰うアウェイ戦

奈良市

加門 萌子

拍手しか出来ない場所で揺れている

佐賀県

真島久美子

リハビリに孫の明るい声の杖

奈良市

米田 恭昌

爺ちゃんが僕の応援団の長

篠山市

酒井 健二

子に戻り応援団の中の父

三田市

尾崎 一子

反対の父が応援してくれた

笠岡市

藤井 智史

ユニホームの破れ何度も縫っている

寝屋川市

籠島 恵子

応援は勝つたと団長の涙

札幌市

三浦 強一

風を待つような応援旗になるな

高槻市

片山かずお

ハイタッチしてから入る手術室

沖縄県

森山 文切

初登山晴れが後押ししてくれる

大阪市

平井美智子

あの女を助けたいのに弱くない

西予市

黒田 茂代

ゴミ出しの応援くらいならできる

神戸市

近藤 勝正

手を振ってくれる気にしていく

松山市

栗田 忠士

なにも言わないという応援もある

松江市

石橋 芳山

人知れず君を応援しています

青森市

守田 啓子

虫を引く蟻を応援してた夏

桜井市

安土 理恵

どん底の友へ届ける薬を綱う

豊中市

水野 黒兎

清の字が上にあるから光る貧

弘前市

福士 慕情

清の字が上にあるから光る貧

弘前市

高瀬 霜石

秀句

句会 燦 燦

九月句会を読む 弘 津 秋の子

どっかんと和尚が座り七回忌

上田 和宏

席題の「どっかん」の言葉が胸に響く一句。和尚さんの後ろ姿の大きさ。七回忌の法要の人数の少なさも感じ取れる。

おいしいかどうか眼鏡をかけてみる

大久保眞澄

兼題「味」からの一句。味と眼鏡の取り合わせに一瞬戸惑う。そもそも眼鏡を掛けても味はわからぬのである。しかし判断できると思考したいのが人間。深層心理を突いている。

新郎の母と新婦がハイタッチ

山田 耕治

兼題は「リレー」。二人の声が聞こえてくる。「息子をよろしく」「何とか引つ張ってゆきます」ハイタッチにはびっくりであるが、こんな場面に遭遇されたのである。

別居してることは誰にも言っていない

村上 玄也

ひまわりがこっそり咲けるはずがない

荒川 鈍甲

堂々とデート出来ませうご内定

前 たもつ

こっそりのデート文春嗅ぎつける

油谷 克己

日本の現状を「こっそり」に託しての四句。

鶴彬味は不屈の二字だらう

岩佐タン吉

こっそりと防空壕を掘っている

新家 完司

ミサイルの時代に役立たぬことは百も承知で川柳人は庭に防空壕を掘っていると詠う。反戦川柳作家の鶴彬の句碑は大阪城公園に建っている。享年二十九歳。

淡淡と生きてる一階と二階

古今堂蕉子

レットイットビーふたりで歩けたらいいね

山田 葉子

金婚式を越した夫婦も周囲に多くなった。レットイットビー(ありのままに生きよ)はビートルズ最後のシングル曲。ポール・マッカートニーの母マリーからポールへの助言の言葉だったという。淡淡と生きよと聞こえてくる秋の夜である。

『全日本柳人写真名鑑』発刊について

日川協では全日本の柳人を網羅した『全日本柳人写真名鑑』を社団法人設立以来、5年ごとに発刊、好評を博してきました。前回から5年目にあたり、さらに体裁・内容を一段と充実した平成30年版を刊行したいと存じます。皆様方には一人残らず、この名鑑に名を連ねられますよう、お勧めいたします。

資格 参加者は柳人であればどなたでも結構です。
内容 各人ごとに、①氏名(雅号) ②生年月日

③職業 ④所属柳社 ⑤住所 ⑥電話・FAX

⑦メールアドレス ⑧顔写真(近影) ⑨自薦作品

三句(所定用紙があります)を掲載

書籍発送の為、住所は必ずご記入の上、個人情報

報に支障のある方は、その旨お書き添え下さい。

体裁 A5判・約200ページ・本文アート紙・美装本

刊行 平成30年3月(予定) (参加者に1冊送付)

参加費 4000円

締切 平成29年12月11日(月) 当日消印有効

申込先 〒53010041

大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905

一般社団法人 全日本川柳協会

TEL(06) 63521221 10

FAX(06) 63521243 3

郵便振替口座 009701913575

「文 化」

(投句 226名)

米田 恭 昌 選



まほろばを目指せ国民文化祭
日本の箸四季を彩るおもてなし
文化祭黒子で励む孫を知る
青春の一コマ見せる文化祭
カルチャーの違いで採める嫁姑
私の文化遺産は五七五
粉もんは大坂文化ですオホホ
付度は以心伝心和の文化
仰ぎ見るミサイル飛んでいる文化
よちよちが文化を提げて今日も来る
弥生文化残る遺跡へブルトーザー
文化の違い知ったことかと外来魚
異文化に触れると晴れてくる視界
異文化の価値持ち寄って隣組
木の文化愛し受け継ぐ宮大工
文化進んで取り戻せないものばかり
スマホから文化の欠片拾う今日
ばあさんもスマホ手にする文化人
目も耳も秋はちよっぴり文化人
ガラケーの文化のままで居る余生

尼崎市 清水久美子
三田市 尾崎 一子
加西市 金川 宣子
豊橋市 小松くみ子
堺市 村上 玄也
鳥取市 田中 天翔
大阪市 古今堂蕉子
高槻市 富田 美義
松江市 石橋 芳山
倉吉市 山中 康子
奈良県 渡辺 富子
男鹿市 伊藤のぶよし
和歌山市 武本 碧
シドニー 坂上のり子
神戸市 山口 光久
藤井寺市 太田扶美代
弘前市 稲見 則彦
神戸市 奥澤洋次郎
長岡京市 山田 葉子
枚方市 寺川 弘一

民族文化に誇ってもよい火吹き竹
文化の日汗にまみれて畑を打つ
窯元を訪ね文化を一つ買う
カタカナをいっぱい喋る文化人
チンと鳴るこれも文化の台所
ひょう柄も文化といえる街に住む
次世代へ祭りの文化盛り上げる
だんじりの地方文化に血が騒ぐ
落書きの無礼を嘆く文化財
不倫は文化なんてうそぶく人もいた
伝統を守る過疎地の秋まつり
文化遺産卑弥呼探しは終らない

佳 句

リベラルの文化を謳歌する余生
粕漬けは母から娘への食文化
高座には重要無形文化財
子規伍健文化の香る街に住む
ささやかな文化エアコン効いている

人

年の功知恵は無形の文化財

地

魯山人和食文化を引き立てる

天

夕焼けを文化遺産にしたい海

軸

松茸をひとときれ食べて文化の日

松山市 栗田 忠士
和泉市 横山 捷也
米子市 後藤 宏之
三田市 堀 正和
大阪市 森 廣子
松原市 森松まつお
香芝市 大内 朝子
河内長野市 木見谷孝代
富田林市 山野 寿之
大阪府 米澤 俣子
和歌山市 土屋起世子
札幌市 小沢 淳

和歌山市 福井 菜摘
三田市 九村 義徳
橿原市 居谷真理子
西予市 黒田 茂代
奈良市 大久保眞澄

鳥取市 夏目 一粹

堺市 澤井 敏治

弘前市 福士 慕情

「ナビ」

(投句 216名)

小 谷 小 雪 選



ボケットのナビといそいそ秋の旅
 はいはいとナビに返事をして曲がる
 B面の人生ナビは捨てました
 ああでもないこうでもない迷うナビ
 マラソンの通行止めを知らぬナビ
 カーナビに任せホイホイ知らぬ土地
 老いのナビ時化にもかなり慣れてきた
 ナビ進化ヒト科の頭脳退化する
 雨続きナビが頼りのかぐや姫
 助手席が頼りないから地図がいる
 カーナビに僕の隠れ家見つけれ
 朝一番今日は何の日ナビに聞く
 ここからのナビは料金追加です
 母のナビ私の中に甦る
 ナビ通りに行くより知った裏通り
 カーナビが謎のゲートに行きたがる
 ガイドブック眺めて旅にひたる夜
 わたしのナビ最近ちよっと空回り
 出不精もナビと一緒に見る夕陽
 自転車でもナビのいらぬ町にすむ

奈良市	山本	昌代
岡山市	永見	心咲
大阪市	高杉	力
鳥取市	夏目	一粋
池田市	太田	省三
池田市	上山	堅坊
唐津市	坂本	蜂朗
海南市	堂上	泰女
奈良県	長谷川	崇明
大阪府	米澤	俣子
札幌市	小沢	淳
大阪市	藤原千恵子	
明石市	梶谷	和郎
大阪市	小野	雅美
シドニー	坂上のり子	
沖縄県	森山	文切
弘前市	稲見	則彦
京都市	榊本	宏子
男鹿市	伊藤のぶよし	
堺市	遠山	唯教

カーナビの大阪弁へ返事する	松原市	森松まつお
故里の移り変わりをナビで知る	尼崎市	清水久美子
ナビの記憶色や匂いを足しておく	長岡京市	山田 葉子
鳥瞰図のナビ夕暮れが美しい	大阪市	森 廣子
おつかれとやさしいナビに癒される	鳥取市	田中 天翔
迷わずにナビ役果す白い杖	倉吉市	岡崎美知江
付度と毅然背中に見せておく	鳥取市	福西 茶子
先生のことはをナビとして生きる	豊中市	水野 黒兎
太陽のナビ一心にトマト熟れ	大阪府	高木 道子
山里に昔ながらの道標	大阪府	坂 裕之
ナビを見て道路マップと見比べる	枚方市	寺川 弘一
影だけが飽きずに僕のナビをする	那覇市	前川 真
佳 句		
ナビ通り進んで何が面白い	宝塚市	田中 章子
塾帰り北斗の星を知らぬまま	橿原市	居谷真理子
アメリカが北だと言えば北に行く	弘前市	高瀬 霜石
動物の勘を奪っていったナビ	紀の川市	辻内 次根
鼻先のナビが居酒屋へ導く	松江市	石橋 芳山
人		
雁の列ナビゲーターは誰だろう	鳥取市	岸本 宏章
地		
迷う日は賢治の詩を読んで寝る	河内長野市	森田 旅人
天		
核心に触れるとナビは知らんぷり	堺市	澤井 敏治
軸		
銀髪の触角光るナビになる		

初歩教室

題一 ほんやり

居谷 真理子

私が川柳を始めた頃は一題につき三句出しが主流でした。そこで、伝統的な流れに習って一句、新しい動きに学んで一句。もう一句はユーモアをまじえて、または時事的な視点でと自分に課しました。難しいことでしたが、入選にこだわらなければ川柳と楽しく遊べます。初心の時代は特に、課題を様々な角度から眺める努力を。そしていろんな表現を楽しんで下さい。アレ、私こんなふうにも感じるんだ、などと自分発見にもつながるかも……。(原は原句 参は参考句)

- 参ロボットが言うほんやりとしてなさい
原一人すきほんやりもすき我もすき (宮すみれ)
- 参好きなのは一人ほんやりしてる時
原昼寝時寝るでもなくて時間経ち 開子
- 参寝るでなく起きるでもなく昼下がりに
原ほんやりすると北のミサイル飛んで来る 律子
- 参ほんやりの空へミサイル飛んで来る
原ほんやりとほんやり二人ひるねかな (山久子)
- 「かな」の文語調も面白いですが
参ほんやりとほんやり二人して昼寝
原受け流す噂さほんやり気にもせず ミヨノ
- 参ほんやりの顔で噂を受け流す
原ほんやりに見えるが実は芯がある 美枝子
- 参ほんやりに見えるが太い芯である
原ほんやりと目高ながめて小半時 由紀子
- 参せわしげな目高ながめて小半時
原ほんやりと生きていたなら長生きね (高弥生)
- 参ほんやりとただ長生きをしています
原夫逝きほんやり出来ぬ独りです (東美智子)
- 参夫逝きましたばんやり出来ません
原ほんやりも妻の一喝即効薬 洋一
- 参ほんやりと妻の一喝よう効いた
原老眼でほんやり見える本の文字 こみつ
- 参老眼をほんやり逃げる本の文字
原老後のことほんやり浮かびゆううつに ひでお
- 参老後のこと憂鬱だけがほんやりと
原ほんやりと互いのアラは見えぬふり 美穂
- 参ほんやりと見えてるアラは見えぬふり
原ほんやりとテレビ気付けば蝉時雨 明子
- 参ほんやりとテレビ蝉時雨の中で
原今日は一人ほんやり隙間持て余す (見温子)
- 参今日は一人時間隙間持て余す
原ほんやりの視力低下にまた出費 紀美代
- 参こんな句にこそユーモアが欲しい
参ほんやりの視力で払うめがね代
原人生は笑ってごまかせほんやりと (畑節子)
- 参人生のこは笑ってうやむやに
原ほんやりしわたしの心風入れる (門幸子)
- 参ほんやりと心に風を入れて
原気紛れにほんやり辿る午後のバス 真
- 参ほんやりとするため乗った午後のバス
原ほんやりと過した日々を詫言っている (小雅美)
- 参ほんやりと過した日々に詫言っている
原ほんやりは右脳にとつて黄金時 孚彦
- 参群れにいて霞まぬように赤を着る
原ロボットへほんやりして言われそう (大安子)

す。ゴールデンタイムでは長いですし……。

参 ぼんやりと幸せタイムです右脳

原 ボンヤリと夢みる歳じやない大人 くみ子

参 ボンヤリと夢みる歳は過ぎました

原 ぼんやりと終のすみかを考える (田) 廣 子

参 ぼんやりと終のすみかのことなどを

原 ぼんやりと思ひ出すのは丸い過去 旅 人

参 ぼんやりと思えば過去はみな丸い

原 九条を知らずぼんやり生きている まさる

参 九条も読まずぼんやり生きている

原 漁火をぼんやり結ぶ拉致の海 一 平

参 漁火がぼんやり灯る拉致の海

原 諸行無常ぼんやりしてる暇はなし 崇 明

参 諸行無常ぼんやりの暇ないのだが

原 ぼんやりと夜風に吹かれ飲むビール のぞみ

参 ぼんやりと夜風にひとり飲むビール

原 ぼんやりと見せても頭必死です 雄 大

参 ぼんやりと見せて必死の脳回路

原 ぼんやりと行く先見える退職後 (南) 宏 子

参 ぼんやりと先が見えてる退職後

原 佇んでただぼんやりとみる夕日 昭 枝

参 ぼんやりと先が見えてる退職後

原 佇んでただぼんやりとみる夕日

参 無為の日にただぼんやりと見る夕日

原 青信号クラクションに教えられ 寧

中六でリズムが悪くなりました

参 青信号教えてくれたクラクション

原 もうろうの頭オベが終わったんだ 洋 子

原 ぼんやりは家の芸ですかんにんな 不二夫

参 両句とも独特の表現です。凡句になったか

もしれませんが

参 もうろうとオベ終了を知る頭

原 ぼんやりはお家芸ですかんにんな

参 ぼんやりとしている間に急げ草筆り 澄 子

原 ぼんやりとしていちや詠めぬ時事の詩 (生) 和 之

参 ぼんやりとしていちや詠めぬピリリの句

原 かすむ文字年のせいさと受診拒否 つばき

参 かすむ文字年のせいさと医者嫌い

原 ピンほけの写真だけと思ひ出が 治 子

参 思い出はくつきりピンほけの写真

原 ぼんやりとすぎゆく秋を感じてる (貝) 正 子

参 ぼんやりの横を今年の秋がゆく

原 ぼんやりとして邪魔だと注意され 風 露

参 ぼんやりとして邪魔者になつていた

原 毎日が休みぼんやり何をしよう 紀美恵

参 毎日が日曜ぼんやりが仕事

原 休肝日ぼんやりすこし茶が旨い 三樹夫

参 休肝日ぼんやりの胃に茶が旨い

原 ぼんやりと月をながめて研いでいる 恵 子

全体を貫くものを読みとれませんでした

不思議な雰囲気があります。満月か半月か新

月か、研いでいるのは何か、はつきりさせな

い方が良いと判断しました。

参 ぼんやりの月の光の中で研ぐ

〔佳句〕

ぼんやりと過ごせる今日は良き日かな 隆 子

パートナー逝つてぼんやり日向ぼこ 整

おほろげな記憶で辿る郷の道 勝 正

ぼんやりとしたら呆けると神の声 こずえ

論吉様入れ忘れてたレジの前 厚 子

ぼんやりと生きてしまつて後がない のり子

ぼんやりと見た戦争すぐそこに 里 子

ぼんやりと空を見ていた退職日 孔 一

〔今月の推せん句〕

ぼんやりとしている蟻を見掛けない

高木 道子

朧月夜キザなセリフの一つでも 中島 一彌

シロク口をつけぬ裁きも知恵のうち

長高 俊雄



(投句209名)

カレンダーの枚数も残り少なくなってきましたね。

秋という素晴らしい季節も、昨今では異常に短くなってしまったように思えます。

しかし、彼岸花は真っ赤に燃え、金木犀は芳醇な香りを届けてくれている。短からこそ全身で秋を感じたいものです。では、ご一緒に。

笠岡市 藤井 智史

ポーカルは俺だ誰にも譲らない

(評)花形です、ポーカルは。その座は誰にも譲らないという決意、そしてそれを維持するためには努力あるのみ。

和歌山市 上屋起世子

落ちてから無欲になって澄んでいく

(評)落ちてから、の意味を思う。失敗

を経験することで、ありのままの自分と向き合えるのかも知れません。

大阪市 宇都 満知子

議員さん秘書三人を従えて

(評)あの議員さんもこの議員さんも、沢山の話題を提供してくれました。それにしては秘書つて大変そう。

鳥取市 夏目 一粋

束縛がないとなんだかつまらない

(評)人間って不思議、縛られると解きたくなるのに、自由過ぎると今度は物足りなく思うなんて。

吹田市 山本希久子

表彰へ以下同文を聞いている

(評)以下同文というコトバ、何だか個人の人柄がないがしろにされたようであり、ちよつとイヤ。表彰は嬉しいけれど。

和歌山市 古久保和子

ほんのりと酔うて三日月従えて

(評)何だかすくく色つぽいゾ。三日月を従えるなんて発想がすごい。こんな風にお酒に酔えるのは素敵ですね。

大洲市 中居 善信

もう誰も見向きをしない杉木立

(評)人の噂も何とやら、喝采も誹謗中傷もワアッと集中し、あとはケロリと忘れ果てる、世間とはそんなものかも。

豊中市 水野 黒兎

平和とは妻が右だと言えど右

(評)これぞ平和を保つ王道ではあります

せんか。ゆめゆめ、僕は左になどと言つてはなりません。

上尾市 中村 伸子

今あなた目をそらしたの見ましたよ

(評)都合の悪いことでもあるのですが、今、目をそらしましたよね。相手の出方次第でついつい口調も変わります。

箕面市 大浦 初音

校長の訓話はいつも長いのだ

(評)校長だけに限らず、訓話などをのたまう人のそれは長い長い。自分に酔っているのではと勘繰りたくもなるのです。

和歌山市 上田 紀子

どんぐりと一緒に転ぶ山遊び

ご用心花に風ということも
総裁選こんども私出るつもり
ひこばえが伸びる期待と不安抱き

後藤 宏之

合唱の半音ズレが直らない

皆おなじ顔をしているイエスマン
特許権得て発売の芳香剤

栃尾 奏子

風よけになるリーダーがいてくれる

普段着で集まるはずじゃなかったの

金子美千代

裕之

大阪市 坂

箕面市 出口セツ子
羽根つけて偽善アピールしています

藤井寺市 太田扶美代
再会を期して別れてきたトコロ

和歌山市 武本 碧
桐一葉落ちてめげぬ肋骨

米子市 八木 千代
アルバムになお枯れやらぬシヤンゼリゼ

豊中市 木藤こみつ
私にも羽をください青い空

唐津市 仁部 四郎
税務署へ右へならえで行きましょう

堺市 坂上 淳司
生真面目なバックインガムの近衛兵

弘前市 高瀬 霜石
耳を澄ませばなにかが朽ちる音がする

奈良市 山本 昌代
町角でそつと色づくエピソード

佐賀県 真島久美子
イカロスも保険をかけていたらしい

大阪市 奥村 五月
横綱も独り残して皆休み

松江市 石橋 芳山
睡蓮に浮かぶモデルを募集中

高槻市 松岡 篤
院長の影を踏まずに研修医

米子市 池田 美穂
さあ諸君赤か緑か選ぶのだ

藤井寺市 若松 雅枝
そんな事あったかしらと考える

神戸市 富永 恭子
婆ちゃんに教えてもらう郷土食

大阪市 小野 雅美
大丈夫誰にも誇り消させない

松江市 相見 柳歩
不要かもコーラス隊のネクタイも

大阪市 石橋 直子
ざっくりと生きる心を遊ばせて

枚方市 海老池 洋
タンポポの種の見事な親離れ

寝屋川市 平松かすみ
一周忌済んだら羽根がほしくなり

三田市 堀 正和
核の傘しつかりしると祈るのみ

倉吉市 山中 康子
歳だから仕方が無いと言われても

大阪市 田中ゆみ子
あなたにはついて行けない預金帳

松山市 宮尾みのり
虎視眈眈今はハモつていて行けない

紀の川市 楠原 富香
児の安全見守る町のポラントエア

松戸市 山下 明子
ザワツザワツ竹林の影月冴えて

唐津市 坂本 蜂朗
のんびりと羽を伸ばして筆られる

鳥取市 倉益 一瑤
はぐれないように呼び合う渡り鳥

三田市 谷口 修平
音だけが闇夜に響く遠花火

河内長野市 木見谷孝代
いざの時僕らはみんな母へつく

貝塚市 石田ひろ子
一時をコントラバスのソロに酔う

八尾市 山根 妙子
大国に靡くふりして探り合い

高槻市 片山かずお
枯れ葉舞い秋の深さを知らされる

堺市 内藤 憲彦
ワクワクにまた会いたくて旅に出る

西宮市 福島 弘子
軽すぎる口にあされる影法師

大阪市 平井美智子
ライバルがスポットライト浴びている

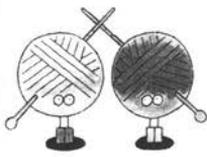
岡山市 永見 心咲
ひとりでも腕立て伏せはできるのに

弘前市 高森 一吞
切れ味の悪い包丁だな僕も

大阪市 若本 安代
九秒台やつと掴んだいい顔だ

池田市 太田 省三
子へ孫へ漬物石は家の味

1月号発表 (11月15日締切)



(平本 勝彦 画) 柳箋に2句

川柳塔鑑賞

同人吟 山岡 富美子

—10月号から

A-1の育ち人の手におえず

竹治 ちかし

「2045年問題」というのがある。「A-Iがその年に人間の知能を超えると予測される」という衝撃的なフレーズ。果たしてヒト科に未来はあるのか。人間の創ったものが人間の存在を根底から揺さぶる時代。

漢検のまずは五級へ挑む朝

森松 まつお

五級とはどの程度か。挑む姿勢に拍手を送りたい。定年退職後、時間潰しに宅建の試験を受けた時のひたむきな自分を思う。使うことなく終わってしまった資格ではあるが。

たいていのことは大目に見ればいい

高瀬 霜石

立ち位置は余生、大目に見ておおらかに暮らしたい。あがいたところで、物事はなるようにしかならない。

私の半分はとけている夏

谷口 義

今年の夏は半端ではなかった。酷暑に喘いだあの長い日々も秋風の到来でようやく終焉を迎える。

沸点の低い私はすぐ噴火

古今堂 蕉子

句会部長としての重責は「すぐ噴火」出来る爆発力に負うところが大ではと。フットワークも軽い。そしてタフである。フリーな立場で今後も川柳塔を背負う人材の一人。

木を植えた人によさしい風が吹く

竹村 紀の治

公園か街路樹か、或いは山の植林であろうか。その労苦を癒す微風が嬉しい。

ふるさとの風よ翼がほしいなあ

松本文子

いま何が欲しいかと問われると膝の痛みと余分な体重を持って余す私も即座に翼

と答えた。しかし文字さんはきつと輝いた青春のあの日へ飛んで行きたいのであろう。

駅弁を買いに大阪駅へゆく

榎本 日の出

駅弁はいまや単なる旅のお供ではなく、グルメ族の照準的とか。それを商売が見逃すはずもなく、デパートの特設会場が全国の駅弁で埋まる。

ゴキブリが私の出方じつと見る

川崎 ひかり

人類より長い歴史を誇るゴキブリの頭が悪いはずはない。しかし「ひかりさん」と張り合うなんて、新種なのであろうか。

バトン渡す相手が見えぬ頑張るか

岩切 康子

地震に豪雨と、繰り返す被害に現地の方々のご苦労を思う。高齢に鞭打つ体力も恐らく限界であろう。しかし簡単にバトンを渡す相手が見つかるわけもなく、行政の支援を待っているもどかしさ。

次に会うまでに体調戻さねば

坂 裕之

私の歳になると暫くぶりに合う友の老け方に愕然とする。お互い様なのである

が、具合が悪かったりするとそれに拍車がかかる。「体調戻さねば」と気遣う作者の心情が切ない。

孫2歳でニスカ将棋選ばせる

内 藤 憲 彦

年収37億、世界の「ニシコリ」の向こうを張るか、はたまた超天才の藤井四段を追うか、甘いおじいちゃまは、財布も頬も緩める。

トップ記事バンダお産という日本

初 代 正 彦

平和の象徴のような記事で、問題山積、血塗られた紙面ばかりにちよつと一呼吸をいれたい。

カタカナ語を省いた粋なご挨拶

藤 井 則 彦

公共の印刷物も含め最近カタカナ語のない文章のほうが少数派。行き届いた交友関係が見える。

ヒアリにも共謀罪を適用し

三 好 専 平

この歳になっても、新しい語彙に悩む。「ヒアリ」という個体も多くの人々同様、初耳。南米産大蟻の水際作戦に当局は必死。なんとか駆除を成功させてほしい。

肉食に変えても進む物忘れ

米 澤 俣 子

高齢になると自分さえ忘れそう怖い。進行を遅らせるしか策はないというのが、又もどかしいが、取り敢えず元気で長寿であると前向きに。

収穫の秋へ案山子の一帳羅

武 本 碧

田園風景から案山子が消えて久しい。かつてシドニーの誌友、坂上のり子さんのお宅に、等身大の案山子が立っていた。身の回りの都市化が進む中、広いお庭のその手作りを偲ぶ。

ウナギなぞ食わなくなつて夏元氣

成 田 雨 奇

土用だからと、商魂に乗せられて、高いウナギを買う必要もない。ただこんな機会でもない中々口に入らない。お元氣な雨奇さんは羨ましいけれど、いやしい私はスーパの特売に走る。

湯加減を聞いた昭和の火吹き竹

池 田 たか子

風呂を沸かすということが、当時は大仕事であった。釣瓶で汲み上げた水を、何回も風呂場へ運び、煙に咽ながら薪を

燃やし続ける。ワントッチで適温を保つ今とは違い、暑い夏も凍てる冬も、引っこりなしに薪を燃べ続けた祖母の丸い背を思う。

昼メロのクライマックス猫欠伸

紫 しめの

最近ほどのチャンネルからも懐メロが流れる。例えスマホに手こずることはあっても、懐メロはすんなりころに沁みる。かたわらの猫は知る由もないが、おばさま族にも花の時はあったのだ。

年毎にヒロシマ曇き影法師

岩 本 笑 子

人類の禍根を背負う影法師は消えない。生者も死者もあの日を拭い去ることは出来ない。少女が疎開地で見た、キノコ雲のおぞましい記憶も消えることがない。ただ紙の鶴を折りつづける。

ライバルといつか言わせてもらいたい

金 子 美千代

天災にめげず、老いにも負けず、病にも折り合いをつけ、ただ頑張り続ける多くの柳友へこれはきっと優しい美千代さんの応援歌であろう。台風一過、秋晴れが続く日も近い。

水煙抄鑑賞

— 10月号から

小 沢 淳

伸びきったゴムにも残る使命感

小林 若 芽

例え賞味期限が来ても、宿命・使命は
纏い付き離れないものなのか。

穴いくつ繕ってきた縁の下

北 原 昭 枝

世間体を繕い乍らの縁の下にも、達成
感のあるいい句ですね。

頼りがいある人の背に付箋貼る

前 川 真

世の中は信頼で動きます。更に価値あ
る人には目立つように付箋もよろしいか。

頭に巻くと俄然タオルもやる気出す

西 田 美恵子

鉢巻は元氣印、お祭りもスポーツも。

二つ目の尻尾が妥協許さない

東 槇 ますみ

ほら、尻尾が二つありましたか。

広島がヒロシマになる8・6

灼熱の天と地と人原爆忌

原爆忌あの日も空は青かった

田 桑 恵 子

実感句でしょうか。原爆許すまじも、
近くで実験を急ぐ国あり、止めるのに手
を焼いています。平和は素手で掴めぬか。

全日本川柳広島大会の第一位の句に

六十年まだ広島はヒロシマで、大輪があ
ります。

知らん顔してるが耳が動いている

坂 上 のり子

人間のしがなご、他人の秘密を知りた
がるもの。壁に耳あり。

夏さかり生命を燃やす北の花

斉 藤 宏 子

短い・はかないものは美しい。

肩書きの消えた名刺が知る世間

藤 田 千 休

飲み屋のツケも効かなくなるか。

右派だろが左派であろうが大シヨッキ

返信の速度で分かるラブラブ度

高 杉 力

主義主張よりもまず乾杯、返信が待ち遠
しくなると恋もピークに。

居酒屋の女性一人に和む席

上 山 堅 坊

野郎同士の酒席より、女性ならおっぱ
ちゃんでも入ると、空気が変わるか。

ひとときの平和楽しむ遠花火

横 山 里 子

日本は花火で楽しみ、お隣りはミサイ
ルを揚げて満面の笑み。恐い恐い。

西海岸ジユジュツと夕日落ちてゆく

高 森 一 吞

音の出る句は素通りできない。西海岸
は余分と思うが、スケールの大きい句を。

夫婦だね主語がなくても通じ合う

あ ら さくら

空気のような夫婦に乾杯。

新築の家に再び古時計

太 田 省 三

わが家の事は古時計が知っている、時
計も喜んでいますよ。

容赦なく実家断捨離する娘

池 田 美 穂

断捨離は夫婦では無理と言うことか。

大胆な夢を載せてる風の海

富 永 恵 子

スケールの大きい句。これもよし。

冬夜の物語

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願
いたします。
編集部

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

夜ぐらい楷書人間やめなはれ
長い夜をひとりて渡る長い橋
舟唄が胸に沁みいるぬるい爛
長い夜あけて雷もふくらんで
トラ負けりやよけいこたえる熱帯夜
夜のお仕事で親には内緒です
深夜便聞いております寝ています
暑い夜怖いお化けが出るらしい
闇夜にもきつと日の射す朝がくる
静かな僕ネオンつき出す血が騒ぐ
聞いてから余白をうめるむずかしさ
生きたいと叫び声する余白から
恋をした泣いた笑った以下余白
家計簿の余白にわたしの溜め息
お祈りを結婚式でさせられる
歳下になった父さんの忌よ
祈るって形ではない心です

一歩 昌紀
ゆみ子 ばつは
克己 芳香
志津子 朝子
昭 舞夢
廣子
ふりこ
萌
満知子
宏造
千代美
五月

原爆も原発もないよう願う
お祈りが通じませんの宝くじ
賽銭を祈り多過ぎ小分けする
恩返し出来ないままのお別れだ
賽銭は入れたよろしゅう頼みます
しみじみと眺め断捨離手が止まる
寅さんの映画の良さが分かり出す
来し方をしみじみ回顧秋夜長
寄る齡にしんみり憂う夜半の月
大火花終わって耳に虫の声
しみじみと想いがつのる友が近く
しみじみと因果の律を噛みしめる
母の齡越してしみじみ母おもう
しみじみと幸せ思う帯畳む
なだめても抗った日は消えぬまま
内職もおしめ洗いましたこの手

美世子
勝弘
重信
日の出
まつお
公平
雅美
福貴子
満作
直子
舞蹴
俊雄
シマ子
美籠
大子
里子

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

草苺はおばり帰る炎天下
どんよりと降るか降らぬか傘もとか
この夏を乗り切る妻の茶碗蒸し
想い出は土手で遊んだ草野球
気のとがり宥めてやさし港風
金魚ぶかぶか曇天なんて気にしない
赤飯を蒸し上げ祝う母ころ
雑草の一本ずつが抱く宇宙
嫁ぎ先いつか港になりました
まん中に置かれた冬の草の自負

則彦
小とみ
ひとし
重虎
風来坊
のぶよし
花匠
吹喜
黙人

豚草に責任はない花粉症
母という港をめざす父の舟
ヒアリヒアリ日本の港が怯える
草笛の澄んだ音色が好きだった
どんよりと晴れる日も無い老介護
ごちそうは蒸したギョウザでいい夕餉
赤飯を炊いて初盆暮参り
蒸したオルじんと染みる病み上がり
流れ流れて北の港が終の町
蒸気機関車子供頃の懐かしい
出船入船見届けている常夜灯
お赤飯湯気の向うで亡母笑う
泣いた日も母の港に子は安堵
港には男を上げる風が吹く
雪深いりんごの枝はいかり肩
断捨離のリストに先づはハイヒール
海鳴りを優しく聴いているサザエ
生き抜いて温い菩薩の娘の介護
カタカナは登場しない朝ごはん
外孫の電話に領く年金日
夜が舞う一人芝居か花吹雪
酒チビリ没句の無念きいてやる
咲く花に季節感じて癒されて

規子
龍馬
洋子
初枝
慕情
柳子
一吞
京子
きよし
吞舟
芳生
真由美
井蛙
英子
隆樹
ふさゑ
花峯
氏加子
一花
霜石
つとむ
和香子
美鈴
久美子

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

核の傘いらぬいらぬと空元氣
一トンの土が無くなる甲子園

蜂朗
高明

短冊に俳句短歌も書きつらね
知つても時にはとほげ必要だ
あいまいに笑い誤解を逆恨み

和歌山三幸川柳会

楠見 章子報

埋めたてて埋めたてて海遠くなり
猛暑日の太陽ジュツと海に入る
忘れてはいません津波でんでんこ
火の海を泳いだ八月のあの日
目隠しの中は閉じない西瓜割り
パソコンのキーを叩けば広い海
海水着持つて来たのに荷物番
未知の海大王烏賊が顔を出す
荒れ狂う海に花束浮いている
裏切りもするが凧いでる海が好き
決心をして海峡の風に乗る
ふるりに帰ると井戸の水を飲む
六Bの芯が心に水を足す
生き延びるための水なら飲んでみる
ミススマシみごと沈まぬ処世術
朝一に水飲む母を見て育つ
一村の歴史沈めているダム湖
日本の歴史は神話から続く
古傷も私の歴史現在地
ふれあいの茶碗にゆるぎない歴史
母の皺ひとつひとつにある歴史
勞り合う背なに夫婦の歴史みえ

實 節子 四郎 眞 敏 照 理 恵 ひろ子 一雄 寛 明子 昇 千鶴 准一 当代 俣子 起世子

華やかな歴史の裏に民の汗
心配ごと少しかかえて半夏生
まだ余熱あつて泣いたり笑つたり
焼き鳥も降つてきそうなこの日照り
サルビアに海暑そそれかき水
ピッコロが陽気に踊る輪の中で
色即是空坊さんが吹く祭り笛
口笛の上手な君に惚れました
笛鳴つて京都祇園の夏となる
思い出を辿るオカリナ吹いている
草笛を吹けば少年鳥になる
大物の笛ひと吹きて風変わる
ちびつ子が大きく見える鼓笛隊

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

海底の砂を戻せと浜が泣く
釜の底母の握つた焦げむすび
胃袋の底は見えない伸び盛り
古い坂昭和生き抜き底力
過信してならぬ雨水の底力
孟蘭盆会夫の笑顔胸底に
川底に我が物顔の外來種
祭りの灯ダムの底から声がする
汗の坂風の力を少し借る
力尽き禪の姿で眠る蟬
次の世は違う人生歩みたい
大人ならあんたきらいと言えないよ

森山盛桜選
童謡の雨と遊んでみましようか (備則彦)
二つある穴聞き分ける嗅ぎ分ける
又マホ自在に操つて九九いえぬ
過ぎた日を揺すれば悔いが落ちてくる
三つ編みのマドンナは今ヘアピース
朝ドラの昭和がほくに丁度よい
生きるため脈うつ静と動の川
肉食の妻にお茶漬では勝てん
日捲りを継ぎ足しながら生きている
ガラケーでハアハア波に乗れませぬ
佳句地十選 (10月号から)

安土理恵選

朝焼けの海と語れば無の心
夢だけが渡れるのです虹の橋
紅一点そんな会合すきやねん
穴の中出てこい話聞いてやる
げんこつと僕の間にも母がいた
大輪を咲かすつもり土を握る
風起こす気持ち少しは残つてる
平和とはこの川の音樹々の色
良かったね塾も部活もない休み
一日に一度は捲る医学辞書

紀美恵 直子 (矢)五月
無限 ダン吉
光久
誠修
鬼一
規雄

ゆつくりと聞いて最後に言う本音
トロトロと本音を焙り出すお酒
隠す本音と隠したくない本音
老人も美人の横がいい本音
どこ迄が本音が孫の一人言

塞いでも閉じても漏れてくる本音
今のこと今忘れても強気なり
カブ職見ながら西瓜平和だな
今日の無事西空に向け手を合わす
鶴を折り私の前にそっと置く

夫に逢う往復切符買いにゆく
カブ職亡夫は特別自由席
大往生わかっているが淋しいよ

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

子等はしやぎ蟬はひっそり地蔵盆
絆断つ決意が滲む太い文字
善玉のウイルスならば手でうける
金という魔物が人を狂わせる
赤札をはがしてみたら値は同じ
屋久杉の千古を耐えた太い幹
電柱の貼り紙消えて去る昭和
顔形どうあれ人は心立て
童顔のわたし五歳も鯖を読む
動かない自我を持つる太い眉
障子貼る亡母の背に見た人生譜
メダカにも琵琶湖制覇の街にかい夢
ウイルスが白いマスクの街にする

栄香 敬子

白狐 寛

昭紀 貞子

半徳 歩美

初音 厚子

史子 初音

和夫 杵香

寛昭 和夫

満作 寛昭

義昭 直樹

核兵器禁止の署名太い字で
極太の絆で辛を編んでいる
人間は顔じゃないんだ心だよ
四股を踏み夢の一つを太らせる
指コンパスぐらゐの欲で生きてます

アルバムに貼れない人と逢っている
元気かと親を気にする子も老いて
秋の顔朝の冷気がつれて来る
長命の家計で笑顔絶やさぬ

やっかいなウイルス連れて渡り鳥
人生の岐路には思い出貼つてある
笑顔にはえがお心が響き合う
相合い傘今は出来ないゲリラ雨

さわやかな食事に笑顔浮かぶ歳
一目見て心の内を見抜く母
一帳羅首に膏薬貼つている
終章へ太文字で書くありがとう

ウイルスと指を差されたこともある
折り鶴が核持つ国へ使者に立つ

川柳塔なら
大久保眞澄報

マツケもウナギも飽きた茶漬だな
きつと来るヒトが戦に飽きる日が
飽きる程飲んで酔える日酔えない日
飽満の付けが天から降ってくる

飲む打つ買うに飽きた男がする写経
人間に飽きて路傍の石と化する
過去迎る時間の中で飽きがくる

一步 郁夫

高志 満洲夫

洋志 節子

集一 弘委智

榮子 縣子

朝子 賢子

星雨 堅坊

勝弘 千恵子

盛隆 将文

完次

もう五度目飽きずに入る美人の湯
腕相撲あつさり勝てぬ子の育ち
人生の勝負清算ゼロがいい
勝っている私の方が美人だわ
世代交代若さが勝る駒の音

百歳は人生の勝ち組だらう
やつと来た病気打ち勝ち希望満つ
勝つという信念持つて立ち向かう
母の愛勝るものない老いてなお

妻とするケンカは負けておくが勝ち
他人より我に勝つのが至難です
やれやれと神輿けしかけ散る群衆
六畳に脚投げ出して喪服脱ぐ

人の世話終えてやれやれ俺の世話
母まねて幼児がせがむ付け駄毛
沈黙を守り嵐をやりすごす
沈黙が語るドラマの見どころ

沈黙が金なら私はいらぬ
沈黙が金なら私はいらぬ
沈黙が金なら私はいらぬ
沈黙が金なら私はいらぬ

崇明 恭昌

文聡 文聡

すみれ 恵美子

辰雄 賛郎

孝子 孝子

美代子 美代子

優 優

ふりこ 比呂志

比呂志 比呂志

昌子 昌子

ね転んでじつとがまんの腹の虫
引き金を何時引こうかと亀の首
なるようになっていたのに迷い道
継ぐ人もないのか田んぼも寂しそ
生き生きの裏に悲しみ戦中派
はるみ

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

一粹報

玉音は日本死んだ日生れた日
北朝鮮のこでぐる癖が直らない
非正規の本音を拾う縄のれん
赤ちゃんが笑う周りが皆笑う
父と母セツトですます年回忌
非正規の中にゴロゴロ大学出
沈黙の分だけ恐ろしい噴火
談合のセツトをベンが暴いてる
昭和史に残る陛下の生の声
こでぐるな親の意見はまともだぞ
満月が瘦せて増殖する秘密
外に出る杖を愛妻セツトして
セツトする金もなければ髪もない
こでくると過去の悪業顔を出す
エリートの子アスとセツトでお見合に
玉音放送で戦争の区切り
玉音を耳掃除して聞いてます
不倫記事こでくり回すワイドショー
縁談をこでくり回しご破算だ
喪服セツト出番ない様祈る日々

かつ子 玉音が日本の平和変えました
恵美子 非正規の坊さんもいる盆と暮れ
安子 非正規の女優が主演じきり
好栄 若者の非正規妻が滅び出す
はるみ 大奥は非正規妻のたまり場だ
洋々 やつと職就いて非正規とは無念
妻子 玉音は何の玉かと孫が問う
無限 玉音を孫に伝えて浄土行く
彰夫 非正規の僕にもあつた絶頂期
三千代 心臓が動くあいだは恋もする
賢悟 セツトされた親の土俵で物足らぬ
みゆき 燃えつきた球児と蟬の夏が行く
毅 エゴと欲同じ貉の穴に住む

方言「こでぐる」はませ返すの意

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

晴天にラピスラズリのペンダント
落葉さえなければ欲しいサクラの木
工事中まではナビにも分からない
激論も枝葉のことで幹をみず
記念樹が茂つて子らはみな巣立ち
桜からもみじにかけける観光地
味噌汁の匂いがしてる朝が来た
味噌汁に秋の味覚が入りだし

川柳大阪 山崎 珠生報
芳香 珠生

しようが煮か味噌煮かもめて焼いた鯖 まつお
脳味噌の古いへひとふり五七五 (鈴いさお
脳味噌にいいお薬はおまへんか
脳味噌が固いとばやく五七五
能天気島根県民愚弄する
母からの味噌だね持たせて嫁にやる (今万紗子
歩かねば悲鳴を上げる膝小僧
Jアラート鳴つたら何をどうするの
大雨の警鐘が鳴る温暖化
カラカラと浴衣姿と紅の緒と
民宿の一期一会にはずむ酒
民宿は古里のよう母のよう
困り裏の火ババの民話で夜が更ける
秋風がそつとふところ通り抜け
世界戦大国バック我日本 (中) 功
お茶席のマナー肩凝る足しびれ
東大は言葉のマナー教えない 一歩
京都塔の会 山田 葉子報
血管の刺す場所さぐる針の先
獅子唐も偶に舌刺す響めつ面
スクープか女優の帽子深過ぎる
腕白つ子あみだに帽子かぶつてた
その罪は被りますともおさんです
好きでした言えた時には白い髪
番号はスマホが代わり覚えてる
やんごとなき糸図飾って青テント

一平 美穂 金祥 幸子 振作 昌鼓 凱柳 蟹郎 美津子 稲佐嶽 重忠 八千代 真理子 一粹
弘子 元一 福子 泰夫 多津子 五月 弥生 北舟
美世子 志津子 満知子 福貴子 武臣 紀雄 堅坊 和

振り向けぬままに背中を刺す視線

突き刺す目ボーカーフェイス切り抜ける

さりげない言葉も時に針になる

幼稚園児揃う帽子が格好いい

帽子かぶり日傘もかぶる炎天下

千羽鶴吊るす糸にもある折り

ドロロンに乱れた暮らし覗かれる

いつかくる一人暮らしに夢を編む

一人暮らしひびくってるマイペース

ハモを刺す技も確かな京の夏

トントンカンな意見まとめて串に刺す

酔えば口癖金に糸目はつけないぞ

縁側で針と糸との睨めっこ

子に頼るそんな暮しの中にいる

ちよつとチクリとしますと言つて刺す注射

わたし刺して不味かつたらう蚊に詫げる

追いかけて母がかぶせる夏帽子

万が一があつてはならぬ一の糸

結び目をゆるめて好きに翔んでみる

角帽をかぶった写真セピア色

タテ糸も横糸もしつかり三世代

三面の記事に暮らしの裏表

良心に刺さった棘は抜き難し

南大阪川柳会

津守 柳伸報

更紗 武臣

哲子

ふりこ

紀乃

ルイ子

朝子

洋志

文代

葉子

保子

義昭

弘之

美義

かずお

宏子

万紗子

牛延

満子

光久

求芽

則彦

英旺

歯車を止めて螢火遊ばせる

歯車になるのが嫌で風来坊

茶柱だサマージャンボを買いに行く

茶が入り苦吟の座にも暑い風

新茶きて古茶はしばらくほつとかれ

オーイお茶一度は言つてみたいボク

コイン入れガタンと届く流行の茶

わだかまりお茶一杯で溶けてゆく

朝一番仏と僕に熱いお茶

縄のれんととりわけ旨いひとくち目

還暦を過ぎてても我が子特別に

約束がとりわけ暑い日に決まり

とりわけて言う事もなし日が沈む

とりわけて和気あいあいのピヤガーデン

母の味とりわけ旨い煮転がし

取り分ける母の気配り愛あふれ

ユニフォームの泥が勲章甲子園

太陽がほしいとりわけ仙台は

とりわけ重い陛下の反省かみしめる

メモランダムあふれていきます秋ブラン

笑い声あふれるお家子だくさん

丹精をこめた田畑に泥あふれ

遠慮せんとおふれる程に注いでんか

あふれる想いも余して青りんご

心齋橋にタイ語ハンクル中国語

一理あるコメント耳を傾ける

コメントが通らぬ今日も朝帰り

郁夫

一步

真佐子

修

シマ子

恭昌

裕子

忠昭

あや子

篤

ルイ子

ひさ乃

柳右子

柳伸

あさ子

弘委智

たもつ

直子

国和

ばっは

タカ子

実

昌紀

楓

栄子

弘子

和雄

ピカソ観てけつたいな絵と子は素直

コメントの中にピリッツと山椒の実

勝ち力士コメント言えぬ荒い息

控え目のコメント敗者への配慮

嫌ですな記録と記憶ない政治

川柳塔わかやま吟社

川上 大輪報

知香

大輪

徑子

紀久子

あきこ

よしこ

ほのか

克子

秀子

小雪

紀子

寿子

日出男

富美子

茶子報

大鯨

盛桜

孔美子

鈴

助太刀をして矢面に立っている
森友も加計も結局安倍ドラマ
ドラマでは役か素顔か嵌りきる
挨拶は誰にも犬も散歩道

老い二人日替わり劇の幕があく
気まま人今夜は誰とチーボンカン

君は君そして私は好きに生き
老い独り喝采の無い無言劇

幽霊に肩叩かれた人違ひ
友が逝くそして我が身を置き換える

臆病でいつも誰かにしがみつ
小麦粉の自家製パンを食べている

誰かいなすくに名前が出てこない
稲刈りに息子や孫達も助太刀に

安物の靴で助太刀決めている
助太刀が先に倒れて泣きぬれる

仇討ちも助太刀もない平和な世
そして稲刈りイノシシの迷い道

苛立つて怒って泣いてそして寝る
北の暴走誰か早く止めてよ

先頭を誰にするかでもめている
誰からも好かれる君に身を焦がし

負けましたそして私は蚊帳の外
誰あろう妻が遠方操作する

川柳同友会みらい(鳥取)吉田
家庭内別居冷房寒すぎて

茶子 弘子 ゆり子 綾子 実満 裕 草文 重忠 蟹郎 照彦 和子 螢

葵 陽子報

八尾市民川柳会(大阪) 中菌

清報

磯の香の満ちるふる里今は客
灼熱の太陽夏のプレリユード
9秒台よっしゃよっしゃの総拍手
磯貝が語る海辺のあの事件
さわさわと心を掴む秋の彩
国追われ共にする食糞う

善輔 さゆ子

ブラザ川柳(大阪) 梶原

弘光報

その時に飾る自画像描いています
マジヤンにはまって孫と軽口を
ご近所さん距離を持ちつつお付き合
持て余す老いて突つ張る欲の皮
持つ人にどんどん寄って行く諭吉
真つすぐに停めたつものパーキング
無理承知高嶺の花に横恋慕
無理筋を直言あとは首洗う

清乃 和代 悦夫 克三 淳司 文子 弘光

テイケアのたまもの認知やわらかい
偶然に生かされているこの世かな
しあわせは形じやないよ心です
人生が二度あるならばやり直す
根性の働き方はもう古い
十六夜に見とれてちよつと遠まわり
やつと得たゆとりの中で出る欠伸
生きるとはなんと儂い夕焼けよ
重い荷を軽くしないと渡せない
ジョッキで乾杯姉妹皆元気
舐めるなど西瓜丸ごと持ち上げる
私だけの橋ゆつくりと渡ります
膨らみ過ぎの夢は弾けるほかはない
雑学の秋どんぐりを実らせる

菜美 和代 節子 かずこ 美恵子 七絵 和之 真帆 安子 章子 陽子 花蓮 游子 公弘 壽峰 朋子 森子 あり 両文 耀一 紀雄 千里 常男 寿之

手塩掛け子も球根も待つ発芽
花も根も全部魅せませすヒヤシンス
磯までを逸る帰心の太漁旗
汗掻いてかいて夏の空に挑む
磯笛の海女は夫が命綱

高鶯 慶子 恵 かこ 欣之 北澤 穉民報 かほる 哲男 稠民 真由 開子 幸子 照代 美智子 善輔

奇数月金の工面を迫られる
良 雄
無理をして買ったダイヤが溝に落ち
久美子
無理をしてチャック閉めたら肉挟む
五月
無理をした祝儀に合わぬおもてなし
正子
詰め放題ビニール袋悲鳴あげ
一 彌

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

左手の助けを借りてこそ右手
久子
AIが右脳の域を脅かす
純子
右派政治長期続けば波が立つ
長一
コスモスの迷路に親子右往左往
柳 童
添え書きにハツと痺れる一行詩
堅 坊
一筆を添えて欲しいな年賀状
孚 彦
添う心消え失せている政治
桂 子
添いとげる好きな言葉も古くなる
郁 子
青空に寄り添われてる車椅子
美佐子
慕そうじ終えてべったり汗染みる
奈津子
応援が終りべったり座り込む
信 男
炎天下背は汗まみれボランティア
一 弥
知らぬまにべったり残る青い痣
正 子
ポマードをべったり付けてりーゼント
守 啓
べったりの膏薬も華勝ち相撲
黒 兎
人生は下り坂からいい景色
則 彦
ストレスの元は夫の生返事
春 代

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤 宏之報

最盛期きゅうり見るのもいやになる
あやこ

さよならも云わずに逝きし我が夫は
ひろこ
ご先祖へ手塩にかける盆の花
美佐子
鐘を打つ余韻で盆の霊送る
ゆたか
もう少し楽し遊んでから逝くわ
美 草
西瓜見に胸おどらせて五ケも見た
かね子
今日の汗シャワーで流し夏を脱ぐ
瑞 枝
お盆には家族に会いに来るアゲハ
美 穂
提灯を仕舞って盆の送り酒
紀の治
植えてみるいつか誰かに役立つ木
恵 子
二百まで生きていないと片付かぬ
雨 奇
また戻るからねと夫は盆の舟
千 代
今更に寝るより楽はなかりけり
登美枝
雨よ降れ相合傘のタイミンダ
令 汪
答弁は問題点をすり抜ける
宏 之
二代目は口だけ腕はもう一つ
日 枝子
仲間それぞれ生き方違う秋の雲
仁

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

手を触れず水色だった初な恋
高 鷲
鴛鴦が極楽行きの風を待つ
六 点
朝帰り事情聴取がまだ続く
シルク
老いてなお水に流せぬ事もある
か こ
もう帰ろうか君の待つ青い空
ちづる
震災で知る水の怖さと大切さ
朋 子
流鏝馬の走り抜く風受く雅
さくら
母さんの肉じゃがが待つ里帰り
清
帰るとこ森しかないの青い鳥

川柳塔まつえ吟社(島根)相見 柳歩報

水買えば明治の亡母に叱られる
登志子
遭難者むさぼり飲んだ水の味
フ ジ
無罪出て集めた力花が咲く
千鶴子
接戦をオウンゴールで終わらせる
ひろ介
バス停に子等見送りし赤トンボ
美 喜
水やりとえさやり頼み主婦の旅
喜久子
支持率に何かウラの手ありそうだ
雄 太
勉強にゴールなどない人生だ
真
日野原氏見事なゴール一世紀
かつ美
成り行きと風にまかせて世を渡る
久仁雄
日本の風雅引き継ぐ両陛下
一 文
甘い水に蜜はいつも騙される
泰 子
拉致の娘の帰る日遠い日本海
いさお
終戦日知覧の風は忘れな
洋 一
願わくば末期の水は酒頼む
久仁子
風紋を描きまあるいまるい風
壽 峰
名水の里で熟睡した銘酒
欣 之
見えているのに一鳥も帰らない
みつこ
ひっそりと帰国してますメダルなし
章 司

仏滅だ今日は母さん低気圧

脳トレに右脳左脳がせめぎあい

苦手でも噛みついてゆく生きるため

振り上げた拳を星が押し返す

星空の点字アイラブユーと読む

星になった友が呼んでもまだ行かぬ

山や谷人生語る喜寿の顔

山はしずかに四季それぞれを受け入れる

山掛そばワザビがツンとききすぎる

ピカピカの山勘ブルル閉める窓

出雲富士世界遺産をしのぐ山

あの山はエネルギーすごい折つとこ

気持ち良くビクともしない山である

山際のでこぼこ道の墓参り

山びこは私の愚痴を知っている

Ｉターン山はやさしく出むかえる

またかいなドラマ山場に鳴る電話

宿題の山をこの世で片付ける

百万円数えるときは舌が要る

えんま様に舌をびよんとのはされた

お父さんあなたの舌はおかしいよ

突然のＪアラートは舌足らず

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

これと言う仕事はないがめしは喰う
今はもう妻の料理が一番よ

雪代

みちを

聡美

哲子

たけし

徳利

あきら

注湖

桂子

ゆき

とも子

俊子

朋子

邦代

静枝

孝子

輝山

瑞人

柳歩

弘充

紗季

ひすい

寿代

戦力外それから長い職探し

輝もアウトウエアー夏まつり

ここの妻はいつでもアクビする

連発の花火の影に父浮ぶ

これまでの常識いまは的外れ

リビングがみんな帰って冷えている

泣きながら戻る子母が包みこむ

補聴器付け私に戻りおしやれる

夜干して朝には乾く夏衣

いよいよか行きつ戻りつ脳回路

残業か家事当番か迷う夫

共働き支える親があつてこそ

クール ज्याパン職人仕事生きている

背のびしている私もう気づいてね

東京弁半分まじり息子が帰省

制服を纏うた時代毛があつた

敬老会そろそろ止めにする時代

作業着が汗も涙も知っている

原点に戻れば広く青い空

ネクタイをはずし戻つた人間味

ふつくと新米ぼんと卵割る

3人も横綱休みゃこりやアウト

嵐といえは寛十郎という時代

値打ちのない時代物です頑固です

小学時代午前授業の農繁期

儲けにはならぬが好きな野良仕事

優しさがないと男としてアウト

柳明

英坊

健二

雪菜

洋子

祐康

初音

たまえ

こみつ

千賀子

りこ

利子

ひろ介

ひとみ

宏造

奮水

正和

美籠

紀華

純

ヨシエ

修平

靖鬼

公子

つな子

哲男

かずお

川柳塔さかい(大阪)

内藤 憲彦報

診察券なくてもどうぞ掛り付け

方言に馴染んで終の住処得る

真実を追うベン牝豚が手に馴染む

診察券集めないのに増えてくる

来て嬉し家族が集う盆疲れ

その集い酒は出るかと念を押す

集めることすらも忘れる認知症

コンビニのレジ横にある募金箱

ゴシップを拾い集めて週刊誌

10秒さる注目集め大偉業

ドケチです集めるだけで使わない

うきうきと葱を刻んだ頃もある

何かある妻うきうきと靴磨く

記念日にバラ一本とラブレター

うきうきを見られたくない自尊心

ストレスを捨てにうきうきバスツアー

うきうきとすれば足まで軽くなり

核を持つ国を集めて叱りおく

躰いた石を集めてする供養

丸腰の人が集まる縄のれん

集中の二本出で荷をおろす

ガラクタばかり集め形見のものがない

小銭集めてよう稼いでる販売機

冷蔵庫浚えりやでできる酒のあて

寄付金は右へ做えてしています

愿

玄也

誠一

清

妙子

好

舞夢

みつこ

ばっは

廣子

としお

和夫

ひろ子

志津子

扶美代

さくら

かりん

ダン吉

敏治

若芽

世紀子

俣子

五月

時雄

八千代

寄付金集めむかしのよういきません(向) 清

北朝鮮集めた金は皆軍備 光 雄

票集めに長けて大義のない政治 憲

花々が嘆く暑さになしおれ ヨシ枝

ハンドメイド懐かしい音ミシン踏む ゆみ子

母の膝涙を拭いて味方する 唯 教

腹の虫鳴った静かなミーティング 雅 美

ハグされて何故だか胸に満ちるもの みつ江

ハイタッチ仲間意識が妙に湧く 澄 空

ハルカスから見える生駒の実る秋 憲 彦

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

昇り龍風も飾って運氣上げ 健 二

天国にのぼるつもり杖を買う 求 芽

卒婚を楽しんでる秋日和 武 彦

趣味映画でも見る映画は違ってた 多美子

奥さんと呼ばれてからの長い日々 美津子

君となら高所恐怖も観覧車 歌留多

憎しみを半ば削って人となり 美佐子

のほりつめた席は冷え冷えしています(氷) 玲 子

半分は嘘とわかって貸してやる きらり

不器用に生きた自画像ありのまま ヨシエ

泣き明かし眠れぬ夜も陽は昇る 雅 美

五階までエレベーターは使わない 久 子

説教を半ば許した顔です 千鶴子

ワイドショーつけたら家事がはかどらず(岩) 玲 子

夫へ期待四十半はであきらめる 宏 子

半ばから小言に誰も居なくなり 昌 代

ストックがみるみるはける娘の帰省 満 子

思い出の話は尽きぬ茄子の馬 美 籠

記念樹は小らの大志と共に伸び 黒 兎

消費期限と睨めっこする在庫表 遠 野

終活の半ばでお呼び掛りそう 耕 治

早寝早起き人間らしく生きている 美智代

密談の続きもあると三次会 見 清

いざごは避けるこの先しれてます 正 彦

人生はサヨナラあってこそ映える 則 彦

勢いで登り下りられなくなった 眞 澄

ストレスの爆発だ夫よ覚悟 蕉 子

のほり切ったら手離す物は決めてある 五 月

雑魚なりにキリリと登る八十路坂 堅 坊

中途半端尻に一鞭当てている 肇

肩書きを捨て切る二枚目の名刺 眞理子

あかつき川柳会(大阪)山本 昌代報

宿敵を倒し燃え尽き症候群 敏 子

ミサイルと地震カミナリ火事に雨 直 子

飽食の今の時代を知らぬ母 万 作

丁寧な今日を磨いて生きている たもつ

そろそろと積ん読崩す虫の声 栄 子

母になる覚悟を知った分晩時 郁 子

磨き甲斐ある原石に巡り合う 克 己

稀勢の里日本中に失望が 和 雄

七十年磨いて頭だけ光り 鮎 子

五つ星超えてた母の塩むすび 鈍 甲

やっと秋日本の四季のありがたさ 隆 昭

ドンクリの落ちた所が川の中 信 二

逆縁を受け入れられぬ父と母 富貴子

へその緒がカラカラと鳴る母の撒 浩 子

出会いから運命の糸たぐり合う 康 信

逆風に耐えて男の技磨く 壽 峰

長時間診察待つて倒れそう 一 文

人間を磨き足らずにする挫折 高 鷲

俺の血をたっぷり吸った蚊を倒す ひろ介

運命のいたずら文春に出会う 一 歩

母百句読み目頭を熱くする 正 明

悪政を倒す力は民の声 善 之

母よりも恋しい人と今は居る 秀 夫

亡母より生きてみたいと欲を出す 千 代

一触即発ドミノ倒しになる世界 義 康

子宝と我ら十人生んだ母 喜代志

もつと磨け勿体無いとDNK 恵美子

運命のいたずら大金持ちになり 哲 男

心の垢磨けば素直なる心 朝 子

徳利を倒して愚痴が長くなる のぶ久

三度目の偶然運命の人だ 千代美

毎日を磨くエンピツ持っている 紀 乃

居酒屋に「おふくろ」と呼ぶ人が居る 廣 子

凄腕の上に努力を重ねてる 久美子

おおきにとごめんなさいで百を生き 穩 夫

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏道報

でこぼこ道歩み金婚菊の酒 美津子

刺身のつま菊ひとひらのおもてなし 紀 華

仏さま庭の菊です赤白黄

宮様の婚儀に映える菊の紋

わたくしが我慢したからまだ夫婦

外向きは礼儀正しい娘たち

お料理はすべて頂くのが礼儀

おだやかに一日終えたか子供たち

コスモスがゆれてやさしくなる気持

頼りない杖だが支え合っている

淋しいな蟬一匹で鳴いている

おれ転勤皆はとづくに知っていた

免許証はとづくに返し家族無事

年賀状とづくにやめてスマホ打つ

もうとづくにトラの優勝あきらめてる

円満です少しへこみの丸だけど

朝の読経ひと日平和であるように

青空を軍機かすめる美らの海

秋暑し夏の尻尾がついてくる

鉛筆とわたくしだけの窓がある

守りたい人が居るから頑張れる

本心はとづくに見抜かれています

木の駅舎駅長さんの菊の花

礼節を説いた孔子が哭いている

四君子の一翼になう菊の香

詐欺防止マンホールまで注意書き

さし芽した亡母の菊にも早やつばみ

諦めよ自慢話が始まった

介護する長引く病みにいる覚悟

わこ

正彦

章子

敦子

哲男

ひとみ

光子

能子

勝弘

盛夫

浩司

りこ

武臣

和宏

千賀子

利子

みよし

いわゑ

千代

光久

哲子

秋果

伯備

順子

弘子

洋次郎

宣子

母からの電話に椅子を用意する

思いやりあれば自ずと礼儀あり

お歳暮は何時止めるかが悩ましい

蔓延ばすかほちやに礼儀説くパツタ

立ち向う画布に明日の夢を描く

長柳 会(大阪) 辻村 ヒロ報

残り火が消えないように抱いて生き

鯛焼きの身中餡こで評価割れ

何も無い楽な一日うんざりだ

お金持ち金利吹っ飛び四苦八苦

小遣い値上げ妻は怒りのパツタ印

里帰り土産両手に汗拭けず

うめき声洩らすベルトのバイキング

駄々っ子が菓子で豹変笑い顔

投げキッスされて自信を持つ若さ

西国のお寺を巡る朱印帳

良き伴侶持つて余生に花が咲く

苦も楽も持ちつ持たれつ二人旅

人の字は持ちつ持たれつする姿

アリ騒動海外からのいらん客

核を持ち脅し笑顔の北のおさ

金ないが少しばかりの愛はある

主婦の眼はレジの数字睨みつけ

無理せずにつくくりしいと放つとかれ

無理なこと微分積分の天

的を得たそのひと言に救われる

宏造

じろう

一徳

恭子

野鶴

ヒロ

弘美

啓二

明信

光弘

孝

福子

靖博

直樹

美子

孝代

ふみ

淳司

登美子

幸子

正博

隆彦

三和子

一男

英美

苦勞した同志集えばいぶし銀

持つべきは友喜びも悲しみも

やさしさを持ち寄り母を安堵させ

二二三病持つて元気に生きる幸

夫婦危機たいロープで結い直す

気が付けば無理と言ふ字に囲まれる

出来ぬこと増えてまあるく老いている

岩美川柳会(鳥取) 山下 節子報

飲み会で聞く先輩の武勇伝

よく光る星になる気で生きている

悪あがきするほどお金逃げてゆく

善の面付けた悪魔にささやかれ

蚊と蠅の小さな命絶ちました

土になる前に一句の花咲かす

師の影を踏んで錦を飾れよと

土掘れば政界あばくごみの山

面白可笑しく聞かす後日談

婿さがし働きの者と聞かす後日談

勇気出し今さら聞かぬ事聞く

聞く度に故郷遠くなつて行く

治りました主治医心に聴診器

安堵した顔で帰らず聞き上手

悪知恵も欲も無くなり第三章

悪友は私の無二の友でした

聞き流す技を覚えて波立たず

お坊さんがサンングラス掛けスーツ着る

たけし

ともこ

和代

正美

洋二

和子

旅人

重忠

清信

一平

一瑤

一粹

天翔

茶子

公子

美恵子

蟹郎

たぬ

菖子

幸安

敏子

弘子

雅女

真理子

振作

聞くだけは聞いてあげると聞いたきり
足の裏土の感触忘れてる

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

温暖化むかしの天気にはならぬ

彰夫

天気図を見てから明日の予定立て

節子

お天気屋ご機嫌とりに一苦労

節子

長生きをしてます私ノ一天気

節子

お天気屋止めなきや遺恨残し逝く

節子

皆が居るだけでほんわかする食事

宣子

ほんわかと抱かれていたい母の胸

宣子

小鴨川ほんわか浴うた二羽のカモ

祐子

ほんわかと青春もどるクラス会

紀美恵

ほんわかと育てた筈がテロリスト

野蒜

ほんわかと曾孫十人盆の舞い

妻

三角の底辺に住み日々のどか

由紀子

耳鳴りと惚けと脚気の三重苦

石花菜

まだ早い三途の川で引き返す

鬼一

三四で飛び越え行こうよいいところ

玲子

再三再四何を言おうと無視の国

龍枝

カラオケの指名なくてもマイク持つ

完司

変な題「おーい中村君」大ヒット

次男

関係ないかと探すおくやみらん

康子

居眠りし名指しできよとん恥をかく

日出子

名指しされ真つ赤になつた若い頃

風露

米寿祝つてお花が届き嬉しがり
度度はしないがガチンコ勝負する
電子脳付度なしで攻めてくる
女心付度できぬ秋の空
付度の気配りの有るメッセージ
誰からも付度受けずマイペース
付度をしすぎて愛は又終わる
被災地へ真の付度あれよかし
幻想にとっぷり浸る老いの恋
アウトバーン軋むタイヤの聞く悲鳴
傘寿過ぎ二〇インチに守られる
四台目のタイヤと長い旅をする
すり減ったタイヤのような安倍総理
変わり種自転車三角のタイヤ
がたがくるタイヤお前も黄昏か
すり減ったタイヤに自分をなぞらせる
父さんの墓へと続くタイヤ跡

美代子
いさお
フジ子
光男
真雄
清
みつこ
絹子
高鷲
喜代子
扶美代
一文
六点
信二
彦弘
瑠美子

岸和田川柳会(大阪)

石田ひろ子報

稜線の向こう天国かも知れぬ

三成

半島を線引いたのが今禍根

笑司

嫉妬の目線浴びながら咲く

胡蝶蘭

体罰と嫉線引き難しい

珠子

線引いて辺野古の海を荒らしてる

康信

ウエスト線気にしてるだけまた食べる

和美

屈託のないひまわりの直線美
荷を下ろしホツと息つく肩の線
三線の音色乱れる基地の空
本場のレッドラインは核使用
生かされて生きて命をつなぐ線
素晴らしいギャグだな山が笑いだす
善人を演じるギャグはつまらない
イメージを壊されました大欠伸
安倍さんの詭弁に猫が欠伸する
敵わんなぞない怒りなやギャグやがな
心からお詫びのギャグのまた新手
ギャグ一つ残しわたしのエピソード
喝采を浴びた日想う老人ホーム
喝采を浴びて泣きたくなるのです
一風呂浴びて今日の幕引く
祖父母孫偶然同じ誕生日
偶然を形にするとシャボン玉
偶然を装い彼女待ち伏せる
生簀でもメタボが非難浴びている

六甲川柳会(兵庫)

市坪 武臣報

恋らしき風がかすめて夏終る

武彦

着地点決めてゆつたり生きてる

千賀子

夕顔が少し涼しさ持ってきた

盛夫

ここだけと言えぬ友だちみんな逝く

弘

地図に無いよ子供が守る秘密基地

和宏

グーグルが教えてくれる未来地図

ひとみ

一日で地図が変わつた関ヶ原

じろう

助手席の妻に預けた地図は無駄

「さぞやかですが」氣遣いうれし箸袋道

生きざまの地図をえがいて夢を追う

追求に涙落とされ矛取め

旅土産まだ生かされる長寿箸

熱風が虫の音聞いて涼風に

友よりの電話一声生きてたか

冷めたいと思つて洗う今朝の顔

日本人ナイフフォークに負けぬ箸

八月の畳に友の過去拾う

箸を持つ感謝の氣持ち湧いてくる

悪友と呼ばれて更に好きになり

バーゲンになると素早く立ち向かう

万歩計涼しくなれば頑張るネ

ふるさとの祭囃子は幻聴か

遠来の友と一夜の箸二膳

夢語る友は今では遠い空

戦中戦後生きていささか味音痴

五欲まだ畳めないから生きられる

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

盛り付けに迷つた時の白い皿

埋めずにはおれない団塊の余白

白黒をつけたい友が先に逝く

白い雪どんな色にも負けてない

かくれんぼした妹は雲の峰

平凡という素敵な日々を暮らしてる

まあ素敵初めて会つた時みたい

機械より緻密素敵な指捌き

素敵な人私一生捧げたい

謙遜にちよつぱり自慢含んでる

含むとこあるのか妻が優しすぎ

含まれた棘ある言葉丸くする

生年月日が含ま笑ひして通る

なんぼでも口から釘をだす大工

小悪魔の含み笑ひに嵌められる

古い女房も若い頃にはミス日本

お気に入りレストランまた閉店に

燃え尽きたアラフォオーの星伊達公子

冗談に本音含んでる便り

秋気配小さな旅のプラン練る

豪華客船見に来て客を眺めてる

ミサイルを射つ国同シアア圏

すべり台の上に忘れてきた時間

アジアの言葉複雑な顔をする

富柳会(大阪)

関よしみ報

ふわとした文句に羽が生えている

ありがとうそしてさよなら千の風

ちびつ子の文句にキラリ正義感

まじないを貼り付けしたたかに女

浮き沈み大漁旗を待つ夜明け

鎖国から維新の獅子が成す夜明け

いくつもの昨日を捨てて待つ夜明け

生命線もつと伸びると歯を磨く

微熱帯び言葉おんなから女

満作

舞夢

桃花

浩二

弘子

義

すみ子

恭昌

善之

紀子

蕉子

捷也

楓楽

敬子

希久子

昭

みつ子

文重

田鶴子

正治

慶子

澄子

武人

恵

一文

奏子

呱呱の声ひびく罍は夜明け前

そして秋凹んでなんかいられない

ピリオドを打つてこれから白い画布

夜が明けて今日一日は膝に母

川柳さんだ(兵庫)

田中 章子報

生きて行く遊び心はど真ん中

遠吠えのミサイル遊び北の国

見飽きない遊び疲れた子の寝顔

古稀の坂越えて言葉の遊び知り

塾帰り電車の中で鬼ごっこ

子の頃に将棋で遊ぶ山崩し

酒飲んでまたくどくと結果論

政策がないから党首だけ替える

初孫を抱いて許した父の堰

素振り千本結果を出したホームラン

野良着にはしたたる汗と自負もあり

血がしたたる魚を捌くすごい妻

地場産のしたたる汗が見えてます

ページ繰るしたたる英知深い示唆

朝露が命救つた瓦礫下

じんわりと汗がしたたる妻の問い

びしょ濡れの水掛不動法善寺

滴る汗土俵に埋まる銭掴む

麦飯に丹波特産とろろ汁

こだわりがいつか夫婦の仲で溶け

何回もあつた再生するチャンス

ズルズルと未練引き摺るストーカー

寿之

アキ

よしみ

森子

順子

祐康

健彦

義徳

利子

歳子

耕治

花門

キヨミ

野薫

雅尚

好文

宣子

ヨシエ

博

聖也

富夫

ひろ介

つな子

優子

ひとみ

修平

ずると父兄児童に負けた綱
 手探りで掴まえたのは君だった
 手探りの階段下りる薄明り
 はてさてどうする手探りの終活
 寝ながらも母の手探す甘えん坊
 若夫婦子育て模索共稼ぎ
 暗がりのかくし財産この辺り
 宿浴衣妻はだんだん若くなる
 愛のある内は温度差気にしない
 伸び代を信じ寄り道回り道
 下校児が手を振る父のコンパイン
 熟柿一つ減ってカラスの子が育つ
 二百回続いた句会おめでどう

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

休み明け顔がそろった通学路
 血の通う介護だったと仏さま
 押花にすると大地と血が通う
 学校を除けて酒場と映画館
 通つたな夢を貰いに映画館
 カレンダー陣取っている医者通い
 領取書メモにも余る医者通い
 ポイントが店へ通わす倍倍日
 食通の瘦せているのが気に入らぬ
 地球抱き地球とところ通わせる
 医者通いここじゃ通じぬ好き嫌い
 月と心が通い合うまで見つめよう
 素通りをされて気付いた恋心

俊昭 光久 一子 哲男 厚子 千津子 武彦 美籠 恭子 真由 哲夫 正和

遅れると電話しながらドアの前
 又しても遅れる理由考える
 没ばかり発達遅れなくそだ!
 出遅れてアクセル踏むとネズミ取り
 遅れても最後を飾り大拍手
 遅れても家宝はちゃんと待っている
 デートには五分遅れて行くマナー
 決断が遅れて明日の風のれぬ
 焼酎は月一升と決めておく
 手探りの私を月が照らして
 月一度破顔一笑句の仲間
 納まらぬ心を月に笑われる
 私が笑えば月も微笑んだ
 かぐや姫月の兎は隠し子か
 月見草じつと見ている車椅子
 天国で月を見ているガガーリン
 月のない夜は心を盗りに行く

川柳花の輪(大阪)

岡本 薫報

ロマンスにどきどき今は階段に
 検査結果どきどき座る医者の前
 気がつけばゆっくり老いが進んでる
 娘が家に彼氏をつれてくる言う日
 ゆっくりと地球回るになぜ急ぐ
 どきどきが怒りに変る娘の帰宅
 子わくわく親どきどきの一人旅
 言い過ぎた後悔ジワリ湧いてくる
 あの人は来ているかしら同窓会

貴恵 美英里 岳人 重忠 久芽代 滋 泰山 美知江 玲坊 久江 清 公恵 紀美恵 大鯨 妻子 石花菜 芳光 薫報 笑子 昭好 陽 みちる 亜成 泰子 風 敬子 あや乃

平均寿命越えてゆっくり残り福
 鈍行の旅なつかしいなか道
 ゆっくりと泥をはかせる妻の技

川柳塔わかやま吟社(前月号)川上 大輪報

本来の私がセピア色になる
 エプロンの下で叫んだ捨て台詞
 小銭ならあります割り勘にします
 一円の教えを軸に生きて
 小銭掻き集めて急ぐ吉野家へ
 釣銭はいつも備えているゆとり
 小銭貯め人はあれこれケチり出す
 侮つた小銭私を振り回す
 お利息と言われるほどでない金利
 本当の小銭は汗のにおいする
 本当はいつも笑って居たいんだ
 味噌汁に何度浮かべている平和
 毎度という言葉に込めている感謝
 良い知らせ確かめたくて聞き返す
 もう一度なんて言わない今は今
 巻き戻し出来るものならもう一度
 もう一度聴きます神に誓えるか
 もう一度運とガツプリ組んでみる
 もう一度はいてみたいハイヒール
 やり直してできる時間はたんとある
 もう一度失敗すれば首が飛ぶ
 約束の軽いまたねが残る耳
 二度漬けは禁止世間は甘くない

勇太朗 やすの 薫 知香 ちづこ 紀久子 まさみ 愿 寿子 准一 富美子 保州 小雪 京子 徑子 なる子 秀子 よしこ ほのか 克子 めぐみ 日弘 紀子 あきこ 大輪

柳界展望

★「第11回岡山県川柳大会」は、9月9日に開催。同人成績。

天位 石橋 芳山

恋文の返事を持つてい
る壇輪

天位 両川 無限

剣先がいつも弱者の方
へ向く

★「しまね文芸フェスタ
2017 鳥根川柳大会」
は、9月10日ビッグハー
ト出雲で開催。同人成績。

天位 竹村紀の治

共謀罪箇に挟まった貝
柱

天位 斉尾くにこ

夏草が生家を食べてし
まいます

天位 両川 無限

ゴッホからモネへ自然
は芸術家

天位 新家 完司

この国の資源は優秀な
僕ら

★「第67回富田林市民文

化祭川柳大会」は、9月
16日富田林すばるホール
で参加123名の参加で開催。
同人成績。

秀句 安福 和夫

ヒグラシが目覚し代わ
りもう秋か

★「第44回東市民川柳大
会」は、9月30日東大阪
市立社会教育センターで
143名の参加で開催。同人
成績。

秀句 池 森子

惜しい愛しい深い絆を
握りしめ

▽訂正とお詫び△

○10月号、P.92下段8行
目、揮井敏治→澤井敏治。

P.1226行目、おを付けて
少しきれいになるお星↓
おを付けて少しきれいに
なるお金

▽新誌友紹介△

豊橋市 高柳 閑雲

紹介者 木本 朱夏

枚方市 佐藤 武紀

紹介者 海老池 洋

次回常任理事会 11月7
日(火)AM10時

新同人紹介

有^{あり}海^{うみ}静^{しず}枝^え

— 蘭幸・完司・勝弘推薦

高^{たか}杉^{すぎ}力^{ちから}

— 蘭幸・完司・勝弘推薦

上^{うえ}村^{むら}夢^{ゆめ}香^か

— 蘭幸・完司・勝弘推薦

中^{なか}村^{むら}伸^{のぶ}子^こ

— 蘭幸・完司・勝弘推薦

小^お河^{がわ}柳^{りゅう}女^{じょ}

— 蘭幸・完司・勝弘推薦

西^{にし}田^だ美^み恵^え子^こ

— 蘭幸・完司・善信・茂代推薦

小^こ松^{まつ}紀^{のり}子^こ

— 蘭幸・完司・勝弘推薦

日^ひ野^の岡^{おか}和^{かず}之^{ゆき}

— 蘭幸・完司・勝弘推薦

近^{こん}藤^{とう}修^{しゅう}二^じ

— 蘭幸・完司・善信・茂代推薦

前^{まえ}田^だ洋^{よう}子^こ

— 蘭幸・完司・朱夏推薦

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 たちばな	15日(水) 14時締切 印象吟・気(互選)・読む 自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)TEL06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸和田 川柳会	18日(土) 12時開場 相撲・祈る・こっそり・タイプ	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川柳塔 みちのく	18日(土) 17時締切 巻く・しゅしぶ・流行	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 ねやがわ	19日(日) 13時開場 市民川柳大会 きかけ・軽い・運命・歯車・麓・バランス	寝屋川市 市民会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ 詳細は川柳塔誌10月号 123ページ参照
川柳 藤井寺	19日(日) 14時締切 さすらい・梅干・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊中 もくせい 川柳会	20日(月) 13時50分締切 文化・とぶ・うるさい・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳 さんだ	21日(火) 13時30分締切 情熱・続く・マッサージ じわじわ・自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳塔 すみよし	25日(土) 13時開場 余裕・背く・もしか	住吉区民ホール 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山 三幸川柳会	25日(土) 12時30分開場 ありがたいこと・元気・誘う	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 (住所不要) ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市民会 川柳	26日(日) 14時締切 犬・凄い・のっそり	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	26日(日) 13時30分開場 自由吟・ゲスト・天命・手探り	開発ビル 2F 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪 川柳会	27日(月) 18時開場 辿る・映画・反比例・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	27日(月) 10時30分集合 第75回吟行句会 当日雑感・流れる・しっかり・香	集合場所=阪急電車「松尾大社」駅改札口前 集合後～松尾大社～「京料理 とりよね」 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子
川柳塔 わかやま 吟社	休 会	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 柴原道夫

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な	2日(木) 14時締切 見栄・ゴシゴシ・黄昏	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄「奈良」駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
城北 川柳会	4日(土) 14時締切 決める・コピー・虚しい・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
倉吉 川柳会	4日(土) 14時締切 巡る・削ぐ・ぬくぬく	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
あかつき 川柳会	10日(金) 14時締切 儂い・柿・街灯・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	11日(土) 14時締切 並ぶ・平凡・地藏	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
川柳 とんだばやし 富柳会	11日(土) 14時締切 海・スリム・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL:FM0721-25-0603
六甲 川柳会	11日(土) 14時締切 消す・義理・医者・自由吟	六甲道勤労市民センター 5F JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲ビル 〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4-1-11 山崎武彦
川柳塔 打吹	11日(土) 13時30分締切 地図・こぼす・ギシギシ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
川柳塔 まつえ社 吟	11日(土) 12時30分開場 粗末・知らない・転ぶ・小さい	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市長保岡町笠浦222-1 相見柳歩
八尾市民 川柳会	12日(日) 14時締切 片時・ちっこい・傾く・雑詠	八尾市渋川町・安中町集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0075 八尾市渋川町5-2-7 中蘭 清
西宮北口 川柳会	13日(月) 14時締切 保険・養う・ぶつぶつ 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほたる 川柳 同好会	14日(火) 13時30分締切 出口・編む・かなり	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池 螢池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔 さかい	14日(火) 14時締切 悶え・任す・折句=きまり	東洋ビルディング4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月
川柳 あまがさき	14日(火) 14時締切 逃げる・朝・すっかり・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造

編集後記

★菊の露ふくんで母の針仕事
薫風

★10月1日、河北新報120周年記念・川柳宮城野70周年記念・第66回東北川柳大会に参加。その前日、石巻駅前からタクシーに乗車、東北大震災悲劇の大川小学校へ。運転手さんも自宅を流されご両親を亡くされたとお聴きました。正午に小学校跡地に着いた時、「椰子の実」のメロデーが流れハツとなった。黒御影の慰霊碑が四基。累々と刻まれた児童と先生方、そして周辺地域の犠牲者のお名前に涙が滲む。小学校は震災の負の遺産として保存される。あの日から六年半。お供えされた菊の白が目が痛かった。

★尼崎市在住の俳人・伊丹三樹彦先生から俳誌

「青群」を、箕面市在住の坪内稔典先生からは雑誌「神奈川大学評論」を戴いた。両先生は橘高薫風先生からのご縁である。三樹彦先生は97歳のいまなお作品を発表し続けておられる。俳句と川柳ジャンルは違っても、世界一短い詩という共通項がある。勉強の機会を与えられたことを嬉しく思う。今号の「神奈川大学評論」は特集「言葉と社会」を組んでいる。最終校正が済めば、ゆつくりと楽しみたい。

★同人水野黒兎（正明）さんの短歌が10月9日付毎日新聞全国版、篠弘選でトップ入選。「誤字脱字時間相手に探し出す校正部員は目業を差す」。塔まつりは10月7日。最終校正は19日。僅かに12日間で11月号を仕上げねばならない。黒兎さんが詠まれたように文字通り

ひとこと

犯人は私（か？）

毎月の本社句会でのお話は楽しみの一つですがある月、お話の方向から「話のあとで歌えと言われているが誰が始めたのか」と言われ、ひよっとしたら犯人は私じゃないかと一瞬小さくなっていました。それは平成十七年三月の本社句会でお話を仰せ付かり「灯りいろるる」について現役時代のことを中心に申し上げた後、歌をやつてしまいました。だいたい高い演

壇から広い会場を見ていると、思いきり声を出してみた気分になるらしく、とてもいい気分でした。歌ったのはテーマに添った「街の灯り」の一部です。あれは何をささやく、愛が一つ芽生えそうな胸が弾む時よその後、歌う人もほちほち出て、今では定着しているようです。他に、真犯人が居られたら、名乗り出て下さい。（吉岡 修）

「時間相手」の闘い。原稿はパソコンが威力を発揮するが、校正は人間の目で一文字一字原稿に当らねばならない。毎年のことながらまつりの後は編集部員一同大わらわである。不備もあろうかと思えますがご理解と協力をお願いします。（朱夏）

●とある料亭の一室「これが今月分でございます」越後屋、お前も悪じやのう「お代官様こそ、ウフフフ」そこへ暴れず、正しい判断が強みだ。

●香港の新聞によると、中国のAIも曇りのない目で政治を見る能力に恵まれていて。IT大手が提供するAI対話サービスにある利用者が「共産党万歳」と書き込むとすぐ反応があった。「こんな腐敗した無能な政治に万歳ができるのか」この話聞いた時には思わず笑ってしまった。いっそのこと、政治はAIに任せよう。

（まつお）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(1月号)」

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- (4)

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

檸檬抄投句用紙

「シャープ」(11月15日締切)

1月号発表

齊尾くにこ選 — 共選 — 山口 光久選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者
	〒 -	 	

○ ○

年 年

月 月

から から

半年 半年

月 月

から から

一年 一年

9800円 5000円

該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

あなたの川柳ライフに 楽しく作句力がつく 川柳塔を！

生涯を川柳の向上と普及に尽くした麻生路郎は、大正十三年に月刊「川柳雑誌」を発刊いたしました。昭和四十年七月、路郎亡き後は同人制をとり「川柳塔」と改題し、現在に到っています。「川柳塔」を発刊している川柳塔社は、平成二十六年に創立九十年を迎えた歴史ある川柳結社です。

月刊誌「川柳塔」の特徴の一つは、投句できるコーナーがたくさんあることです。誌友（誌代半年以上前納者）が自由に投句できるのは「水煙抄」「愛染帖」「檸檬抄」「一路集」「初歩教室」などがあります。

また、木津川計先生の「川柳讃歌」及び同人による作品鑑賞やエッセーなど、作句の参考と刺激になる「読み物」も充実しています。

川柳に興味を持ってこれから取り組もうと思っておられる皆さん、また、すでに地域句会などに入会しておられる皆さんにとっても、この「川柳塔」は、必ず良きアドバイザーとなって川柳ライフを実り豊かなものにしてくれるでしょう。

この機会に是非仲間になってください。そして、限りなく深い川柳の道と一緒に歩んで行きましょう。川柳塔社一同、こちらよりお待ち致しております。

◎見本誌ご希望の方は川柳塔社事務所あてにお申し込みください。

川
柳
塔
社

作品募集

1月号発表表 (11月15日締切)

川柳塔 (8句)	小島 蘭 幸 選
水煙抄 (8句)	川上 大 輪 選
愛染帖 (2句)	新家 完 司 選
檸檬抄「シャープ」 (2句)	山口 光 久 共選
インスピレーション・ナビ (2句)	大西 泰 世 選
一路集 (2句)	「クラシック」 中村 金 祥 選
「どっしり」	関 谷 真 理 子 担 当
「自然」 (3句)	居 谷 真 理 子 担 当

2月号

檸檬抄「一大事」

一路集「格別」「鬼」

初歩教室「短い」

川柳塔WEB句会のご案内

課題「だんだん」 森山 盛桜 共選
真鳥久美子

締切 11月20日 発表 11月25日頃

投句料 無 料

インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七

二〇一七年(平成二十九年)十一月一日発行

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

定価 八百円 (送料83円)

発行人 小島 和 幸

編集人 木本 朱 夏

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七

電話 〇六六七七九一三四九〇番

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

発行所 川柳塔社

本社11月句会

とき 11月7日(火) 13時開場・13時40分締切

ところ アウイーナ大阪 4階 金剛の間

天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441

おはなし「口説く」

兼題「敵」

「べール」

「ばらばら」

「引く」

「動揺」

加島 由一氏

木本 朱夏氏

吉村 久仁雄氏

藤原 ほか

米田 恭昌氏

山口 光久氏

小島 蘭幸氏

会費 1000円

投句料 500円 (切手可)

(各題2句以内)

本社12月句会

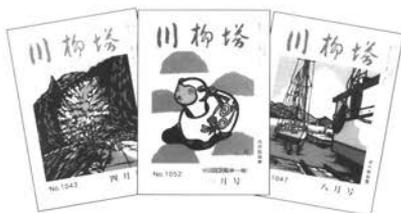
7日(木) 午後1時から

兼題「土」「結ぶ」「ふと」

「祝」「素顔」

川柳・俳句・エッセイ・小説 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4

TEL (06) 6372-1178

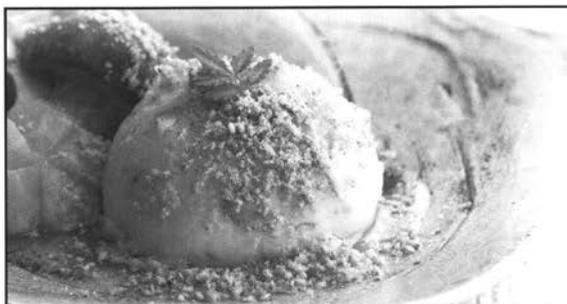
FAX (06) 6372-1196

E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

オニザキのプレミアムロースト

つばなごま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しっかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

ご注文は下記へ、ハガキかFAXにて。お支払いは到着後で結構です。

川柳の 理論と 実践

新家完司・著



実践を意識した豊富な例句で学ぶ作句法・選句法・心得
初心者はもちろん、中級者やベテランにも役立つ

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司
326頁。送料+消費税=2,000円 FAX 0858-52-2449